
2 週間の歌姫

桜花閃々

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

2 週間の歌姫

【Nコード】

N0494I

【作者名】

桜花閃々

【あらすじ】

自分の歌声に自信を無くした高校生、小松啓大と体験版初音ミクとの、歌に捧げる物語。

第1話…経緯と邂逅と感動と（前書き）

この小説は「VOCALOID」の二次創作物です。

本来の初音ミクには無い機能が含まれています。ご了承ください。

尚、この小説の登場人物はすべて架空の人物です。

第1話：経緯と邂逅と感動と

俺がそいつに出会ったのは、高校二年生の時だった。

その時の俺は運動部に入っていたがぱつとしない、実力も真ん中くらい、勉強も落ちこぼれ、テレビ番組のチェックぐらいしか楽しみがないつまらない奴だった。

でも、そんな俺にも他人に負けたくない物くらいはあった。

歌だ。

歌だけは誰にも負けたくなかった。

だが、そのためにプライドから自分の声に限界を感じ、だんだん卑屈になっていく自分がいた。

情けなかった。

そんな自分にどうしようもなくイラついた。

イラついたところで、何の解決にもならなかった。

そんなときに出会ったのが、VOCALOID。パソコンで音を教えてやれば歌ってくれる、ボーカル・アンドロイド。

俺はどうしようもなくこいつに引かれた。

こいつがいれば俺の世界は広がる、パソコンなんてまともにやったこと無いけどこいつのためなら頑張れる、そう思った。

そのために、独学で学ぼうと決意し、資料を集め始めた。

そのなかに、俺は見つけた。

VOCALOID2

「初音ミク」体験版。

2週間限定でVOCALOID

「初音ミク」が家に来てくれる、CD-ROMが本についていた。

即決で買った。

家について、早速インストールして解凍すると、

「はじめまして。初音ミクと言います。よろしくお願いします、マスター。」

そう、VOCALOIDは基本的に使用者を「マスター」と呼ぶ。

わかってはいたのだが、いざ呼ばれてみるとちょっとくすぐったく感じる。

「名前で読んでくんないかな。一応、同年だろ。」

ミクの設定年齢は16歳。発売されてから二年経っているが、アン

ドロイドなので年をとらない。
当時の俺も16歳。同じ年なのだ。

「わかりました。」

「敬語もやめようぜ。タメ語で。」

・・・ヘンな顔をされた。

「うん、わかった。」

言うが早いのか、俺はミクに、

「よし！んじゃ早速歌ってもらいたい歌がある！」

と言った。

・・・今の状況を端的に言うと、ミクはびっくりしている。

「・・・なあに？」

きつと俺はあまりにも嬉々とした顔で言ったんだろう、ミクはまたヘンな顔をして、片眉をあげて訊いてくる。きつと怪しい歌でも歌わせようとしてるに違いない、といった顔だ。

ミクを使った歌とかを聞いても、「変な歌詞を歌わせないで」とかよく出てくるしな。

「安心しろ。ヘンな歌じゃねえよ。俺のとおきだぜ？信じる。」

初めて会ったばかりの奴を信じろという方が無理な話だろうと今でも思う。

だが、それほどまでに俺には自分の選曲に自信があった。

中学時代、仲間内で音楽通で鳴らした俺。イントロクイズでは敵無しだった。

そこから来た自信だった。

だが、少々自意識過剰だったと思うが。

「そこまで言うなら…信じてあげるのもやぶさかでないわ。」

なんだこいつ。すっげえ難しい言い回し使いやがった。でも、結果オーライだな。

「それじゃあ、頼む。」

・・・素晴らしかった。

俺の見立ては間違っていなかった、と言うと自意識過剰になってしまうが。

その歌のミクの歌声との適性はドンピシャだった。

これが、俺がミクの無限の可能性の片鱗に触れた瞬間であった。

「へえ。見かけによらずいい選曲じゃない。」

タメ語になったとたんに口調がツンツンし出したが、突っ込まないでおく。っていうか見かけによらずってちよつと傷付くぞ。

まあ、きれいな女声の歌だったから、運動部で少しでも鍛えてるような奴がそんな歌を歌わせるのが意外だったんだろう、とプラスに解釈しておく。

「・・・素晴らしい。想像以上だよ、ミク。」

歌好きとして素直な感想を口にした。お世辞抜きで感動したのだ。

「あ、当たり前じゃない。私は大抵の歌は何もしなくても歌えるの。あなたこそ、初めてにしてはなかなかの調声だったわよ。」

「そいつぁどうも。」

等とやっている、そろそろ時計の針が揃いそうだった。

「眠くなってきたな。」

と言うと、

「私も。」

と欠伸まじりにミクも応えた。

「今日はここまでだな。お休み。」

「お休みなさい。」

俺はパソコンをシャットダウンした。

翌日からは、俺の楽しみが増えた。

果たして次はミクに何を歌ってもらおうか、ああでもないこうでも

ないと頭をぐるぐるさせていると、自然にわくわくしてくる。

周りの人から見たら痛い人だっただろうが、その時の俺にはお構い無しだった。

幕間1…退屈と焦燥と女のカン

一方、パソコンに1人残されたミクは、考え事をしていた。

いきなりタメ語を要求してくるマスターなんて聞いたことがない。
が、悪い人ではなさそうだ。

惜しむらくは、あのマスター、小松啓大と言ったか、はあの口ぶりからすると学生であるということ。

学生であるということは、おそらく午前中は呼び出されない。

しかも、体つきを見るに、あれは何かしらスポーツをやっている。
きっと運動部に入っているのだろう。

となると、帰宅時間はさらに延びるに違いない。

等と考えていると、誰かがパソコンを立ち上げた。

「まさか、啓大!？」

思わず画面に向き直る。

だが、そのわずかな希望は、すぐに、簡単に打ち碎かれることになる。

パソコンを立ち上げたのはおそらく彼の母親だろう。彼女はアイコンの隙間から覗き見るミクをみて、

「なにこれ？ああ、昨日ケイが嬉しそうに自慢してきた新しいソフトね。ふふふ、こんにちは。」

…悪い人ではなさそうだが、起動してくれる様子はない。
彼女は彼女で何かしら仕事があるようだ。
ミクは小さくため息をついた。

「早く帰ってきて…啓大。」

この呟きはとうやら作業中の彼女に聞こえたらしい。

「あらあら…ふふふ。」

彼女の反応の意味をミクが理解するのは、もう少し先の話。

それにしても、彼は家族に

「ケイ」と呼ばれているのか。自分もそう呼ばせてもらおうか、等と考えるミクだった。

第2話：疲労と壁と経験不足

つまらない授業を受け流し、少し憂鬱な部活を乗り切って、俺は帰路についた。

家に帰るなり、お袋に、

「ねえケイ、あの子…ミクちゃんって言ったかしら？可愛い子ねえ。」

・・・俺の居ぬ間に、一体何があったんだろう。

お袋が時々パソコンをいじるのを、俺は知っている。

むしろ、ミクが家に来るまでパソコンの主なユーザーはお袋だったのだ。

俺は軽く調べものをしたり動画を見るくらいしか今までは使っていなかった。

「まさか、VOCALOID開けた？」

「VOCALOIDって言うの？あれ。開けてはいないわよ。でも、アイコンから見てくるの。」

・・・そうだったのか。

開けられて困るものではないが。いや、むしろこのミクの期限は2

週間。開けてもらった方がミクのためにはなるのだが。

それでも、俺はミクに不思議な独占欲のようなものをもっていた。

母の発言に嫌味な部分は一切ない。変な毒気は感じられない。

むしろ、楽しそうだ。にこにこと、謎の笑みを浮かべている。だが、その謎の笑みにも毒気はやはり感じられない。

「どうして？何か見られたら困るものでもあるの？」

にこにこと笑いながら、俺の中に渦巻く謎の核心をズバリとついでくる。

「いや…ないけどさ…。」

「ふふふ。」

さらに楽しそうに笑う。

まったく、この人には勝てる気がしない。勝負する気もないが。

母とのやりとりを誤魔化し、俺はシャワーを浴びて部活の汗を流す。

さて、今日はミクに何をしてもらおうか。

着替えて浴室を出、飯を食い終わると8時半を回ってしまった。

急いでパソコンを立ち上げる。

「おそーいつ!-!」

「それでも頑張ったんだぜ?」

脱力してがつくりとうなだれる俺。いやあ、手厳しい。

「…もっと頑張ってよね。」

「…努力する。」

「はあ…。まあいいわ。」

ミクが焦る気持ちもわかる。誰がなんといってもあと13日しかないのだ。

だが帰宅時間を早められるかと言われるとそういうわけにもいかない。こういう返答しか、俺には出来ない。

それにしても、意外にあっさりと引き下がったな…?

「それで?今日は何するの?」

「ああ、今日はコーラスの練習だ。」

相変わらず、ミクの歌声はいい。が、俺の技術がついていかない。俺は頭を抱えるしかなかった。

ミクが心配そうにこちらを見てくる。

「どうしたの？…ひょっとして、うまく歌えてない？」

「…いや、ミクは悪くない。」

そう、ミクに責任はない。全ては俺の調声の拙さによるものだ。

「…今日は、ここまでにするか。」

「まって！」

予想外の返答だった。

「もう一回、歌わせて」

「…わかった。」

が、やはりというかあまり変わらなかった。

くそっ…ここまで悔しいと思ったのは久しぶりだ。

…いや、自分の歌に自信を無くした時以来か。

ひょっとしたら、ミクも同じような気持ちになっているのだろうか。だとしたら…申し訳ない気持ちでいっぱいになってくる。ミクには、そんな気持ちでいてほしくない。

「ごめんな、ミク」

「……。」

ミクは俯いて黙り込んでしまった。

「今日は、ここまでにしよう。」

「わかった。…お疲れさま。」

…申し訳なさ、目尻から流れ落ちるのがわかった。

その日、俺は眠れない夜を過ごすことになったのは言うまでもない。

幕間2…疑問と苦悩とお約束

同じ頃、ミクも眠れない夜を過ごしていた。

自分のマスターにあんな顔をされて、簡単に眠れるはずがない。

確かに、VOCALOIDはマスターの打ち込んだ音しか出せない。何しろ始めたばかりだ。最初から思い通りにいく方が珍しい。

それは、啓大もわかっていることだろう。

わかっているから、余計悔しいに違いない。

ああ、この行き場のない歯がゆさは一体どうしたらいいのだろう。

ミクはプログラムの中に何故かある段ボールを開け、中に入っていた長ネギを掴んでもいっきりかじりついた。ツンとネギの風味が口の中を鼻の中を満たす。

涙が出てきた。

0と1の集合体、プログラムの自分に味や香りがわかるのか？などという不自然さに気付く余裕は、この時のミクにはなかった。

それにしても、彼…啓大は何故少しくまういかなかったくらいであんな反応をしたんだろう。

うまくいかなくて悔しいのはわかる。でも、今回の反応は少し大袈裟ではないか？

ミクはふと疑問にかられる。

泣く。高校生の男子が、泣く。

泣いて周りの人間に

「弱虫！」等とからかわれる時期はとっくに過ぎている。

一番泣かない年頃のはずである。

彼の意外に可愛い一面を見たのか、と一瞬思ったが、歯をギリツと
ならして悔しがるあのときの顔を思い出し、その考えはすぐに捨て
去る。

きつと何かもつと深い事情があるのだ。

そこへ家に来たばかりの自分がむやみに首を突っ込んでいいものだ
ろうか…？

頭ではわかつている。よくないことだと、人の心のやわらかい部分
はやたら滅多に刺激するものではないと。

が、どこかわからない場所から（知りたい）という言葉が繰り返し
聞こえてくる。

「…どうして？」

それはミク自身にもわからなかった。

何かエラーがあるのか、とプログラム内を調べてもどこにも異常は

ない。

ミクも頭を抱えながら一夜を明かした。

第2・5話…日常と寝不足と屈伏と

「おはよう…。」

いつも通りの挨拶を母と交わす。だが、今朝は全くと言っていいほど眠れていない。

「おはよう、ケイ。ひどい顔よ。」

あんたのその言い方もひどいがな。

「そんなのいつものことだろ」

「今日は特にひどいわ。クマなんてつくっちゃって」

だろうな。それくらいは今の俺にもわかる。

昨日はあんなことになってしまったが、俺はミクによる歌の制作を諦めるつもりはさらさらない。

そうだ。まだ始まったばかりなのだ。こんなところで諦める訳にはいかない。

転んでもただでは起きないこの小松啓大。絶対にミクをつまぐ歌わ
せてみせる。

昨夜、どこがいけなかったのか必死で考えた。

音程…は間違っていなかった。ならテンポか、音符の長さ、発音の
強さか。

歌好き、そして歌い手を志していたものとしてここで諦める訳には
いかない。

今日は違う歌で打ち込みの練習だな。

いや・・・今日はあれをやってみるか・・・。打ち込みに慣れる、
声に表情を持たせるという点ではいい練習になるだろう。

そういうわけで、俺が今日ミクにさせることは意外にもあっさりと
決まった。

「何をぶつぶつ言ってるの？ちょっと怖いわよ。」

「…ん？ああ、ごめんごめん。」

母に突っ込まれ、ようやく現実に戻ってこれた。

「さては、昨日ミクちゃんとかあったんでしょ？」

ギクツ！…この人は…。昨日の夜あの部屋にはいなかったはずなのに。

千里眼でも持っているのだろうか。それとも、いつかどこかで読んだ小説に書いてあった相手の心を開く術でもマスターしたのだろうか。

でも、だとしたら俺は気付くよな…と考えかけたところで我に返る。

危ない危ない。寝不足の時は一度何かを考え出すと脳内ループに陥る危険性が高いことは経験上知っていた。

さらに、その場合すぐに論点がズレることも。

「どうなのよ？」

「いや…。まさしく…その通りです…。恐れ入りました。」

「…何で恐れ入るのよ。まあ、悩むのはいいけど、授業に支障が出ないようにしなさいよ。」

「…ああ、頑張る。」

俺は何とか朝飯を流し込み、準備を整え自転車にまたがり家を出た。

…寝不足で乗る自転車は、本気でヤバかった。死ぬかと思った。

足がふらつく。路面のバウンドひとつひとつが脳に響く。信号待ちで気を失いそうになる。

何とか学校に着いたが、そんな状態で席に座ったりしたら…。想像するのは難くないだろう。友人が声をかけるのにも対応できず、そのまま寝てしまった。

それで午前中の授業すべてにおもいつきり支障をきたしたのは言うまでもないだろう。

幕間 2・5…決意と過去と謎

家に残されたミクはといえば、眠っては起きるを繰り返していた。眠りが浅い。あんなに夜更かししていたのに、一時間寝ると起きてしまう。

ミクはプログラムなので本当は寝なくても平気だ。時折欠伸をするのは使用者を飽きさせない為の仕様にすぎない。

だが、今はパソコンが起動していないためやることがない。

そして、気持ちを落ち着かせる方法が寝る以外に思い付かない。ネギは昨晚ほとんどかじり尽くしてしまった。

ミクはいてもたってもいられず、あることを始めた。

「あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ」

しっかりとドレミの音程を確認していく。と、その時だった。

パソコンが、立ち上げられた。

ハッとして画面を向く。

「ゴメンね、ケイじゃなくて。」

彼の母親だった。

何と、VOCALOIDを開けている。

「い、いえ、そっそんなことは…。」

突然の事に戸惑うしかないミク。

「私がVOCALOIDを開けたの、ケイには秘密ね。あの子、怒りそうだから。」

「はっ、はい、わかりました…。」

「そんなに緊張しなくていいわよ。」

「すみません…。でも、どうして私を呼び出したんですか？ひょっとして、歌があるんですか？」

「ゴメンね、歌はないわ。」

…ちよつとがっかり。

「でもね…。」

彼女はクスツと笑って、

「あの子と、ちょっとトラブっちゃったんでしょ？ほんととは私が首を突っ込むようなことじゃないんだろうけど、ちよつとでも助けになればと思ってね。」

「……………！」

よろけて、へたり込みそうになるのを何とかこらえる。頭をおさえて聞き返す。

「…どうしてそれを？」

「あの子の様子を見てればだいたいわかるわよ。」

「…そうですか。」

「ふふっ、あなた、リアクションがケイにそっくり。」

流石である。

その時、ミクはハッと気がついた。昨夜考えたことだ。
この人は、ほぼ間違いなく知っているだろう。

でも…。ミクは躊躇した。やはり聞くのはためられる。

でも、知りたい。彼のために、自分に出来ることをしたい！

「あ、あの…。」

「なあに？」

ミクは昨日あったこと、考えたことを打ち明けた。

「…ほんとにわかってます。人の過去を詮索するのはよくないって
…。でも、私は彼のために出来ることをしたいんです！」

「…そう。」

…わかった。じゃあ、教えてあげる。

…あの子はね、歌手を目指してたの。」

！…そうだったのか。

「でもね、いつだったか、理由はわからないんだけど、すごく自信をなくしてね。いろんな場所に出かけてがむしゃらに練習してたみたい。そうしたら喉が痛んできちゃったらしいの。それでますます自信なくしちゃってね。でも今はもう平気だって。今でもたまにどこかで練習してるらしいわ。だから歌に関しては負けん気がものすごく強い。だから、悔しかったんじゃないかしら。」

ミクは、ふと考えた。

生まれながらに歌手である自分。歌手を志し、挫折を味わいながらも諦めきっていない啓大。

実は対極にいた二人がこうして出逢ったこと。

だとしたら、何故彼は私を求めたのか。

ますますわからなくなってきた。

彼女と話した後も、やはりミクは頭を抱えるしかなかった。

第3話…練習と動揺と「目」

「…ただいま。」

授業だけでなく、部活まで絶不調だった。
とにかく、ひどい一日だった。

「お帰り。ご飯にする？それともお風呂？」

「…飯。」

とにかく、腹が減った。

俺は夕飯を済ませ、風呂もカラスの行水…本当のカラスの行水は長
いらしいが…すぐにあがる。

「来て…くれたんだ…。」

どうやらミクは昨日のことを引きずっているらしい。

「あのくらいじゃ諦めん。安心しろよ。」

「よかった…！」

泣くなよおいっ…て俺が言える立場じゃねえや。

それにしても、女の涙の破壊力は凄まじい。

ドラマとかでもそうなのに、本気で泣かれると余計にな。その辺はバーチャルでもリアルでも大差無い。

「……………」

ミクは何も言わず、こっちをじっと見てくる。

…こっいつときは、一体どっいつ反応をしたらいいんだ？

「…？…どうした？」

ミクは少し俯き、

「うつん、何でもない。」

何だよ…。変な気分になっちまったじゃねえか。

…一瞬、こいつが俺が買ったVOCALOIDの体験版ってことを忘れちゃった。

「あ、あのね…お願いがあるんだけど」

思い出したようにミクが聞いてくる。

「ん？何だ？」

「あ、あのね…、」

ミクはちよつと恥ずかしそうに、もじもじしながら聞いてくる。
—
体何を言い出すつもりだ？…何か緊張してきた。

「啓大のこと…ケイって呼んでいい？」

「あ、うん…いいけど。何でいきなり？」

「えっ、ええつと…。」

今度はあたふたしている。忙しい奴だ。

「あたしの独り言。聞いてたんでしょ？」

んあっ！びっくりした…。母さん、あんたいつの間に俺の後ろに来たんだ？

「そっ、そうなの。その方が呼びやすいし親しみもわくかと思って。」

とミクが付け足す。

「そっか。んじゃ、改めて今日もよろしくな、ミク。」

「うん！よろしくね、ケイ！」

…今度はすつげえ嬉しそうに、…そうだな、擬態語を使って表現するなら、「にぱあっ」って感じで笑いやがった。

…うん、これ以上適切な言葉は無いな。

？ あれ？母さんが居ねえ。…消えんのはやっ。とにかく神出鬼没だな、あの人。

「そんじゃ、今日は打ち込みの練習に、喋ってもらっ。」

「えっ？」

…そう、『初音ミク』としてではなく『VOCALOID』として喋ってもらうのだ。

実は、VOCALOIDのセルフトークには結構コツがある。歌と同じように、少し入力をミスるとヘンテコなイントネーションやめちゃくちゃな抑揚で喋りだす。

歌にはプライドのある俺でもこれならOKだ。自分のペースで練習できる。

「…自信がついたら、すぐ歌わせてやるから。」

「うん、わかった。」

普段とは違う、たどたどしいミクの喋り。

喋りの発音は普段あまり意識しないから、意外に入力が難しい。それでも、ここの音をこういじってみようか、ここは少し長いな、とかやっているうちに結構それっぽくなってきた。

「よし、今日はここまでにしよう。お疲れ、ミク。」

「うん、お疲れ様。」

とミクが言ったのを聞き、俺はVOCALOIDを閉じようとした。その時、

「待つて。」

俺はカーソルを動かしていた手を止め、ミクを見た。

…また、あの目。

もう泣いてはいないが、さっき俺をじっと見つめてきた、あの目。
…今回は不意打ちだったから、かける言葉も見つからない。

しばらく、2人の間では時間が止まった…ように感じられた。

「…ごめんね、時間とらせちゃって。」

ミクが口を開いたので、俺もようやく喋ることができた。

「いや…、別にいいけど。どうかした？」

「ううん、何でもないんだ。おやすみ。」

「ああ、おやすみ。」

…何か妙な気分になったが、喋りが少しでも思い通りにいったのは素直に嬉しい。

今夜は、よく眠れそうだ。

幕間3…不思議と空転と病

一方のミク。

ソフトウェアのプログラムに含まれているベッドに倒れ込む。

「むああ〜っ！」

勢いよく伸びをした。

VOCALOIDにとっては、喋るより歌う方が簡単だ。

喋る方が、いろいろと疲れるのだ。

ミクは、寝転がったままころりと右を向いた。

なんだろう、気分が…

高揚してる…？

わかっている。今日の自分はどこか変だ。寝不足のせいではない。
どうしたことが、胸が…、

「苦しい…！？」

急いでバグとウイルスを調べる。が、何も異常はない。

「何、これ…？」

今までで、一度も味わったことのない感覚。

一度も味わったことのない感覚と言えは…さっきも、彼の顔をじっと見つめていたかったのは何でだろう。しかも二度も。

慣れないセルフトークをしたからではないだろう。歌も喋りも、根本的には同じだ。

胸が苦しくて、蒲団にくるまって体を抱き抱えるように丸くなる。その時、浮かんできたのは。

「ケイ…。」

彼の、顔だった。

「何で…？」

…わからない。

…なんだろう、さっき会ったばかりなのに。

「会いたい…っ！」

何で？ どうして？

考えても考えても、答えが出る気配はない。

何でだろう。勝手に涙が出てきた。

辺りを見回すと、ネギが更新されていた。

がばっと起き上がり、ネギの段ボールへダッシュする。

…何にもないところで足がもつれて、盛大に転んでネギの段ボールに突っ込んだ。

痛い。いろんな意味で。

「ううっ…。」

また泣きそうになったが、今度はこらえる。

倒れたままネギをつかみ、かじりついた。

胸を突く感覚に悩まされながら、ネギの辛味で思考を正常に保つ。

「落ち着け、落ち着け私…。」

落ち着けと思えば思っほど、頭はこんがらがり、気持ちは高ぶって
くる。

どうやら、ミクの方はまたもや眠れない夜を明かしそつだ。

第3・5話…冴えと快晴と発想の勝利

…素晴らしい目覚めだ。

「おはよう。」

「おはよ。よく寝れた？」

「まあね。」

そう、よく寝れたのだ。短い時間で、確かな手応えを得られたからな。

「そう、よかったわね。」

なぜか母も嬉しそうだ。

やはり母の考えてることはわからない。

16年一緒に生きてきた俺がこれなんだから、困ったもんだ。

…本当に、どこまでもつかみどころの無い人だ。

…まあいい。

よし、この調子で今日は何をしようか。

朝飯を食い終わって、顔を洗い歯を磨く。

今日は調子がよさそうだ。

ケータイと鞆と財布を引っ掛け、鞆に弁当と水筒を突っ込み、自転車の鍵をとって出かける。

自転車も、心なしか軽快だ。

と。

頭の中に、単語がいくつか降ってわいたように出てきた。

今は秋…、秋と言えば秋桜…、桜…。

という風に、秋だというのに桜に関する単語が頭にどんどん浮かんでくる。

季節感ねえな、俺の頭。

この単語にミクのイメージと適当な旋律をのせて…。

そんな風に、なんと曲が出来てしまった。

自分でもビックリだ。ビックリし過ぎて、パクリじゃないことを後で何度も確認してしまった。しかし、やはりパクリじゃなかった。

間違いなく、俺だけの、いや、俺とミクだけの、歌詞、メロディ。

震えがきた。

恐るべし、今日の俺の頭。

ちなみに詞は昔適当に書いた程度、メロディーに至っては考えたことすらない。

それが今回はなんと脳内補完で出来てしまった。自分でも驚くしかない。

学校に着いて、今日はすっかり友人と挨拶を交わし、忘れないうちに詞をケータイにメモしておく。

…本当にいざ文章にして見てみると、こっぴどかしいことこの上ない。

まあ歌うのは俺じゃないし、ミクならこの詞もきつと大丈夫。でも、音にするのはもう少し先だな。

打ち込みもまだまだだし、打ち込めても俺にはオケはまだ作れない。

でも、作れたらいいものになりそうな気がしてきた。

それにしても、今日の俺は冴えすぎだ。

ここまでくると、よく寝れた以外に何か理由がありそうだが、心当たりが無…？

その時、俺の脳裏に浮かんだものは。

昨日のミクの、あの顔、あの目。

どうしてだ？

…わからない。

…冴えまくっている今の俺の頭でも、その結論は出せそうになかった。

…しかし、今日の俺は、授業でもやはり冴え渡っていた。そりゃもう、自分でも笑っちゃうくらいに。

ダメ男だったこの間までの俺はどこにいった？
ふん、帰ってこなくていいけどな。

ミク、待ってるよ。お前だけしか歌えない、今の俺が作れる最高の歌を歌わせてやる。

俺のスキルアップに期待してるよな。

だが、ミクの使用期間は今日を入れてあと11日。

あんまり悠長なことは言ってらんねえな。

急げ、
俺。

幕間3・5…私と溜め息と正常なエラー

ミクはベッドの上で茫然と天井を見ながら考え事をしていた。

…結局、一睡もできなかった。

…また、ネギをかじり尽くしてしまった。

…私はどうしてしまったんだろう。

…もう、一人では何もしたくない。

きっと、今の自分は、端から見たらベッドに横たわるだけの廃人、もしくはただのマネキンのように見えることだろう。

私は、あぶない子になってしまったのだろうか？

…こんな自分、ケイには見てほしくない。

どうしてこうなった？

原因は一つしか考えられない。

だが、彼を責められるはずがない。

私が勝手にこうなったのだから。

私がこうなることを、彼は望んでいないだろう。

ああ、どうすればいい？

わかんない。

わかんないよ！

頭を抱え、また悩みだしたその時。

「ミクちゃん！？どうしたの！？」

飛び起きてアイコンから見ると、彼の母がいた。

「いいえ…。なんでもありませんよ…。」

…自分でも、返事に力が無いのがわかる。

「隠さなくていいから、言ってごらんなさい。」

その言葉には、優しさと、有無を言わせぬ強さがあった。

ミクは小さくため息を一回して、

「そこまで言うのなら…わかりました、お話します。」

…ここまでミクが話すのを渋っていたのは、わかっていたから

だ。…この、今の自分が抱いている感情が、とても身勝手なものであると。

そして…解決出来るのは自分しかない。

いや…、そこに関して言えば、自分以外にも解決出来る人はいるが、それは、昨日の様子から見れば、あまり期待しない方がよさそう。

それでも期待してしまう自分がいることに気づくのに、そう時間がかからなかったが。

…そうだ、私はただのソフトウェア、使用者に自分の機能を引き出す以外のことを望み、束縛するなんて事があっていいはずがない。

「…そうね、今回ばかりは、私に出来ることは何も無いわね。…でも」

「？」

「打ち明けたら…少しは気持ちも楽になったでしょ？ミクちゃんが今持っている気持ちって、そういうものの。相談っていうのは、その気持ちには意外に効果があるの。そういう気持ちになったら、いつでも相談にのるわ。」

「…ありがとうございます。」

「じゃあ、私は作業に戻るわ。落ち着いて、頑張ってね、ミクちゃ

ん。胸が痛くなってきたら、深呼吸して、平常心、平常心って自分に言い聞かせるの。あんまり考え過ぎちゃダメ。わかった？」

「…はい！わかりました！」

…本当に、気分が楽になった、そんな気がした。

気分が楽になったら、何故か急激な眠気に襲われ、ベッドに倒れ込むように寝てしまった。

私…、データなのに…。

…きつと、いい夢見れるな…。ふふふ…。

深く深く、どこまでも落ちていくような感覚がミクを支配した。

その寝顔に微笑みかけ、啓大の母は作業に戻った。

第4話…気合いと寝言とアイツの笑顔

結局、勢いだけで俺の一日は終わった。よくぞあのテンションを維持した、と自分をほめてやりたい。

「ただいま。」

「お帰り。」

「っしやあ週末だぜ！」

「部活以外はVOCALOID漬け？」

「あつたり前よ！」

…これまた勢いだけで母との会話を終える、と思いきや、

「頑張るのよ！」

…母が何故か妙に気合いの入った応援をしてきた。
まあ、理解があるってのは色々といいことがある。
V O C A L O I D に対して理解が出来てきたようで何よりだ。

風呂と飯をいつも通り済ませ、もはや恒例化した流れでパソコンの
前に座る。

パソコンを立ち上げ、V O C A L O I D を開け…ようとした手が止
まった。止めざるを得なかった。

アイコンの隙間から見たミクが眠っていたからだ。

それも、「幸せ」という言葉を寝顔の満面に湛え、「安らか」とい
う言葉を体全体で表現しながら。

「…V O C A L O I D って、こんな寝顔出来るんだ…。」

思わず独り言がこぼれる。

「ほんと、人間みてえだな。」

…出来ることなら、いつまでもこの寝顔を見ていたかった。

すると、突然、

「うつ〜ん…。」

ミクが寝言を言い出した。
…ちよっと、ドキッとした…。
寝言は、これだけでは終わらなかった。

「…ケイ…。」

はい、何でしょう。俺はここにいますよ。
…寝言で名前呼ばれるなんて思いもよらなかったんで、めちゃくちゃびっくりした。
今は、びっくりしてテンパった末の反応である。

…なんか、VOCALOIDとはいえ女性の寝顔を無断で見るのは、さすがに引け目を感じてきた。
意外に紳士的な俺。
…じゃなくて！

…どうしよう。
VOCALOIDを起動してもミクが歌ってくれないんじゃないでしょうか。
がない。

心を鬼にして、起こすか。
起こさないと、後で怒られそうだし。
一応、VOCALOIDを起動してみる。

「……ん……。」

お願いだから、そういう寝言はやめてくれ。こっちの神経がもたなくなる。

「ううん…ケイ…むにゃむにゃ…」

…だからやめろって！

「み、ミク。」

「ん〜。」

ミクの寝言がだんだん変わってきた。
もう少し頑張れ、俺の神経。

「なあ、ミク。」

「ん〜。なあに〜…いいいいい!？」

…ようやく目が覚めた、と思いきや。

「いいい嫌ああああ！見ないでええええええ！！」

「お、落ち着けミク！」

ミクはガバツと起き上がったと思えば、すぐに布団にくるまってしまった。

「・・・ごめん、俺が悪かったよ。出てきてくれよ。」

「...もうちょっと待って。」

「...わかったよ。」

怒らせちゃったかな...

ミクには悪いことをしたけど、あの寝顔は...本気で可愛かった。画面に背を向けて待つことにする。

「...お待たせ。」

振り返って見たミクは、若干不機嫌顔だがいつも通りだった。

「…あのさ…怒ってる?」

「怒ってない。」

…絶対怒ってんだろ。

「その…ごめんな?」

「何で謝るのよ。待たせたのは私なんだから、普通は私に謝らせるべきじゃない?」

「いや、その辺はいいよ。そんなに待ってないし。」

「そ、そう?ならいいんだけど。…よかった…。」

「んじゃ、今日も頼む。」

今日は、昨日よりもさくさくと打ち込める。
歌を打ち込むのに戻るのもそう遠い日ではないかもしれない。

「よし、今日はこの辺にするか。」

「・・・い・・・しん・・・。・・・い・・・しん・・・。」

？ ミクが何か言っているが、顔を伏せてばそぼそと言っているために聞き取れない。

「どうかしたか？」

「えっ？う、ううん、何でもないよ。」

「そうか。…実は、今度、ミクにプレゼントがあるんだ。」

「ええっ！？私に！？」

「そう。…へへっ、俺としてはかなり自信作なんだ。季節ずれるけどな。」

「えゝ？なにになに？」

「まだ秘密。」

「ケチいゝ…。」

「まあ、楽しみにしとけよ！」

「うん！」

「んじゃ、お休み。」

「お休み。」

…見たこともないような笑顔で手を振っていた。
まあ、今回ばかりは期待してOKだ。後は俺の打ち込み技術だけ
だな。

よっしゃ！ヤル気出てきた！

幕間4…歓喜と卑屈と囚われのジュリエット

その頃、ミクは。

「わぁーい！やったあ！」

などと年齢不相応な喜び方をしてみる。

自分の寝顔を見られてしまったが、それをひっくるめても嬉しい状況だ。

ケイから、私にプレゼント。

例えどんなものでも嬉しい。

いつももらえるかはわからないけど、今から待ち遠しい。

でも、彼から私にくれるものなんてあるのか？

…ある。

…そして、彼は「自信作」と言った。

ほぼ、あれで間違いない。

VOCALOIDにとって、存在意義と呼んでも過言のないもの。

曲だ。彼の、オリジナルの。

確かに、「初音ミク」としてはあれ以上もらって嬉しいものはない。

…でも、今のミクにはそれ以上に欲しいものがあつた。

ソフトウェアとしてではなく、私を一人の、女として彼に見てほしい。

そう、ミクの欲しいものは、愛情だつた。

でも、それはきつと私には永遠に得られないもの。

…私は、人じゃないから。ただの、ソフトウェアだから。人には、なれないから。

それを考えたら、突然、ミクの胸を言い様のない悲しみが襲つた。

「うう…っ！」

ミクは必死でこらえようとしたが…

「うっっ、うっ、うわああああああああああ！」

…こらえきれなかった。

大声で泣きながら、ミクは自問した。

…どうした、私はVOCALOIDとして最高の幸福を与えられようとしてるのに、どうして泣いている？

…そう、私は、どこまでいつてもVOCALOID。それ以上の存在には、絶対になれないのだ。
その現実が、ミクを余計に絶望させた。

「うわああああああああああ！」

…自分勝手、わがままだ。
わかっている。この気持ちは、あまりにも身勝手だ。
わかっているから、余計に卑屈になる。

「うっ、ひいっ、うっうっ！」

私は…最低だ。
最低のソフトだ。

・・・自分で自分を罵っても、卑屈になるだけで何の解決にもならなかった。

「うっ、うっ、うっうっ…。」

布団にくるまっても、声を押し殺して泣くことしかミクにはできなかった。

「ひっく、うっ、うっうっ…。」

泣くのに疲れてきた頃…ミクの意識は勝手に落ちていった。

第4・5話…相談と違和感と思い入れ

「おはよう。」

うん、とっても普通な目覚めだ。

ここまで普通な目覚めは逆に久しぶりな気がする。

今日は午前中に部活で、午後からはVOCALOIDができる。

もはや、俺にとってVOCALOIDは日常の一つになっていた。

…あいつの、ミクの顔を見ないと次の日の調子はがた落ちしそうだ。

まっ、今日も頑張っていくか。

…昨日、ミクはあんな笑顔を、…本当に、VOCALOIDだということを一瞬忘れ、遠くの恋人とテレビ電話してるような錯覚に陥る程の笑顔を見せてくれた。

俺はその期待に応えなければならない。

…恋人？

今、俺の思考に「恋人」と浮かんだか？

…生まれてこの方、そんなものは一瞬たりともできたためしがない。

なのになぜ？

…わからない。

ミクは、俺のことをどう思っているんだろう。

…正直、ミクみたいな恋人がいたらいいな、と俺は思う。

…俺は、ミクをインストールするまで、こんな気持ちになるとは露も思わなかった。

VOCALOIDは、もっと堅苦しい音源作成ソフトだと思っていた。

それがどうだ。あいつはあんなにも表情が豊かじゃないか。

きっと、俺のイメージと現実のギャップがさらに音源作成を楽しくしている。

…部活は、いつも通りきつかった。
でも、今日はもう自由だ。

家に帰る前に、VOCALOIDに詳しい友人を見つけた。
ミクに歌わせる時も、喋らせる時も彼からアドバイスをもらっている。

「よお。」

「おっ。調子はどうだ？」

「まあまあだ。」

「んじゃ、そろそろ歌の打ち込みに戻ってもいいんじゃない？」

「ああ、そうだな。」

「次は何を歌わせるんだ？」

「こいつは、アニメが大好きだ。俺も好きなので、話が合う。
俺が今までミクに歌わせようとした歌は、アニメソングとゲームソング。」

次の曲が気になるらしい。

「オリジナル。」

「…マジで？」

「大マジだ。」

「…出来てるのか？」

俺は頷いて、

「脳内補完だな。」

と付け足した。

「へえ〜。そいつあすげえな。」

「ミクにプレゼントがあるって言ったらな…飛び上がって喜んでやがったぜ。」

「待て。」

「ん？どうした？」

「今、ミクが飛び上がって喜んで、って言ったか？」

「ああ、確かに言ったが、何か問題あるか？」

「今、お前疲れてるか？」

「部活後なんだから、疲れてんのは当たり前だろ。」

「そうじゃなくて、今、お前元気か？」

「？ 元気だぜ？」

「お前がインストールしたのは、本当に初音ミクなんだよな？」

「今更何言わせんだよ？体験版だけど、確かに初音ミクだぜ？」

「ギャルゲーではなく？」

「はあ？んなわけねえだろ。」

「…うちのボカロは、そんなことしねえぞ？」

「え？」

「もう一度聞こう。ギャルゲーじゃないんだな？」

「絶対違う。だって、あの本についてたんだぜ？」

「うーん、そうか…。んじゃ、何かバグは？変な頼み事したりとか？」

「なんだ？何かまずいこともあるのか？」

…知らずのうちに、声にイラつきが混じってしまった。

「なんだよ…。ムキになることないだろ。」

「あつ…悪い。」

…さすがに、大人げなかったな。

「…たまにチェックしてるから、変なウイルスとかバグはないと思うけどな。」

「…そうか。」

「頼み事も、タメ語で呼べって言った以外、特にしてないけどな。」

「…そんなことするマスターは、お前くらいだろうな。」

「何か問題が？」

「いや…無いとは思うが。いかんせんしたことないから、こればかりはわかんねえな。」

「…そうか。問題無いならいいんだ。」

気まづくなってしまった空気が持ち直したところで友人に別れを告げ、帰路についた。

幕間 4・5…発散と没頭とやっぱり気になるアイツの気持ち

一方、ミクは。

「ふっ！ていつ！やあっ！」

…長ネギで素振りをしていた。

いつまでも悲観的になってはいられない。気分を紛らわせる為の苦肉の策だ。

素振り…というよりは、ただ振り回しているだけと言った方がいいかも知れないが。

それでも、気分が少しでも晴れば、今のミクには十分だった。

「はあっ…はあっ…。」

けっこう疲れてきた。だが、今は一瞬たりとも体を止めていたくない。

きつと、止まったらまた泣いてしまう。そう思った。

…ネギは、思ったより頑丈そうだった。

きつと、振られることを前提にプログラムされているんだろう。

しかし、誰がこんなに激しく振り回すことを考えただろうか。
多少頑丈だとはいえ、所詮長ネギ。今にも折れそうだ。

そもそも、誰がVOCALOIDがこんな感情を持って苦しむなんて考えただろう。

…自分でさえ、考えなかったというのに。

「はあっ!」

こういうことは、彼に見つからないように、こっそりやらなきゃダメだ。

見つかったらきつと、余計な心配をかけてしまう。

いや…。私は、彼が今私をどう思っているのか知らない。

ケイは、私のことを心配してくれるだろうか。

「てやあっ!」

…いや、今そのことを考えるのはやめよう。

また、昨日みたいに考えが飛躍してしまったら、今度こそ精神がもたない。

…そうだ、彼の母にも教えてもらったじゃないか。考えすぎちゃダメ。

…一回、素振りにもっと没入して、頭の中を空っぽにしよう。

その時。

ミシッ…

といふかなり地味な音をたてて、ネギが折れ曲がってしまった。

…しょうがない。新しいネギを持ってこよう。

食べるより消費量が少ないから、一本でより長い時間持たせられる。

ミクはそのまま素振りを続行した。

…しかし、ミクは普段あまり運動をしない。

動かして楽しむゲームのようなソフトではないので当たり前だが、そんなに長い時間は動き続けられない。

ミクは、床に仰向けに倒れ込んだ。

「はあっ…。はあ…。」

…結局、こつなるのか。

ミクは、手に持ったネギをそのままかじった。

第5話…照れと本質とマイブーム

「ただいま。」

…なんだか、変なことを聞いちゃった。

よそのVOCALOIDは、ああいうリアクションをしないだつて？

ということだ？

俺はめんつゆでうどんをすすりながら考える。

薬味にネギを入れるのが、最近のマイブームだ。

「…体験版だからか？」

いや…。体験版にできることは製品版にもできるし、製品版にできて体験版にできないこともある。

当たり前のことだが、機能面で体験版は製品版に明らかに劣っているのだ。

体験版にだけ、そんな機能をつけるとは考えづらい。

「じゃあ、なぜ？」

…もともと、俺はパソコンにあまり詳しい方ではない。

VOCALOIDをやるようになって少しはなれてきたが、ぶっちゃけパソコンは苦手だ。

ドンマイ、アナログ人間小松啓大。お前がいくら考えても、きっと解決しないだろう。

今は、俺にできる最高のことをミクにしてやるだけだ。

「…どうしたの？難しい顔しちゃって。」

「ん？ああ、何でもないよ。」

すべては、VOCALOIDを開けてミクに会えばはっきりするにとだ。

シャワーを浴びて部活の汗を流し、今日もパソコンの前に座る。

疲れていて眠いが、ミクを待たせたくない。

気力の勝負だ。

パソコンを立ち上げ、VOCALOIDを開けようとした。

「よお、起きてるか…っ！」

なんと、ミクが倒れていて息も荒い。

「はあ…。はあ…。」

「おい！大丈夫か！？」

「はあ…。あれ、ケイ…？早かったわね…。」

「ちょっと待ってる、今バグを…。」

「…待って…。バグじゃないわ。」

「…どういうことだ？」

「…私だって、運動したい時くらいあるわ。」

… VOCALOIDが？

「…じゃあ、本当に大丈夫なんだな？」

「うん、大丈夫だよ。」

「なんだよ…。余計な心配かけさせんなよ。」

「えへへ…。心配、してくれたの？」

「バツ、ち、違…。」

「ありがとう。」

…にこりと笑われると、もう、何も言えなかった。

「は、早く始めるぞ。」

「はい。」

なんだろう。今日のミクはなんだかテンションがおかしい。
なんか、ちょっと浮かれてるというか…。
運動後だからか？

「なあミク。本当に、大丈夫か？」

「まあ、大丈夫だって。」

…やはり、ちょっとテンションがおかしい。
ちよつと、にこやかすぎる。

理由は、運動後だからという以外にもあるだろう。

「なんか、変わったことあったか？」

「なぐんにもないよ？でもね…。私、今、ちよつと嬉しいんだ。」

「なんかいいことあったのか？」

「ケイがね…、私に何かあったらどういう反応をするんだろう、つてね、気になってたんだ。心配してくれて、とっても嬉しかったんだよ？」

「そ、そうか…。」

のぼせたような顔で言ってくる。

…もはや、否定する気にもならなかった。

「それで、今日は何するの?」

話題を戻され、少しほっとする。

「そうだな。今日、昨日言ったプレゼントをやるよ。」

「ホントに!?!」

「ああ。でも、いつぺんに全部はまだやらない。」

「えー、ケチい〜。」

「まあ、そう言っつな。俺の自作曲を、1コーラス歌ってもらっつ。」

「やったあ!」

「んじゃ、始めるぞ。」

「うん!」

打ち込みは、わりとサクサク進む。
練習の賜物だな。

「いいぜ。その調子。」

「
」

ミクも気持ちよさそうに歌っている。
やはり、歌は気持ちよく歌う方が、歌い手にとっても聴き手にとってもいい歌になるんだろう。

…俺は、こういう気持ちよさを忘れていた気がする。

「よし、今日はここまでにしよう。」

「はい。お疲れ様。…いい歌だったよ。」

「…ありがとう。」

「えへへ…。早く、全部歌いたいな。」

…今日は、ミクに大切なことを思い出させてもらった。

俺も、頑張らないと！

幕間5…秋と桜と膨らむ不安

パソコンを閉じた後のミクは、また先程までのにやけ顔に戻っていた。

「うふふ…。」

彼が作った曲を歌えたから、というのもあるが、彼が自分のことを少しでも気にかけてくれている、ということが嬉しくてたまらない。

…きつと、今の私は、端から見たら危ない子なんだろうな。

でも…。今は、それでもいい。

ケイの歌…、気持ちがすごい直球でちょっと恥ずかしかったけど、いい歌だったな。

でも、あの歌は、完全に女性の歌だ。

よくあんな詞思いついたよね…。

どうやって作ったのか、明日聞いてみようか。

…いや、とミクは彼のことを考えてみる。

彼は音を打ち込む時、音のつながりをいちいち確認して、ああでもないこうでもないと言っている。

基本的なことだが、彼の場合はその頻度が高い。つまり、感覚派なのだ。

曲も、きつと勘で作った、と言う可能性が高い。

「…だよな。」

と一人で納得し、歌詞のことを考えてみた。

「桜、か…。」

コンピュータ内のカレンダーによれば、今は初秋ということになる。

…季節、180度ずれてるね。

だが、ずっとこの中にいるミクには、今の秋の景色も、歌詞にある春の桜の景色も、きつと見られない。

「見て、みたいな。」

歌詞にあったのは、恋の歌。桜の木の下で過去を回想し、別れを惜しみながら旅立つ先輩、それを見送る後輩。その場面で、後輩は先輩に想いを告げる。

…間柄は違っけど、まるで、未来の自分達を歌い上げるような気持ちになった。

…私、想い、伝えられるかな？

…私は、春まではいられない。桜は、見られない。

…ちよっぴり、切なくなった。

「もう、泣かないんだから。」

小さく決意を口にし、顔を上げた。その時、ミクを襲った違和感。

「……あれ？」

部屋が…

「縮んでる？」

…それは、本当に微細な違和感だった。
…いつもより、少しだけ天井が近い。

「一体、何が…」

と、自分のデータを確認してみる。

「・・・！」

なんと、自分の容量が少しだけ大きくなっている。
部屋が縮んだんじゃないかって…私が大きくなったのか。

…なぜ？

私は体験版。楽譜の保存は出来ない。私自体の容量は増えないはず。

…わからない。

…今日のところは、ひとまず寝よう。

ベッドには寝られるが、いつもすっぽりとくるまれる布団から、足が出る。

少し落ち着かなかったが、それでもミクは眠りについた。

第5・5話…微笑と心配と労りと

目がさめると、俺は気力で布団から這い出た。

急に朝が寒くなった。

布団から出るのがつらい。指先、足先の感覚が薄い。それでも、精神を奮い立たせ、朝飯へと向かう。

…もう、すっかり秋だな。

「おはよう。」

「おはよう。今日は寒いわね。」

と母が返す。

「そうだな…。今日ここまで来るのにこんなに憂鬱になったのは久しぶりだよ。」

「私も。」

会話を交わしつつ、俺は母さんが淹れてくれたカフェオレを流し込む。

「それにしても…、今日は早いわね。部活は午後なんですよ？」

「午後だから、だよ。ミクをなにもしないで放置するのは可哀想だから…。」

「ふっふーん？」

…なんか、ニヤニヤしてる…。

「な、何？」

「最近どうなの？」

「ああ。順調だよ。」

「へーえ。順調なんだ。」

…まだニヤニヤしてる…。

「ど、どうかした？」

「いや？いいことだねーと思って？」

白々しい。なんか、いつか見たような楽しそうな笑顔だ。
…まあいい。早くミクの所へいかなきゃな。
朝飯をかきこみ、パソコンへと向かった。

パソコンを立ち上げる。と、

「け、ケイ！？」

なにやら焦っている。

「おはよう。どうかしたか？」

「わ…、私…、

大きくなっちゃった！」

「何だって？」

ミクはいつも通りモニターに向かい合っているが、確かにちらっと見える周りの小物がいつもより小さく見える。

「どうしてだ？」

「わかんない…。昨日、気付いたら容量が大きくなってたの。」

…バグやウイルスは無い。ミクに歌わせた歌やセルフトークは保存しているが、VOCALOIDではない、違うプログラムのフォルダに保存している。

VOCALOID自体の容量が増えることは、おそらくない。

「私、どうすれば…。」

「…ミク。」

「なっ、何？」

「大きくなって、なんか不便になったこととか困ったことはあるか

「？」

「う、ううん、特にはないけど。」

「…そうか。…俺にも、原因はわかりそうにねえな。大きいのは、どうしても嫌か？」

「そんなことはないけど、ちょっと、イレギュラーなことだったから慌てちゃって。一応、報告しておこう、って思ってる。」

「そうか…。今回は直せそうにねえから、そのままいてくれねえかな。」

「うん…。」

「どうした？まだ、何か心配なことあるか？」

「…ケイは、私が大きくなっても、何とも思わない？」

「大きくなっても、ミクはミクだよ。…もしミクが大きくなって大変だ、って言うなら俺は全力で直そうとするけど。」

「そう…。ならいいわ。」

「んじゃ、今日も始めるぞ。」

…今日は、聞き直してちょっと変だったAメロを調整してみる。
体験版は楽譜の保存が出来ないので、また打ち直しということになる。

音を入力して、表情をつける。
パラメータなるものもあるが、ここはいじり方が難しい。
特に注意して打ち込んでいく。

…今度、パラメータのいじり方についてもっと詳しく調べておこう。
大体納得できる出来になったところで、部活の準備の時間になった。

「よし、今回はここまで。また夜な。」

「うん。」

「大きくなったことについては調べてみる。何かわかったら教えるよ。」

「うん、ありがとう。」

「じゃあな。」

「あつ、ねえ、ケイ。」

「ん？どうした？」

「…最近、疲れてる？」

「なんだ？打ち込みに何か変なところでもあったか？」

「そうじゃなくて…。ちょっと、顔色悪いように見えたから…。」

「大丈夫。俺は元気だよ。」

「…ならいいんだけど。私のせいで生活リズムが崩れてないかなって、ちょっと心配だったんだ。」

こいつ…自分の身に得体の知れない異変が起きてるってのに、俺の心配なんかしてる。

「大丈夫だ。元々、俺の生活習慣なんてそんなにきっちりしてねえから。」

冗談めかして言うと、

「ダメだよ。生活リズムはちゃんと管理しないと。」

普通に叱られた。

「ちゃんと寝てしっかり飯食ってるから大丈夫だよ。」

「ならいいんだけど……。」

「んじゃ、俺はこれで行くから。」

「はい。いつてらっしゃい。」

俺はパソコンを閉じ、部活へと向かった。

幕間 5・5…激励と天然と浮き雲

パソコンを閉じられたミクは。

「ほんとに、大丈夫かなあ…。」

自分のことはそっちのけでケイの心配をしていた。

…目の下に、うつすらとクマが出来ていた。
ちよつと睡眠不足なんじゃ？

等と考えていると、パソコンが起動された。
久しぶりに、あの人が来そうな気配。

「こんにちは。」

…どんぴしゃり。

案の定、パソコンを起動したのは啓大の母だった。

「こんにちは。」

「順調らしいわね。」

…微笑を浮かべてきいてくる。

「な、何がですか？」

「ケイト、今のところうまくいってるんでしょ？」

「そうですね、ケンカしたりはしてませんし、曲の方も滞りなく進んでいます。」

「ん〜。」

彼女はちゅちゅと指をふった。

「もうちょつと頑張らないと、あのニブチンは動かないわよ？」

「えっ、ええっ!？」

「私も大変だったんだから。あの子のお父さんにもつぶくてね〜。
似てもらっちゃ困るところ父親似なのよね、あの子。」

「あの…、話が、少し発展し過ぎてませんか？」

「何言ってるの？あの子に、女として見られたいんでしょう？」

「うっ…！」

「ほら、図星。」

「…どうして、わかるんですか？」

「顔に書いてあるわよ？」

と平然とのたまう。
ミクは思わず顔をこすった。

「それじゃ落ちないわよ。それって、結構強力にこびりついてるんだから。」

訳がわからずあたふたするミク。

「ど、どうすれば…。」

「どうもこうも出来ないわ。」

また、あっさりと言ったのける。

慌てるミクを面白そうに見ながら、彼女は続ける。

「大丈夫。それに気付く人は少ないから。」

「でも、ケイに気付かれたら…。」

「それに気付いたら、私はあの子のことをニブチンだなんて言わないわよ。」

「あつ…。」

そこまで言われて、ようやくミクは意味を理解した。

…恥ずかしい。

自然と、顔が赤くなるのがわかった。

様子を察したのか、さらに笑みを深めながら彼女は続けた。

「まあ、頑張つてね。あのタイプは、惚れると一途だから。かわいいわよ〜?」

等と茶化す。

「はい…。」

ミクはまだ、恥ずかしさから立ち直れそうになかった。それでも、やはり朝の彼の様子が気になった。

「あつ、あの…、ケイ、最近元気無くないですか?」

「そうかしら?少し寝不足みたいだけど、それは前からだし。」

「そう、ですか…。」

「何か、気になることもあった?」

「目の下にクマが出来てたんです。」

「たまにあることよ。それに、この家は今日、いつもよりぐっと冷えたの。だから、顔色悪いように見えたんじゃない？」

「そうですか…。」

「ミクちゃんは気が利くわね。」

「いえ、そんな…。」

「ケイにはもつたないくらいね。…じゃあ、あんまり時間はないけど、頑張ってね。」

「…はい。ありがとうございます。」

そう、ミクには時間がないのだ。

「そついえば…、」

「何？」

ミクに、ふと素朴な疑問が浮かんだ。

「どうして、私のことを応援してくれるんですか？」

そう、よく考えれば、ただのソフトウェアのVOCALOIDである自分に息子をまかせるなど、なかなかしようとは思わないはずである。

「ソフトだろうが何だろうが、恋する乙女は応援したくなるのよ。」

…つくづく、つかみどころの無い人だ。

ミクが彼女に対して感じた印象は、奇しくもケイのそれと同じだった。

第6話…涙と叫びと悔しさ

部活は、いつもよりさらに練習メニューが辛かった。

「ふう…。」

それでも、俺は2年生。3年生が引退した今、先輩として、簡単にへばる訳にはいかない。

気力と体力を振り絞り、声で自分と周りを盛り上げながらメニューをこなす。

「おおっ！」

…ほんとは、あまり大きな声はむやみに出したくない。でも、こればかりは仕方ない、と割り切って今に至る。

…そうして、今日も部活が終わった。

「お疲れ〜。」

「お疲れっす。」

等と挨拶を交わし、帰路につく。

…あいつがいれば、ミクの容量増大について何か聞けたかも知れないけど…。

考えかけたところで、無いな、と思い直す。

…そもそも、今ミクに起きていること自体、端から見れば異常なにとらしいからな。きっと、ヤツに訊いてもわからないだろう。

一応、俺のケータイの検索エンジンをフル活用して調べたが、引っかけからなかった。

全国的に見ても例が無いようだ。

…ますますわからなくなる。

容量の増大。その意味すること。

原因、作用、副作用、全てにおいて全く不明。

普通にVOCALOIDの打ち込みをする分には、全く問題なかった。

だが、これから問題が出てこないとも限らない。

何しろ、バグやウイルスとして感知されていないのだ。何が起こるかわからない。

「はあ…。どうしたもんかねえ。」

空を仰ぐと、星が瞬いていた。

この街は都会とも田舎とも言えない、言うなれば、田舎よりの片田舎と言うべきか。
でも、星の数は意外に少ない。

「綺麗だなあ…。」

いつかは、ミクもあの中のひとつになるのかな、…なんて似合いもしない非現実的な感傷に浸り、家路を急いだ。

家の自転車置き場に自転車を投げ捨てるように置き、鍵をひねって思い切り引っこ抜く。
そのままの勢いで玄関に飛び込む。

「ただいまあ！」

「お帰り。ちょうどいいからそのままお風呂ね。」

「はいよっ。」

部活の洗濯物を引っ掛けて、俺は風呂場へと急いだ。
汗を念入りに流す。

…今日は何をしよう。

あの曲のフルコーラスを歌わせるには時間が足りない。

なぜかと言うと、全てのサビに同じ楽譜が適用できるわけではないからだ。

打ち直しをしなければいけない上に、そのあたりの微調整がまだなのだ。

今日は、カバーにするか。

「…カバーなら、あの曲だな…。」

曲は、すぐに思いついた。

風呂場を出て、着替えて飯を済ませ、パソコンを立ち上げる。

「具合はどうだ、ミク？」

「あつ、ケイ。平気よ。」

「何か変わったことはあったか？」

「うっん、無いよ。」

「そうか、よかった。」

ひとまず、ミクの無事を確認してひと安心する。

「ケイは、大丈夫だった?」

「俺は大丈夫だって。ミクは自分の心配だけしてればいい。」

ミクは小さく頭をふった。

「そんなこと、できないよ。」

「えっ?」

何で、と聞く間もなく、

「ケイは、私に心配されるの、迷惑?」

「い、いや…。そんなことないけど…。」

…ほんとは、めちゃくちゃ嬉しい。

家族内でも、こんなふうに俺の体調を心配してくれる人はいない。
…内心では、してるかもしれないけど。

「…ありがとな。俺は本当に大丈夫だ。」

「そう…。…私も、きっと心配いらないわ。もし、機能に支障が出たら、その時はよろしくね。」

「ああ、その時は、俺が絶対助けてやるから安心しろよ。」

「うん！」

「よし、そんじゃ始めるか。今日の朝の続きをやるにはちょっと時間かねえから、カバーな。」

…ちよつと不満そうだ。

「あそこから先は微調整が必要なんだ。今日のところは我慢してくれないかな。」

「うゝ、わかったわよ。」

…この間のような気持ちのよさは無いが、ミクは綺麗な声で歌い上げていく。

俺の方も、どこをどういじればどういった変化があるのか、大体わかってきた。

そんな感じで、1コーラスを打ち終わった。

「よし、OK。今日はこころで終わりにするか。」

「…明日は、あの曲歌わせてよ。」

ちよっとムスツとしながら言われた。

「ああ、わかってる。」

「ねえ、ケイ…。」

「ん？何だ？」

「これから先の私の言うこと、茶化さないでちゃんと聞いてくれる？」

急に真面目な顔で言ったミクは、少し震えていた。

俺は今までに無いただならぬ様子に、少し緊張した。

「…うん。」

「私ね…、わからないの。」

「何が？」

「自分が何なのか…。ケイ…、私、『VOCALOID』よね？歌うことしかできない、ただのボーカル音源作成ソフトよね？」

…正直、この質問にはすげえ驚いた。

俺は、この質問に「YES」を出してはいけない気がした。

…いや、違うな。

正確には、「『YES』を出したくない自分がいた」だ。

「…確かに、ミクは端から見たら、ミクの言う通り『VOCALOID』だよ。でもな…。」

「な、何…?」

「俺から見たら、もうVOCALOIDと使用者なんて間柄はとっくに通り越してるんだよ。もう、ミクはただのVOCALOIDじゃない。世界で唯一、小松啓大の『初音ミク』だ。俺だけの、大切なパートナーだ。」

ミクは一瞬顔をくしゃくしゃにして、少し俯いて、もう一度、口を開く。ミクの震えは、だんだん大きくなっていった。

「…じゃあ、もうひとつ質問していい…?」

「ああ、いいぜ。」

「私ね…、ケイのこと…、…好きなの。」

「えっ!?!」

ミクは、真っ直ぐに俺を向いて、吐き出すように喋り出した。

「大好き！愛してる！I love you！サランヘヨ！！どんな言葉を使っても、この気持ち伝えきれない！」

ううう、とミクは泣き出してしまった。

それでもミクは、最後の声を振り絞らんとばかりに、叫んだ。

「私、どうしたらいいの！！？私はこんなにケイのこと好きなのに、触ることさえゆるされないなんて！！！わかんない、わかんないよ！！！！！」

ミクはモニターに頭と両手をつけてもたれかかり、大声で泣き叫んだ。

「うわあああああ！」

…俺は、ミクの頭に手を伸ばした。
もちろん返ってくるのはモニターの無機質な感触だけだったが、俺はモニター越しにミクの頭をなでた。

その感触はミクには伝わらないはずだが、ミクははっと顔を上げた。

「…ごめんな、ミク。今の俺にできるのはこれくらいだ。」

「…ううん、いいの。マスターに愛してくれなんて言うのは、図々しい高望みだって、わかってる。」

「ミク。お前、勘違いしてるぜ？」

「えっ…！？」

「俺も、ミクのことを好きだ。」

ミクの目が、大きく見開かれる。

「…ほんとに？」

「こんな場面で嘘をつけるほど、俺が器用な男に見えるか？」

ミクは弱々しく、ふるふると首を横にふった。

「でも…。私…。ただのソフトだよ？歌以外のことは、何一つできないんだよ？」

「何言ってるんだよ。ただのボーカル音源作成ソフトが、そんな感情に苦しむわけ無いだろ？それにな、俺にとっては利害と愛情は別物だ。もし、ミクが何もできなくなったとしても、この気持ちは変わらない。もう一度言おう。ミク、俺はお前が好きだ。」

「…ありがとう…！」

ミクは袖で涙を拭った。が、涙は次から次へと出てくるので、あまり意味をなさなかった。

「今日はもう遅い。そろそろ、寝ようか。」

「…うん。」

…パソコンを閉じ、俺は寝室へと向かう。
その途中、俺は考えた。

…さっきミクに告げた気持ちに嘘はない。
ただ、既に定められた別れが、刻々と迫っているのだ。
俺は、それに抗う術を持たない。

俺にできるのは、ミクに精一杯の思い出と愛情をあげることだけだ。

…ちくしょう。

幕間6…実りと解放と現人

その頃のミクは。

「……………」

まだ、モニターの前から離れられなかった。

…今まで心の奥底に仕舞い込んでいた気持ちを、全て、洗いざらい彼に向けて吐き出した。

…怖かった。

…辛かった。

…彼の言葉が、嬉しかった。

もはや、今のミクには何もない、空っぽだった。

涙が、止まらない。

さっきは悲しさだけだったけど、今はいろんな気持ちが涙となって溢れている。

ミクはほぼ放心状態のまま、涙を流し続けていた。

涙を止める気も起きなかったし、止めようとしても、きっと無理だっただろう。

こういう時、いつもミクは「端から見たら」と考えていたが、もはや、そんなことを気にする余裕などなかった。

ちよっぴり切ないけど、とっても幸せな、今の気持ち。

…お願い、今だけは、誰も邪魔しないで。

幸い、今のミクを邪魔する野暮なものは、パソコン内にもこの家の中にもなかった。

しばらくそうして涙が止まった後、ミクは仰向けに寝転んだ。

「…ケイ…。」

その時、ミクはまた自分が大きくなっていることに気付いたが、もはやどうでもよかった。

…もう、そんな些細な事じゃ不安にはならない。

「ほんとに、ありがとう…！」

噛みしめるように言った。

「だい…す…き…。」

そう言うと、顔が自然に笑顔になった。

…もう、悲観的にはならないね…。

しかし…、泣くということは、意外にたくさんの気力と体力を消耗するらしい。

ミクは、そのままの体勢、そのままの表情で眠りに落ちていった。

…夢の中でも…、逢えるかな…？

…きっと、逢えるよね…。

第6・5話…仮定と未来と帰ってきた日常

…昨日、如何にイレギュラーなことが起きようとも、生きてさえいれば、明日はやってくる。

「…おはよう。」

「おはよ。」

…なんだか、複雑な気分だ。
俺はミクのが好きだし、ミクも、あんなになってまで俺のことを好きだと言ってくれた。

本当に嬉しかった。

でも…、ミクに残された時間は、あと1週間。

別れは、確実に迫っている。

それを考えると、素直には喜べない。

…俺にできることは、あの歌を歌わせてやることと、できるだけ側に居てやることだ。

・・・無力だな、俺は。

「どうしたの？ 思い詰めたような顔しちゃって。」

「・・・何でもない。」

母は、珍しくそれ以上の追及をしてこなかった。

普段、母は昨日の朝のように首を突っ込んで茶化してくる。だが、今日に限ってはそれがない。

…今の俺って、そんなにすごい顔してんのかな…？

そっという考えはひとまず置いて、朝食をとることにする。

…顔は、後で鏡で見ればいい。

しかし…、ただの体験版 VOCALOID があんなことになるとは、誰が考えただろう。

そして、自らが VOCALOID に対してあんな感情を持つなどということも。

さらに、容量が増大したミク。

ひょっとして、彼女が他の VOCALOID より、より人間らしい感情を持ち、さらに恋愛感情を抱くまでに至ったことに関係しているのだろうか？

…そうすると辻褄があう。

元々VOCALOIDに備わっていた、最低限のナビゲーションシステム。

それに、何らかのきっかけでどこからか感情を司るプログラムが流れ込み、それに伴って容量が増えた…。

…正直、プログラムのこととかそういうことは、全くと言っていいほどわからない。

でも、この考えは理にかなっていると思うのだ。

…待てよ。

もし、この考えが正しいとすれば…、

あの問題を解決しようとすれば、今のミクはいなくなってしまうのではないか？

そんなのは、嫌だ。

でも、もしこのままミクの容量が増え続けたらどうなる？

…わからない。

朝飯を終え、歯を磨いて顔を洗う…前に鏡を見る。

あ、眉間にシワよってる。

顔を洗って、顔の皮を縦横に引っ張る。

…よかった。消えた。

さて、今日からまた1週間の始まりだ。

俺は衣替えした制服に着替え、いつも通り弁当と水筒を鞆に突っ込み、自転車の鍵を持って自転車のもとへ歩く。

…うわ、ひどい倒れ方だ。

幕間 6・5…妄想と責任と親離れ

…ミク。

…なあに？ケイ。

…今日は、どこへ行くのか。

…ケイのおすすめの場所なら、どこでもいいわ。

…そうだな、じゃあ…。

…そんなタイミングで、ミクの夢は覚めてしまった。

…夢、か…。

…夢？

私が、夢？

昨日、ちょっと期待したとはいえ、本当に見るとは。

…惜しかったな。もう少しで、ケイのおすすめの場所に連れていってもらえたのに。

どこだろうな。ケイのおすすめの場所。
きつと、綺麗な場所なんだろうな。
見てみたい。

デートかあ…。

…目が覚めても、ミクの意識は明後日の方向を向いていた。
夢の中と、そう大差無かった。

…ケイは、意外にロマンチストなんだよね。
きつと、そういう景色の1つや2つはあるよね。

山の上かなあ…、海岸かなあ…。

うふふふふ…。

…今のミクを止める物は、何もなかった。

と。

パソコンが起動された。

ミクはようやく我にかえり、モニターを見る。

…こんな時間にパソコンを起動する人を、ミクは1人しか知らない。

「こんにちは。」

「あら、ミクちゃん。…何かいいことあった？」

ちよつと声をひそめて訊いてくる。…が、周りに誰かがいる訳でもなさそうだが。

「ええ、まあ…。」

「ふーん…。」

彼女は、じつとミクを見てくる。…いろいろと、見透かされそうだし、
そういう目で見られると、ちょっと焦る。

「あの、ど、どうかしましたか？」

「…もしかして…。」

「な、何ですか？」

「…いえ、何でもないわ。それより、ミクちゃん。」

「…はい？」

「…もう、私の助言はいらないわね？」

…やはり、見透かされていたか。

「…はい。」

「…朝ね、ケイが眉間にシワよせて、すごい思い詰めたような顔してたから気になったの。でも、今のミクちゃんの様子を見たら安心したわ。…ケイのこと、よろしく頼むわね。」

「…はい。」

「じゃあね。」

そう言っつて、ケイの母はパソコンを閉じた。

…なんだか、責任重大だなあ…。

…でも、きつと今は、彼の一番の相談相手になりうるのは私なんだろうな。

…よくわからないけど、ケイのお母さんが私に言ってきたんだから、そういうことなんだよね。

…ケイのことはお任せ下さい、お母さん。

決意を新たにするミクだった。

第7話…感謝と鷹の目と恋模様

…最近ぐつと冷えたせいか、欠席者が増えたな。

まあ、俺はいつも通り授業をこなすだけだな。

部活も、冷えるから体が動かしづらい。

ウインドブレーカーを羽織って冷やさないようにする。

日暮れも早まって、制服に着替えても帰りが寒い。

頑張って自転車こいで、体暖めながら帰るか。っていうか、それしかない。

気を付けよう。風邪とかインフルエンザとかになって、ミクにいない心配をかけさせたくない。

…ミクのやつ、昨日の様子だと、俺が少し放置でもすれば、ヤケになってパソコン内のプログラムを全てハックしたりしそうだ。

…その前に、第一、俺が、ミクを放置することにたえられない。

とにかく、今は変に体調を崩してる場合なんかじゃない。

とにかくにもかくにも、家に着いた。

…昨日の教訓を踏まえ、今日は急ぎながらも自転車は丁寧にとめる

ことにする。鍵かけもゆつくりな。

「ただいま。」

「お帰り。」

ひとまず、俺は鞆を投げた。

「お弁当と水筒は片付けなさいよ。」

「……はいはい。」

というわけで、俺は鞆を開き、空の弁当箱と水筒を持って台所へ向かった。

弁当の仕切りの銀紙やらつまようじやらをゴミ箱に捨て、空箱と水筒を流し台に置いた。

「ねえ、ケイ。」

「ん？何？」

…また、なんか下らない話だろう。
…適当に受け流しとけばいい。

俺は水を出そうと、水道のレバーに手を伸ばした。

「…大事にしてあげなさいよ。」

…思わず、レバーを握る右手に力が入った。
もちろん、ドバツと水が出た。
あわてて水を止め、恐る恐る振り向く。

「…何のこと？」

「言わなくてもわかるでしょ？」

「…はい。」

…なんと。そこまで見抜かれていたか。
…恐えよ。母さん、あんた恐えよ。

「…言われなくても、あいつは俺にとって大切なパートナーで、恋人も同然だ。大事にするよ。」

「よし！それでこそ我が息子！」

…母さんが珍しく、肩をがっしり掴んで揺すってきた。俺は母さんをどおどおと止めて、

「んじゃ、俺は風呂行ってくつから。」

「はい。」

俺は風呂に向かった。

今日は、風呂で考え事をすることもない。
昨日、約束したからな。あの歌を歌わせるって。

というわけで、体を洗ったら風呂からはさっさと上がり、飯をちやつちやと済ませ、すぐさまパソコンを立ち上げる。

「よお、ミク。」

「あつ、ケイ。」

モニターに向かいあったミクは、ちょっと頬を赤くして、ちょっと視線を逸らしている。

何にも知らない人が見たら、これがVOCALOIDだとは思わないだろう。

「具合はどうだ。」

「うん、あれからまたちょっと大きくなったけど、特に問題はないよ。」

「何か困ったら、遠慮せずに言えよ。」

その言葉にミクははっとして、少し真面目な表情になって口を開く。

「ケイ。ケイも、何か悩んだりしたら、遠慮なく私に言ってね。」

「あつ、ああ。」

ちよつとだけ、不意をつかれた形になった。

「んじゃ、その時は頼むな。」

「うん。」

「じゃあ、約束通りあの歌の続きを、今日は歌ってもらっちゃおうかな？」

「わーい！」

…へへっ、可愛いやつめ。

今日は、2コーラス目をミクに歌ってもらう。

今までの楽譜の記憶をたどり、元のメロディを打ち込んでいく。

そこに歌詞をあわせ、少しだけ歌ってもらい、不自然なところを修正して、また歌ってもらう…の繰り返し。

だけど、その「不自然なところ」ってのが、全て自分の感性でしか判断できない。そこが難しく、そして面白いところだ。

オリジナルのメロディには、ぼんやりとしたストライクゾーンはあるが、「これが正解」というものは無い。

自分が打ち込んだメロディ、それが正解になる。

それを、如何に自分のぼんやりしたストライクゾーンに投げ込むか、そこが勝負。

今日の俺の歌は…、ほぼストライクゾーンに入った、かな。

「よし、第2コーラスはこんな感じだな。」

「綺麗な歌だね。」

「ありがとう。」

…どうやら、ミクのストライクゾーンにも入ったようだ。
その時、思い出したようにミクが口を開いた。

「ねえ、ケイ。前から気になってたんだけど…。」

「何だ？」

「どうして、こんなにストレートな女性詞が書けるの？」

…当然の質問だな。

俺の見た目から、こんな女性詞を書くとは思えないだろう。

「俺な、恋愛事になると、かなり女々しいんだ。」

「そうなの？」

「ああ。だからきつと、恋の歌を書くときは女性詞の方が表現しやすいんだと思う。」

「へえ。ちよつと意外だな。」

「そうだろ。…あとな、理由は、きつとそれだけじゃない。」

「何？」

「お前が来てくれたからだよ、ミク。」

「えっ！」

「ミクがいてくれたから、俺はミクのために詞が書ける。歌い手のない詞は、ただの言葉の羅列にすぎない。ミクがいるから、俺は安心して女性詞を書ける。」

「…ありがとう。」

「礼を言いたいのは俺の方だ。俺みたいな初心者が書いた詞を、こんなに気持ちよさそうに歌ってくれるんだからな。作詞冥利に尽きるってもんだ。…いつもありがとな、ミク。」

「えへへ。」

「じゃあ、また明日な。」

「うん、お休み。」

よし、明日も頑張ろう。

幕間7…春とデータと揺らめきと

啓大が気合いを入れている頃、ミクはというと、

「えへへ…。」

…かなり、浮かれていた。

…ケイが、私のために。

自然と、笑みがこぼれる。

しばらくそうした後、ミクは、WEBで桜について調べ始めた。

結果はすぐに、大量に出てきた。

画像検索結果を表示すると、画面がピンク一色になった。

「これが、桜…。」

花弁が風に舞い上がった瞬間を写した写真を見たその時、歌のイメージが一気に思い浮かんできた。

…データの処理が、間に合わない。

処理しても処理しても、次々とデータが現れる。

…うわっ、これは、ちょっとしんどいな。

しばらくミクは、その膨大な量のデータの処理に時間を費やす羽目になった。

…でも、これ乗り越えれば、きっと明日からもっといい歌が歌えるな。

…ケイ、喜んでくれるかな。

…もうちょっと、頑張ろう。

ミクは頭に手を当てて集中し、データ処理の精度と速度を上げた。

…こんな量のデータ処理なんて、初めてかもなあ…。

…これは、疲れるな。早めに終わらせて、早めに休もう。

データ処理が終わる頃には、もはや夜中ではなく早朝になっていた。

「疲れた〜！」

…もっと早いタイミングでやってれば、もっと楽だったかな…。

…まあ、しょうがない。今日のところはもう寝よう。

…また、私、大きくなってる。
特に問題は無いし、平気でしょ。

…ん？

そこで、ミクが感じた、大きくなった以外の違和感。

「何だろう…。この違和感。」

言いながら辺りを見回すと、…見つけた。
それは、特に何でもない場所に、ぽつんと点のように見えた。

「何、あれ…?」

眠い目を擦りながら近づいて見ると、そこは、厩気楼のように揺らめいていた。

…近づいて見ても、やはりわからない。

調べても、バグやウィルスの類は、大きくなった時と同様、見つからなかった。

…今度も、きっと大丈夫だよ。

そう言い聞かせ、ミクは床についた。

第7・5話…想いと期限とローテンション

寒いけど、さっぱりとした目覚めを迎えられた。
よし、今日も頑張っていけますか。

「おはよう。」

「おはよう。早いわね。」

「目が覚めちゃってね。」

時間は…、6時半か。
確かに早いな。

俺はカフェオレを口に入れ、ひとまず喉を潤した。

「昨日は、あの後どうだったの?」

「ああ。曲は順調だし、ミクも喜んでくれてる。万事順調って言うても過言じゃないね。」

「そう、よかったわね。」

とは言ったものの、ミクと過ごせる時間が、あと1週間を切ってしまった。

…これほどに、時間を恨めしいと思った事はない。

「…その割には、怖い顔してるわね。」

「そう?」

「まあいいわ。たくさん悩みなさい。」

…これには、ちょっと返す言葉が見つからなかった。

…本当に、俺には、何もできないのか?

…できない。

…悔しい。

ミクが消えていくのを、ただ見ているだけしかできないなんて。

その時、ミクが消える様子が、リアルに想像できてしまった。
リアル過ぎて、思わず声をあげそうになった。

「…！」

すんでのところで止められた。
危なかった。油断していたら、確実に「待ってくれ！行かないでくれ！」と叫んでいただろう。

…ああミク、あんまり、俺を悩ませないでくれ…。

…あのイメージが浮かんでしまったために、朝飯になかなか手がつかなくなってしまった。

結局、全ての準備を終えて家を出る時には、いつもの時間に戻っていた。

…ヤバいな…。このままだと、一日中このローテンションで行くことになっちまう。

朝の星座占いは、そんなに悪くなかったんだけどな…。

…まあ、今時星座占いで1日のテンションが決まる人なんていないだろうけど。

…ローテンションだと、授業は平気でも部活が厳しいんだよな。
何とかしてテンション上げて行かないと、今日、俺は持たないぞ。

…かといって、テンションなどそんな簡単に上がるはずもなく、不安を抱えたまま、俺は自転車にまたがった。

幕間 7・5…寝坊と恐怖とブラックホール

その頃、ミクもようやく目が覚めた。

「ふああゝ。」

ひとまず、時計をチェックする。

…ありゃ、私、お寝坊さんだね。

…そういえば…。

ミクは、寝る前のことを思い出した。
そして、見る。

寝る前に見た、部屋の隅を。

…まだ、ある。あの揺らめきが。

ミクは布団から転がり出て、揺らぎのある部分に近づいて見てみた。

…本当に小さな蜃気楼のようだ。

だが、ここはパソコンの中。蜃気楼など発生するはずがない。

「ほんとに何だろうね、これ。」

そう言つて、何となく右手を伸ばした…その時。

「きゃあっ！？」

突然、ミクの右手がものすごい勢いでその揺らぎに吸い込まれそうになった。

急いで右手を引っ込め、…間に合った。

「びつ、びつくりした…。なんなの、これ？」

…全くもって不明だ。

バグやウイルスはやはりない。

ミクは、吸い込まれそうになった右手を見てみた。
引っ張られたせいで少し痛い、他に異常はない。

試しに、揺らぎに長ネギを一本、投げつけてみる。

…壁に吸い込まれるように消えて、どこかへ行ってしまった。

「うわぁ…。」

…ちょっと怖いな…。どこ行っちゃうんだろう？

気になって、ミクはVOCALOIDの全体の容量を調べてみた。

すると、少しだけ容量が減っていた。

…ネギ…、無くなっちゃった。

…まさか、消去された？

それを考えたたん、ミクは自分の背筋に冷や汗が流れるのがわかった。

私も、もし、あの時吸い込まれてたら…。

…怖い、怖いよ、ケイ！

…助けて！

ミクは、不安に満ちた日中を過ごす羽目になった。

第8話…哀と出逢いと愛と

結局、テンションは上がらないまま、授業が終わってしまった。

…まあ、普通は授業でテンション上がる人なんていないだろうけど。いるとすれば、よっぽどの勉強好きだな。俺には、そういう人にはなれそうにない。

…俺って、自分が思ってる以上に弱い人間なのかもしれない。ことのほか、歌と恋愛に関しては。

今回は、どっちも絡んじまったからな…。

こういう俺の弱い一面を知ってる奴は、この高校にはいない。高校進学の段階で、みんなみんなバラバラになっちまった。…今でも、たまにつるんだりしてるけど。

いつ会っても、アイツらは変わんねえな。

…人は、表面は環境で変わるけど、根っこの部分はそう簡単には変わらないんだろう。

…俺も、この弱っちい部分は変えられそうにねえ。

でも、好きなこと、好きなもの、好きな人、譲りたくないもののために悩んだりする事ってのは、そんなに悪いことじゃない。最近はその思えるようになってきた。

…でも、そういう弱い部分をさらけ出すのは、いくら信頼してる人の前でも怖い。

これは、今でも変わらない。

正直、今、俺は迷ってる。

ミクは俺に、悩みがあるなら相談しろ、と言った。

けど、それがミクに関することだったら？

…きつと、ミクは辛い思いをする。

今の俺の悩み事は1つだけ。

…ミク。お前が消えることだ。

部活も、やっぱり不調だった。

メニューがうまくこなせずに、先生に怒られた。

…お前は2年生なんだからしっかりしろ、だってさ。

…そんなこと、わかってる。

部活が終わった。

…こんな日は、一刻も早く家に帰って、ミクに会うに限る。

「ただいま。」

「お帰り。」

俺は水筒と弁当を片付け、風呂場へ急いだ。

さつさと体と髪を洗い、湯船に入る。

うわぁ、風呂熱っ。

お湯、何度だよ。

…42度！？これがか？

…寒くなってきた、手先や足先が冷えると、よくあることだ。

…なんてことをしてる場合じゃなかった。

少し暖まったところですがすぐに風呂から出て、さつさと着替える。

…元来、俺は暑がりだ。これくらいがちょうどいい。

飯は…、鍋。

マズイな…。味が、ではなく、鍋だと食べきるのに時間がかかってしまう。

それでも、俺は奇跡的な早さで食べ終わり、パソコンへと向かう。

パソコンが視界に入った時、なにやら違和感を覚えた。

…言い忘れていたが、うちのパソコンはノート型だ。普段は閉じて

いる。

違和感の正体は…、パソコンの画面とキーボードの間に、なにやら挟まっている。

緑色と白のそれは、ちょっとキツめの臭いを放っていた。

「…ネギ？」

…訳がわからん。

とにかくパソコンを開け、ネギを母さんに持っていく。

「母さん、パソコンのところに忘れ物。」

「えっ？今日私、持ったネギは全部鍋に入れたわよ？」

「は？じゃあ、何であんな所にネギがあるんだよ？」

「知らないわ。…っていうか、そんな立派なネギ、どこにどうあったの？」

「…パソコンに、挟まってた。」

「訳がわからないわ。そもそも、ネギ持ってパソコンはやらないわよ。」

まあ、そうだろうよ。けど、母さんしか考えられないんだよ。

…とにかく、ネギを母さんに渡し、俺はミクのもとへ急ぐ。

タイムロスした分、急いでパソコンを立ち上げた。

…ミクの様子が、なにやらおかしい。

「ミク、どうかしたか？」

ミクは、…何かに怯えていた。

「ケイっ…！逢いたかった…！」

…ミクは泣き出してしまった。

「ああ、俺もだ、ミク。…落ち着いて、何があったか話してくれ。」

「うん…。」

…ミクは、部屋の隅を指差した。

「…あそこ…。」

「…あそこが、どうかしたか？」

「…？見えないの？」

「うーん…、そういや、なんか見えるな。こつ、ゆらあつと…。」

「そうなの…。」

「…バグは無いっばいけどな…。あれが、どうかしたのか？」

「実は…、あれ、ブラックホールみたいなもの。」

「ブラックホール？それって、宇宙空間にある光さえも中から出られない、っていうあれか？」

ミクはこくりと頷いた。

「私…、あそこに吸い込まれそうになったの。」

その時のことを思い出したのか、ミクはまた震えだした。

「…怖いよ…！」

…データに変な所は無い。明らかに、俺でどこまでできる範囲を超えている。

そして、この家で俺よりVOCALOIDに詳しい人はいない。

…ウイルスでもないしな…。この間、母さんがウイルス対策ソフト入れたって言ってたし。

くそっ…。どうしたらいい？

…俺はミクに、また何もしてやれないのか？

「ケイ…？」

「何？」

「ケイ、怖いよ？」

…さっきとはニュアンスが違う。

つまり、また俺はすげえ顔をしてるって訳か。

「…原因が、わからないんだ。」

「ねえ、ケイ。」

「どうした？」

「ケイが私のために頑張ってくれるの、すごくうれしい。でもね、ケイのそういう怖い顔、ミクは見ていたくないな。…ねえ、笑って？」

…俺は、ミクを見た。

ミクは笑顔だった。けど、泣いていた。

…なんてことだ。

一番ミクを苦しめているのは、あのブラックホールでも何でもなく、俺自身じゃないか。

「……!」

俺は……、最低の男だな。

それは、俺の思いとは裏腹に、勝手にあふれてきた。

「……泣かないで。」

……そんなこと言われたら、余計に泣けてくるに決まってるだろ。

「ミク……!俺も、怖いんだよ……!お前に、消えてほしくないんだよ……!」

「……大丈夫、私は消えない。平気だよ。」

「でもっ……!」

「大丈夫だよ。」

…ミクの顔から、いつの間にか涙が消えていた。

「…ごめんな、ミク…。お前も、不安なのにな。」

「うっん、いいの。心配してくれてありがとね。」

「…強いな、ミクは。」

「そんなことないよ。」

「悪い…。今日は、1フレーズでいいか？」

ミクは少しだけ、首を横にふった。

「…無理しないで。今日は、もうやめよう。」

「…ありがとう。…あのさ、1つだけ、わがまま聞いてくれるか？」

「なあに？」

「ミクの歌を…、聴かせてくれ。」

「わかった。」

ミクは違うフォルダから自分の歌を呼び出し、歌った。

「
」

…何だろう。また、泣けてきた。
まだフルコーラス歌わせたデータがないので、歌は1コーラスで終わった。

「…ありがとう。」

「…これくらい、おやすい御用だよ。」

ミクは微笑んで、

「おやすみ、ケイ。」

「ああ、おやすみ、ミク。」

…ほんとに、何回「ありがとう」って言っても、今の気持ち、伝えきれそうにねえや。

幕間8…基本と異常と心配事

…今日は新しいところ歌えなかったけど、少しでもケイが安心してくれれば、私はそれでいい。

…きつと、あの穴も放っておけば何もしいだろう。そんなに深刻に考えなくても平気だ。

ケイのああいう感じの気持ちに、ミクは心当たりがあった。

…ちょっと前までの私、ずっとあんな感じだったのかも。

初めて、ケイの本心を見れた…のかも。
でも、私、ケイにちょっと心配かけすぎてるかもしれない。

気をつけよう。彼に心配をかけるのは心苦しい。

ミクは穴を見た。

…できた原因、意味…不明。
わかったのは、かなり強い力でデータを吸い込む、それだけ。

…私も、吸い込まれそうになったからね…。

「私、負けないからね…！」

ミクは、部屋の隅に揺らめく穴をキツと睨み付けた。

…なんか、疲れたな。

明日からは気にせず、普通に過ごそう。

ミクは床に寝転がり、天井を仰いだ。

…なんか、落ち着かない。どうしよう…。

…やっぱ、私と言えばこれしかないかなあ。

「
」

ミクは立ち上がり、歌い始めた。場所は、いつも歌う時の位置。いつもはマイクを使うから、本当はどこでもいいんだけど。…この位置は、ほぼ穴の正面だ。
曲は、もちろんあの歌。

…おかしいな。この部屋、いつもはもっと響くのにな。

…まさか、歌声も吸い込まれてる…！？

そこで、ミクは穴に背を向けて歌ってみた。…すると、ほぼいつも通り響いたのだ。

「…やっぱり。」

…ネギみたいな、サイズの小さいデータは吸い込まれたら消去されるかもしれないけど、歌は消去するのは難しいはず…。
どうなってるの？

…わかんない。

ミクはひとまず、布団にもぐり込んだ。

…ちっちゃくなつたな、この布団。

ちょっとだけ疲れが出て、ミクはすうつと眠りに落ちた。

第8・5話…平和と太陽の旋律

…ミクのおかげで、昨日は本当によく眠れた。

そして、すっきり目覚められた。

…ありがとな、ミク。お前のおかげで、今日はいいい日になりそうだ。

いつものように挨拶を交わし、朝食の席に着く。
…いつもの朝飯が、ちよつと美味しく感じた。

「…何かいいことでもあった？」

母さんが訊いてくる。

「…まあね。」

「へえ…。なにになに？」

隣にいた姉が興味を示した。

姉は、いつもは家をとて早く出て、早い時間に帰ってきてすぐに寝てしまう、謎の多い人だ。

今日に限って、比較的遅い時間まで家にいた。

…そっか、姉さんは俺とミクがどうなってるのか知らないのか。
俺は母さんに目配せしながら、

「教えねえよ。」

と答えた。

「えゝ！？何でよゝ！？」

俺は姉さんの肩をポンと叩き、こう言った。

「姉さんだって、俺に教えたくない事の1つや2つあるだろ？」

「うっ…！」

「つまりはそういうことなんだよ。」

姉は不満そうだったが、「うゝ、わかったわよ。」と言ってしぶしぶ引き下がった。

…母さんもそうだけど、姉さんもなかなか年齢不相応なリアクシ

ヨンしやがるな。

ふとそんなことを考えた。

…どこにでもある、過不足ないくらいの幸せな朝食風景。
それが今、小松家のリビングで展開されていた。

いつも通り歯を磨き、顔を洗い、学校の支度をする。
慌ただしいのもいつものことだ。

こういうどうでもいい光景が、実は素晴らしい事のように思えてくる。

…ちょっと年寄りっぽい考えかもしれないけど。

…と。

なにやら、聞き覚えのある歌声が聞こえた気がした。

…まさか、な。今は誰もパソコンを起動してない。
きつと空耳だろう。

すぐ聞こえなくなったし。

…おっと、学校に遅れちまう。

弁当と水筒を鞆に入れたことを確認し、玄関に置いてある自転車の鍵を引っかけるようにとり、

「行つてきます！」

「忘れ物ない？」

「ないよー！」

いつものやりとりを交わして自転車に鍵を差し、学校へ向かった。

「
」

…久しぶりだな。通学中に鼻歌が出るなんて。

東へ向かって自転車で走る俺を、太陽が迎え入れてくれるようだった。

幕間 8・5…回避と自己犠牲の歌声

朝早く目覚めたミクは、また歌を歌ってみた。

…やっぱり、響かない。

歌声はどこに行っちゃったんだろう？

いつも歌う時は、使用者が保存しない限りすぐに消える。そういうふうになっているのだ。

今のように、ミクがデータチェックと調整を兼ねて歌う時は、部屋の中を反響して消える。

でも今は、どうやら穴に吸い込まれ、どこかに行ってしまったらしい。

…歌声がこの部屋から外に漏れるなんて話、聞いたことないな。異常として感知されない、っていうのも変だよね。

…ごみ箱とか、他のフォルダに行っていないかな？

ミクは、試しに調べてみた。

通常、消したデータは「ごみ箱」にいくはずである。

…本当は、音楽ファイルとして保存してないから、データとも呼べ

ないんだけどね…。

歌の元の音楽ファイルは消えていない。

「ごみ箱」にも、歌はおるかネギも無かった。

パソコン内の全てのプログラム、ファイルを調べても無かった。

…パソコンの中に保存されたり消去されたりされずに、どこかで自然に消えてる…？

ミクはもう一度、あの穴を見た。

…すると少しだけ、大きくなっていた。

「…！」

また、ミクは不安にかられることになった。

…どうしよう…。ケイに相談するべき？

…でも、もう昨日みたいな心配をかけたくないよ。

二律背反。

…私、今度こそ吸い込まれちゃうのかな…。

そしたら、どこに行っちゃうんだろう？

…考えたら、背中がゾクツとした。

ミクは自分の顔から、はつきりと血の気がひくのがわかった。

…怖い。

けど…。ここで負けたら昨日の二の舞だ。

…考えろ、私。

穴は相変わらず、部屋の端でゆらゆらと揺らめいている。

…考えても、ミクにできることは見つからなかった。

…私、ただ怖がることしかできないの？

恐怖と悔しさがミクを支配しそうになった。

…が、もう少しのところで踏みとどまった。

…ケイに、これ以上心配をかけるわけにはいかない。普通に接して、
気付かれないようにしよう。

悩んだ末、ミクは自分を犠牲にする選択をしたのだった。

第9話…強がりと心配のアレグレット

授業も部活も、とにかく全てが平和に終わった1日だった。

…けど、俺の頭の中から、今ミクの周りに起こっている異変のことが消えることはなかった。

…ミク。お前は、俺を守る。

でも…。対策は、全くといっていいほど見つからない。

…毎日、ケータイの充電がなくなるほど調べてるんだけど…。結果は…ゼロだ。

チツ…。どうしたらいい？

…考え事をしていたら、あっという間に家に着いた。

「ただいまあ〜。」

「お帰り。疲れてるわね？」

「…うん、まあね。」

…これも、いつものことだ。
部活に出て、疲れない方がおかしい。

「弁当と水筒くらいは片付けなさいよ。」

「はいよ。」

弁当と水筒を片付け、座り込みたい衝動を抑えながら洗濯物を持って風呂場へ急ぐ。

さつと体を洗い、湯船に入る。

…と、ここで湯船から強烈な誘惑が襲いかかってきた。

…気合いで振り払い、早めに風呂をあがる。

飯をささつとかきこみ、パソコンへとダッシュする。
すぐに留め具を外し、電源のボタンを押す。

アイコンが表示されると、すぐにVOCALOIDを開けた。

「よお、ミク。」

「あつ、お帰り、ケイ。」

「何か、変わったことはあったか？」

「ないよ。」

ミクはいつもの顔で言った。
でも、どうしてだろう。

そのミクのいつもの顔に、少しだけ、陰りがあるように見えた。

「ほんとに、ないか？」

「ないって言ってるでしょ！！」

…想像を絶する剣幕だった。

2人の間を、沈黙が流れていった。

「あつ…。じゅ、じゅめん…。」

「…いや、しつこく訊いて悪かった。ミクを信用してない訳じゃないんだ。」

「うん、大丈夫、わかってるよ。」

…それでも、若干の気まずさは残ってしまった。

「ミク。」

「え？な、何？」

「今日、歌う気はあるよな？」

「もちろんよ。」

そこは即答してくれた。…ちょっと、助かった。

「じゃあ、頼む。…もう一度、俺のVOCALOIDになってくれ。」

そこで、ようやくミクの顔から力が抜けた。

「ええ、喜んで。」

実際、日にち的に見れば多分1日空いたか空かないかくらいの間しか打ち込みを休んでいないんだろうが…、すごい久し振りに感じる。今日は、残っていたオチサビの調整。

「〜」

…この曲には、Cメロが無い。基本的に、AメロとBメロとサビを繰り返すだけだ。

たまに、サビが連続したりするけど。

…そのおかげで、打ち込みは他の曲に比べてかなり楽ができる。

不自然なところは、ちょっとだけ楽譜をいじって…と。

「よし、こんなもんだ。」

「これで、全部歌ったかな？」

「ああ、これで全部だ。」

「じゃあ、今度は通して歌うのね？」

「ああ、そうだ。でも、平日の時間だと無理だから、今度の土曜だな。」

…ミクの使用期限は、月曜日の夜10時まで。

日曜日は部活が午後なので、あまり時間が取れない。つまり、最後の大仕事ということになる。

どうやら、2人とも同じことを考えたようだ。

…最初から決まっていたこととはいえ、いざ目前にすると、やっぱり怖いな。

「…うん、わかった。」

「じゃあ、今日はここまでにしようか。」

「そうだね。…お休み。」

「ああ、お休み。」

電源が切れたことを確認し、パソコンを閉じた。そしたら、急に涙が出てきた。

幕間9…神様とドキドキのフェルマータ

…危なかった。

もう少しで、ケイに気付かれるところだった。

でも、心配してくれてありがとね、ケイ。

…私は、大丈夫だから。

ミクは仰向けに寝転がり、天井を見上げた。
ふう、と小さくため息をつく。

…私って、隠し事苦手なのかも。

ミクは今まで、こういう風に他人に気をつかったことがないのだ。
…ミクはソフトウェアであり、この家で初めて圧縮状態から解凍されたので当たり前だが。

…でも、本当に私のパートナーがケイでよかった。
もしあの場にいたのがケイじゃなかったら、きっと私はアンインストールされていただろう。

ミクはもはや、ケイのことを「マスター」とは思っていないかった。
ミクは、ケイを完全に恋人だと思っていた。

…でも、本当の意味で私の想いが叶うことは無いのかもしれない。
わがまま、だけどね。

叶ったのに叶わない。正反対の状態の同居。
特異な環境が、それを可能としていた。

…ありがたくないけどね。

そして、大きくなる穴と自分。

…私、ケイに心配かけるだけで終わっちゃうのかな。
嫌だ。私が消えたって、それだけは絶対に嫌だ。

かといって、ミクに何かいい考えがある訳ではなかった。

…私、どうしたらいいんだろう…。
ああ、わかんない！

ミクは右向きに体勢を変え、頭を抱えた。
…ツインテールを踏みつける羽目になったが、今はそれどころではなかった。

…なんか、いい考えないかな？

…私には、歌うことしかできない。

もちろん、ケイは私に歌を求めてこのパソコンにインストールした訳だけど…。

…そういえば、ケイも歌、歌うんだよね。

…それなら。

ミクは、あることを思い付いた。

…ケイに言えば、そういう曲はきっとすぐに用意してくれるだろう。

だが、ミクには1つの懸念があった。

…でも…。ケイは一回、歌に自信をなくしてるらしいんだよね。

この提案、1つ間違えたらおもいきりトラウマを刺激する可能性があるんだよね。

…けど、歌うのが好きな人なら、この提案をされて喜ばないはずがない。

ミクは、それを実行に移すことに決めた。

…ああ神様、私に、少しだけ勇気をください。

本来、ミクは科学技術の産物だ。

…それが神を信じる。とても不思議なことだ。

…これが、ちょっとしたでもケイのためになればいいな。

ちよつとだけドキドキしながら、ミクは眠りについた。

第9・5話…事故と意識のデクレシエンド

俺はいつも通りの朝の日常をこなしながら、とある悩みと戦っていた。

…どうしよう。

ミクにさせたいことが、昨日で一段落してしまった。…あと4日しかないのに。

チツ…。なんかないかな？

あんまり変なことをやって、ミクをがっかりさせたくない。

…仕方ない、思い付くまでトークかカバーで我慢してもらおう。

カバーだと…。

「ケイ、何やってるの？」

母がくすくすと笑いながら話しかけてきた。

…何のことだ？

俺は自分の手元を見た。すると、ご飯の茶碗だと思って持っていたのは飲み終わった味噌汁のお碗で、俺の箸はお碗の底で空を切っていた。

…また、やっちゃまった…。

俺はがつくりとうなだれ、小さくため息をついた。

「どうしたの？」

「いや…。ミクにやってもらいたいことが、昨日で大体尽きちゃったんだよ…。」

「…じゃあ、いいこと教えてあげよっか？」

…何だろう。

「何？それ。」

「ミクちゃんにとってね、ケイは…、そこにいるだけでいいの。楽しく、なんか話でもしてればいいのよ。」

…こいつは意外だ。

まさか、そこまではつきりとそんなこっぴどかしいことを言われるとは思わなかった。

…それは俺にとってのミクの位置でもあるんだけどね。

「…まあ、それは基本としてさ…。」

「考える時間は夜まであるんだから、ゆっくり考えればいいのよ。第1の目的をそれにして、ね。」

「そうだね…。」

と返し、気を取りなおして、あらためてご飯に手を伸ばす。

…時間は夜まである、か…。

最近ミクが消えちまうってことで頭がいっぱいで、そんな考え方を
する余裕なんてなかったな…。

そつ、全体的に見れば時間はないのだ。

だからこそ、こうやって焦ってる訳だけど。

朝飯を片付け、洗面所に行って歯を磨く。

…目のクマ、とれてねえな。

いつも通り弁当と水筒を鞆に突っ込み、自転車へと急ぐ。
今日は部活がオフだ。荷物が軽い。

いつも通り自転車にまたがり、いつも通りにこぎだす。

いくつかの角を曲がって、この辺りでは交通の要になっている道に出る。

ここまではいつも通りだった。

そう、ここまでは。

この道は、ほぼ直線だ。

だが、一ヶ所緩やかなS字があり、そこを抜けるとこれまた緩やかな右カーブが続く。

事は、その右カーブで起こった。

俺はいつも通り、車道の端っこを走っていた。

後ろから車が来た。振り向かなくても、耳がなれているとタイヤの接地音でわかる。

俺は当然、さらに端に寄った。

その時運悪く、ペダルが縁石に接触した。

俺はバランスを崩し、さらに自転車のスタンドが後続の車に接触した……んだと思う。

自転車はいきなり加速し、そのまま道路脇の植え込みに突っ込んだ。

「……いつ……てえ……！」

……これは……、まずいな。

俺はポケットからケータイを取り出し、母さんに電話をかけた。

「もしもし…。事故った。…バスの道の…植え…込み…。」

そこで、俺の意識は途絶えた。

その時だった。

部屋の中のモニターに、突然「24:00:00」と数字が表示され、カウントダウンを始めた。

「これは…!」

パソコンの電源が、家庭用電源から内蔵バッテリーに切り替わった合図だった。

「何で…?」

その時、どこからか声が聞こえた。

「…ちゃん!」

「…え?」

声はもやもやとした感じで聞こえてきて、あまりはつきりとは聞き取れなかった。…けど、次の声はしっかり聞き取れた。

「ミクちゃん!？」

…私をこんな風に呼ぶ人を、私は1人しか知らなかった。

「ケイの…お母さん？」

「そうよ。恭子と呼んで頂戴。」

「どうして…?どこから声を？」

「それは私が聞きたいくらいね。…残念だけど、今はそれどころじゃないの。」

…それって、結構大きい問題だと思うけど…。
それ以上の問題って一体…!？

「何か、あつたんですか？」

そして、何かブォーン、ボタンという音。

…何だろう、この言い様のない嫌な予感。

「いい？ミクちゃん。落ち着いて、よく聞いてね？」

「…はい。」

…背筋がぞわぞわするような嫌な予感が、どんどん押し寄せてくる。そして、一番聞きたくなかった言葉が、聞こえてきてしまった。

「ケイが…、事故したの。」

「…えっ…！？」

…目の前が真っ暗になるっていうのは、今みたいな状態のことを言うんだろ。…ショックで、立っていることもままならなかった。

「…私の…せいだっ…！私が…ケイに…無理させたからっ…！」

…涙が、止められなかった。

「ミクちゃん、自分を責めないで。きっと、誰も悪くないわ。不幸な事故だったのよ。」

「いいえっ！私がつ…、彼が疲れてるってわかってるのに引っぱりまわしたからっ…！ううっ…！」

「ミクちゃん、気持ちはよくわかるわ。だから…、落ち着いて。」

「…！ すみません…。」

…そうだ、心配なのは、辛いのは私だけじゃないんだ。

「いいのよ。ミクちゃんも心配だもんね。」

「はい…。」

…しばらく、嗚咽が止まらなかった。

…そして、ブォーンという音に変化があった。

ガタツ、ボタンという音、微かに聞こえてくる「大丈夫？」という声。

今度は違う方向から、ガコン、ガチャっという音。

「病院…電話…。」

と単語が断片的に聞こえてきた。

どれも、私の不安を煽るのには十分過ぎるものだった。

…やがて、またボタンという音がして、ブォーンという音がさっきと同じように聞こえてきた。

「な、何がどうなってるんですか？」

…自分で、声が震えるのが止められなかった。

「今、後ろにケイを乗つけたわ。救急車を呼ぶより早いからね。これから病院に行くの。」

「ケイが…、いるんですか!？」

「…ええ。」

…もう、藁にもすがる思いだった。

「ケイツ…、ケイツ！」

「…ちょっと、意識が朦朧としてるみたい。そっとしてあげて。」

「…！」

…ああ、私はなんて無力なんだろう。

「…ミク…？」

「ケイツ！？聞こえる？私よ、ミクよ！」

「…う、歌…を…。」

「…わかったわ。」

…そうだ、私には歌がある。

…あなたが求めるなら、私はいつでも、いつまでも歌いましょう。

「…」

… ちょっと、涙声になっちゃったかも。

「… ありがとう。」

「無理しないで。もう、喋らなくていいよ。」

… また、音が変わった。

ブォーンという音が、完全に止まった。

また、さっきと同じいくつかのボタン、ガコンという音、さっきと違うジャラジャラという音が断続的に聞こえてきた。

そして、風を切るような音。

… 外が見られないのが、とってももどかしい。

でも、怪我したケイを見たら、今度こそショックで倒れちゃうかも。

とにかく、3人は病院に着き、啓大は担架で運ばれた。

第10話…ピンタと笑い声のシンフォニー

…俺は、わりと長く眠っていたようだ。

…幸い、痛みの割には怪我はそんなにひどくなさそうだった。植え込みに突っ込んだのがよかつたらしい。

頭は打ったけど、こっちも大事には至らなかったらしい。

…あの植え込み、そんなに鋭い枝とかなさそうだからな。

それにしても、母さんの行動の早かったこと。本当にびっくりだ。

そして、こいつ。

「大丈夫？」

「ああ、もう大丈夫だ。心配かけて悪かった。」

…今、パソコンは起動され、俺の目の前に置かれている。

「恭子さんとは、もう話した？」

…「恭子さん」なんて、いつの間に母さんとミクはそんなに仲良くなっただろう。

俺は右を向き、ミクに左頬を見せた。

鏡を見てないからわかんないけど、きつとまだ残ってるはずだ。

…真っ赤な手形が。

「今までの人生で、さっきの事故の衝撃の次くらいに痛かったぜ？」

「あらあ…。」

「ミクも、こうしたいだろ？」

「…私は、左利きなんだ。」

「じゃあ、バランスいいな。」

2人して笑った。

今、病室には俺達しかいない。2人の笑い声が、病室の壁に少しだけ反響した。

「それにしても、想定外に時間ができちまったな。」

医者によれば、明後日には家に帰れるらしい。その間、検査やらなんやらの必要があつて、部活はおるか学校も行けないらしい。つまり、検査意外の時間は暇、という訳だ。ここは、パソコンを使うには意外に便利だ。

「恭子さんは、ケイが病院にいる間はこのパソコン、置いていってくれるって。」

「そつか。んじゃ、母さんがいない間は2人きりだな。」

「えっ…?」

…ミクはちよつと顔を赤くして、おろおろとしている。
別段珍しい状況でもないだろうに、言い方を変えるだけですぐこれだ。

…かわいい奴。

「へへっ。んじゃ、ちよつと歌ってもらおうかな。新しくカバー曲思いついたから。」

「もう、打ち込みしても平気なの?」

「なんてことねえよ。でも、母さんに見つかったら怒られるかもな。
…事故の後始末、お願いしちゃったし。」

「あつ…。」

「…けど、母さんはミクをここに置いていった。きっと俺達のために、空気を読んでくれたんだ。やつちゃダメな義理は無いと思うぜ？」

「…それもそうかもね。」

俺は、比較的ダメージの少なかった鞆の中からヘッドホンを取り出し、パソコンに接続して耳に取り付けた。

「これで大丈夫だ。…じゃあ、始めよう。」

いつも通りに音を打ち込み、長さ、高さ、アクセントの強さ、その他諸々を調整していく。

「
」

…俺の打ち込み次第で、ミクの仕事の出来が変わるのもいつものこと。

一部分打ち込んで、試しに歌ってもらった時の緊張感には、何とも言えないものがある。

…ほぼ満足のいく出来だ。

「よし、今日はここまで。きつと看護師さんが見回りに来るからな。」

「そうだね。…あつ、あのさ。」

「どうかした？」

「ケイがよくなったらさ、私、お願いがあるの。」

「何だ？」

ミクには心配かけちゃったしな、大体の約束なら聞いてやってもいいな。

「私ね、ケイと、…歌いたい。」

…意外だな。俺が歌うの好きだって話したっけ？

「…いいぜ。むしろ、願ったり叶ったりだ。」

「ホントに!？」

「いつもミクは俺のために歌ってくれてるからな。たまには俺がミクのために歌ってもいいだろ。」

「やった!」

「…でも、あんまり期待すんなよ?」

「じゃあ、ちょっとだけ期待しとく。」

…いつの間に屁理屈なんて使えるようになったんだ？

「実は、歌はもう用意してあるんだ。」

「えっ!」

…目玉が飛び出そうなくらい驚いていやがる。

「じゃあ明日、あの歌のフルをしっかり頑張ってからな。」

「はい！」

「じゃあ、おやすみ。」

「おやすみ。」

ミクは、変わらぬ笑顔で手を振っていた。

そう、誰も知らなかったのだ。

これからミクの身に何が起きるのか。きっと知っていたのは神様…、いや、神様ですら知らなかったかもしれない。

とにかく、こちらもここまではいつも通りだった。

...そう、いっしょだね...。

幕間10…贖罪と強風のプレスト

モニターから振り返ったミクは、とんでもない物を見る羽目になった。

「…！」

絶句した。

あの穴が、ものすごい大きさになっていたのだ。

…まずい、これは、やばい…。

ミクは、今すぐにでも逃げ出したかった。

…が、ミクの意味とは裏腹に腰は抜け、まともに声も出ない。

「あ…、ああ…。」

…頭の中が、真っ白になっていく。

…自分の体が震えているのに、ようやく気がついた。

…ああ…、私は、ここまでなのかな。
…嫌だ。

あと3日、あと3日なのに。

「ひっ…。うっ…。」

…ごめんね、ケイ。

ひよっとしたら、私、あの歌のフル、歌えないかも。ケイと一緒に、歌えないかも。

…悔しくて悔しくて、勝手に涙が出てきた。

そうしている間にも穴は拡がり続け、ついには周りのものまで吸い込もうとするようになった。

…それは、ミクも例外ではなかった。

…いつそ、吸い込まれるくらいなら。

ミクは、吸い込まれそうになっている段ボールからネギを一本引き抜き、…構えた。

次の瞬間、部屋にあったミク以外のものが、あらかた吸い込まれた。

強風を全身に浴びながら、ミクは、ふう、と1つ息をはいた。

…私の方から、突っ込んであげようじゃない。

ケイに報告せずに、ほったらかしてこうなったのは私の責任。なら、私が埋め合わせをすべき。

…ケイ、約束、守れなくてごめんね。

涙が流れるのは止められなかったが、ミクはキッと巨大にぽっかりと空いた穴を見据えた。

…キラリと、涙の雫が飛び散った。

「はああああああああああっ！！！！」

ミクは風に乗り、穴に向かってダッシュした。
無心でネギを振り抜いた。

…次の瞬間、ミクを襲ったのは。

ゴッソンという打撲のような衝撃と、

ビリッという電気ショックのような衝撃、

バチン！という何かが弾けとんだ音だった。

特に、2つの衝撃はミクの意識を吹っ飛ばすには十分すぎる強さだった。

…ああ…、ケイ…も…、こん…な…かん…じ…だっ…たの…か…な…？

ミクの思考は、すぐに停止した。

第10・5話…嵐といちご味のドルチェ

…悪くない目覚めだな。

ゆっくり寝ていてもいいのにはぼ定時に目覚めてしまうのは、高校生の悲しい性だな。

伸びをして、検査までまだ時間があることを確認して、ミクに挨拶しようとしてノートパソコンに手を伸ばそうとした…が。

ノートパソコンに、違和感があった。

同時に、すごい既視感に襲われた。

…何か、挟まってる。

…位置としては、俺のベッドは病室の一番北東の隅、入り口のすぐ横だ。ノートパソコンはその左側、椅子の上に置いておいた。

…2本の棒が挟まっている。

さらに身を乗り出して見てみると、…それは、人の足のようだった。

…目を擦ってみる。

…何も変わらない。

…あれか、テレビ番組とかでよく見る心霊体験してもんが、ついに俺の前にも現れたか。

病院って、そういうの多いらしいし…。

…よく見ると、周りにいろんな物が散らばっている。犬のぬいぐるみ、破れたポスター、段ボール、そして…、ネギ、ネギ、ネギ…。

「またネギかよ…。」

そして、人…多分…を見た。

まるでどこかのホラー映画のように、うつ伏せでパソコンから出てきたような形だ。手には…、こちらにも折れたネギがしっかりと握り締められていた。

見かけの特徴は、黒のオーバーニーソックス、黒に緑で縁取られた、かなり短い学生服のようなスカート。

…襟つきの黒いノースリーブに緑色のネクタイ、変なパネルのついた袖、腰下まである緑色のツインテール…？

「おいおい、こりゃあ…！」

生きてるのか？

一応、脈を試してみる。

…生きてる。確かに、脈はしっかりと動いている。

…動かして平気かな…？

一応俺は部活で緊急時の対応を習っているので、その通りにやって

みる。

…まずは、肩を叩いて意識を確かめる。

「もしもし、もしもし？」

…反応はない。

ひとまずパソコンから外し、仰向けにして、呼吸に確かめる。

…呼吸は、ちゃんとしてるな。

この場合はどうするんだっけ？

…確か、回復体位をとらせて…。

などと考えながら、脚と腕を折り曲げ、腰に手をまわそうとした
…その時。

…目が、薄く開いた。

「うわわっ！」

「ううん…。」

…これは、覚えのある展開だな。
そして、今回はさらにやばそうだ。

「…お前、ミクなのか？」

…こないだのように騒がれるとまずい。
まだ面会時間じゃないだろうし…。
まずは一番基本的な質問をぶつけてみる。

「あれ…、ケイ…？何でここにいるの…？」

…間違いない。本物だ。
とりあえず、騒がれなくてよかった。

「それは俺の質問だな。ミク、どうしてお前がここに？」

「…うう、どじ…？」

ミクは起きあがろうとして、つつ、と頭を押さえた。

「大丈夫か？」

「うん、大丈夫。」

俺は、ミクが押さえた部分をのぞき込んだ。

「ちょっと腫れてるな。氷でももらってこようか。ここは病院だ、それくらいはどうってことない。」

「あつ、ありがとう。」

俺はその辺にいた看護師さんを適当に言いくるめ、氷のうをもらってきた。

ミクは、ちょっと痛そうに氷のうを頭にのせた。

「じゃあ、話してくれ。ミク、どうやって出てきた？」

「じ、実は…。あの穴に吸い込まれて…。」

「何だつて!？」

「昨日ね、あの後、見たら穴がすごい大きくなって、私の部屋の中の物をみんな吸い込んだじゃったの。」

「じゃあ、あれも部屋にあった物なのか？」

俺は、散乱したネギをはじめとする物を指差した。

「ええ、そうよ。」

…話を聞いても全く現実味がなかったが、信じる他なかった。だって、現にミクがここにいる。それが何よりの証拠だ。

「そうか…。とにかく、看護師さんには見つからないようにすること。きつと、追い出されるからな。あと、本名は明かさないこと。」

「どうして？」

「だってな、本物の『初音ミク』がいると知れてみる。絶対に大騒ぎになる。だから、コスプレってことにしておくんだ。」

「そうね、わかったわ。」

…理解が早くて何よりだ。はっ、そういえば。

「そついえば、今の状態で『VOCALOID』はできるのか？」

「…わかんない。」

「なら、試してみるか。」

俺はパソコンを起動し、VOCALOIDを開けた。

いつも通り起動したが、楽譜画面は出るもののミクの部屋は真っ暗に映った。

そこで、VOCALOIDの楽譜の横についている鍵盤をクリックしてみる。

いつもはここをクリックすると、ミクが「あゝ」と歌う。

「あゝ」

ミクは、歌った。何の違和感もなく。

「打ち込みは、できるみたいだな。」

「そうだね。」

俺はパソコンを閉じた。すると、ミクが自分用に新しい椅子を持ってきて座っていた。

パソコンを椅子に置き、俺はまたベッドに入り、起き上がった体勢

になった。

「ケイは、もう平気なの？」

「大丈夫だ。今日検査して、よっぽどの問題がない限り明日には帰れる。」

「そう…。」

「心配かけて、悪かったな。」

「ううん、いいの。…あのさ、ケイ。」

「どうした？」

「昨日、一緒に歌ってっってお願ひしたでしょ？」

「ああ。」

「お願い…。もう1つ、してもいい？」

「ああ、いいけど、な…！」

に、は発音できなかった。…ミクに、口を塞がれちゃったからな。

最初はびっくりしたけど、事情を飲み込んだら、あとはミクと成り行きに身を任せた。

通りがかった看護師さんがこっちを見ていたけど、気にせずにいたら「きゃっ！」と言ってどこかに行ってしまった。

…どれくらいそうしていただろう。

ミクは、顔を離した。

「…ありがとね。」

「…俺の、ファーストキスだからな。」

「ほんとに!？」

俺は頷いた。…自然と、笑みがこぼれた。

「…お願い、もう一度…。」

…俺達はもう一度、何も言わずに唇を重ねた。
何回か繰り返しているうちに検査の時間になり、俺は医者のもとへ
向かったが、その前にも後にも、ミクを追い出すような野暮な看護
師はいなかった。

幕間10・5…寸隙と寸劇のアパッショナート

1人残されたミクは。

「…。」

余韻に浸っていた。

指で、唇をなぞってみる。

…頭から離れない、あの感触。

思い出すだけで気恥ずかしくなって、ミクは少し俯いた。

…帰ってきたら、もう一回してもらおうかな。

そんなことを考えていると、

「おい、初音ミクがいるぞ！」

という声がした。

…あ、まずいかも。

逃げる間もなく、数人の男女がやってきた。

「うわゝ、超似てる！」

「すげ〜！」

などと口々に言った。

…どうしよう。

と困っていると、

「それ、触ってもいいですか？」

1人の女性が、ツインテールの片方を指差しながら言った。

「や、やめてください！」

数人が、「うわ、声まで似てるよ！」とざわついた。

「えゝ、どうしてですか？」

と、ちょっと残念そうに先程の女性。

「じ、地毛ですから…。」

すると今度は全員が「おおゝ！」と驚きの声を上げた。

「まさか、そこまでの人がこんな田舎にいるなんてね…。すつこいムラなく染まってるし…。」

「いや、田舎だからこそできるんじゃない？」

「あゝ、それあるかも。」

…すごい盛り上がり方だ。改めて、『初音ミク』の人気の高さを思い知らされた。

気付けば、周りにはいつしか人だかりが出来ていた。

「…あのゝ、あんまり集まっちゃうとお医者さんや看護師さん達の邪魔になっちゃいますので、今日はこの辺にしていただけませんか？」

とミクが提案すると、

「それもそうだね。」

と大半が去っていった。

ミクがふう、と一息つくど、

「あの、写真撮らせてもらえませんか？」

…まだ残党がいた。

…どっ、どうしよう。

と考えていると、

「はい。ちょっと退いて下さい。」

…聞き慣れた声が帰ってきた。
やがて、ケイが人々を割って出てきた。

「だっ、誰ですかあなた。」

とカメラを持った男性。

「…愚問ですね、ベッドの主に対して。」

「あっ…。」

「困ってるじゃないですか。彼女はわざわざ俺の見舞いに来てくれたんです。見た目は確かに目立ちますが、どうでしょう、ここはひとつ見逃しちゃ頂けませんかね？」

「そこをなんとか…。」

「嫌です。」

ミクはきっぱりと言い放った。

「被写体に断られちゃ、何も出来ないな。すみませんね、お邪魔しました。」

ようやく最後の一人が帰っていった。

「ありがとう、ケイ。」

「ミクの格好は嫌でも目立つからな、対応を考えておいたんだ。…それにしても、よくもまあそこまでずばつと断れたよな。あれがなかったら、あの人まだここにいたぜ?」

「…ケイがいたからだよ。」

ミクはケイを見つめ、しばらくそうした後、…口づけを交わした。それを、遠くから見守る影。

「一枚くらい…。」

「あら、隠し撮りとは頂けませんね。」

男性がぎよつとして後ろを振り返ると、一人の女性が立っていた。

「うちの息子の彼女ですよ？私の娘も同然です。変なことをすれば警察沙汰は免れませんか？」

男性は今度こそそそくさと去っていった。

「それにしても…。どうしてミクちゃんがあそこにいるのかしら？」

小松恭子は不思議がりながらも、

「あの子達、やるわね。」

と密かに自分の息子達を褒めた。

第11話…空腹と重労働のコン・プリオ

ミク好きの皆さんにお帰りになってもらった直後、母さんがやってきた。

「調子はどう？」

「今のところ問題無いよ。」

「そう。…ところで…」

母さんはミクの方を見た。まあ、想定の範囲内のリアクションだな。ミクはぺこりと母さんに挨拶した。

「ミク、顔見知りなんだよな？」

ミクはこくりと頷いた。

「昨日までのパソコンの中にいた、ミクだ。」

「どつやって出てきたの？」

俺は母さんに事情を話した。

「信じられないかもしれないけど、現にミクはここにいる。それが何よりの証拠だよ。」

「そうね、疑う余地も無いわ。」

「って訳で、ミクを家に連れていきたいんだけど…。」

母さんは少し考え込んでから、口を開いた。

「…そうね、部屋は空いてるし、他に行く場所も無いでしょうしね。…いいわ、ミクちゃん。家においで。父さんには私から話しておくわ。」

「やったな、ミク。」

「ありがとうございます！」

ミクは深々と頭を下げた。…氷のうが床に落ち、慌てるミクを見て、

俺と母さんは笑った。

「頭は、もう平気か？」

「うん。」

「じゃあ、それ返してくるか。」

病室を出ると、たまたまさっきの看護師さんがいた。俺は看護師さんに氷のうを返し、お礼を言ってベッドに戻った。

「そうだ母さん、これ。」

と言って俺はベッドの脇に片付けたネギを指差した。

「わあ！どうしたのそんなにいっぱい！」

「ミクからのプレゼントだ。」

…ミクとしてはこの振りは想定外だったようで、ちょっと困った様子で頷いた。

「そう、ありがとね。」

「いえいえ。」

空気がいい感じで和んできたところで、日が暮れてきた。

「それじゃ、私は帰るけど、ミクちゃんはどうする？」

「私は、ここに残ります。やらないとダメなことがありますから。」

「そう、頑張つてね。」

「そうだミク、お前腹減らねえか？」

「ミクは出てきてから、手に持っていたネギしか食べていない。それを、ふと思い出したのだ。」

「嫌ね、ケイったら。私がお腹なんて空くわけ……。」

ぐぐぐ。

「あっ…。」

…ミクの顔が、みるみるうちに真っ赤になっていった。

「あらあら。…ついておいで。下の売店で何か買ってあげるわ。」

「…すみません…。」

「いいのよ。じゃあね、私はそのまま帰るから。」

「んじゃ。」

と返すと、2人は売店に向かった。

「大丈夫かな…。」

またさっきのように囲まれたりしないか、ちょっと不安だ。

「じゃあ、今のうちに俺は楽譜を作っておくかな。」

パソコンを起動し、音を書いたり伸ばしたり表情をつけたりしていく。

ずっとほとんど同じフレーズを打ち込んでいたから音は大体覚えてるんだけど…、あれ？ここってどんな音だっけ？

俺はいつもの癖で、楽譜の左側についている鍵盤をクリックした。
…してしまった。

「あつ、やべえ…。」

気づいた時には後の祭りだった。

今頃、ミクは売店で「シ」あたりの音を出しているに違いない。

…仕方がない、後でちゃんと謝ろう。

気を取り直して、打ち込みを再開する。

音符のコピーとペーストでサビの打ち込みを省略し、ブレス（息継ぎ）用トラックを作ってブレスの音符を入れる。

VOCALOIDの場合、ブレスは音符で入れる必要があるのだ。

「よしっ…と。」

ここから先はコピー、ペースト、微調整、歌詞の書き換え、パラメータ調整を繰り返していく。

コピーする時、パラメータまでうつしとる方法もあるらしいけど、ちよつとよくわかんないから俺はこのやり方だ。

これでも、かなり進歩した方だ。最初なんて、コピーとペーストの仕方さえわかんなかったんだからな。

それにしても……。音が確認できないのは凄まじく不便だ。後でいっぺんにやろう。

「もう、ケイ！」

ミクが息を切らしながら帰ってきた。

「ああ、さっきのは悪かった。」

「気を付けてよね。また追いかけられる羽目になったんだから。巻くの大変だったのよ?」

「いめんいめん。気を付けるよ。」

…この街のVOCALOIDが好きな人は、俺が考えているより多いらしい。

「今ある程度打ち込んだんだけど、この部分まで歌ってくんないかな。」

ミクはいつもの顔に戻り、

「わかった。」

と返事をした。

歌ってもらいたい部分にマーカーを入れる。

「じゃあ、頼む。」

再生をクリックした。

「ふふ」

いつも通り、ミクは歌い出した。
病院だから、ちゃんと声量は俺の所だけに聞こえるように調節して歌ってくれている。俺は歌声に集中して、おかしいと思った所を覚

えておく。

歌い終わったら、修正してもう一回。修正箇所がなくなったら次の部分、を繰り返し、すべて終わるときには打ち込み始めてから5時間が経過していた。

「ふう…、お疲れ様、ミク。」

「ケイもお疲れ様。」

「目が痛え…。」

「大丈夫!？」

「…大丈夫、そんなに大袈裟に騒ぎ立てる様なもんじゃない。…5時間もパソコンとにらめっこしたのなんて初めてだからな。」

「そっか、よかったあ。」

「なあミク、これからどうする?」

「どうするって言われても…。帰らなきゃダメなの?」

「いや、わかんねえけど、なんかいつかは追い出されそうな気がしねえか？」

面会の人達は、もうほとんどいなかった。

「うーん、そうかも。でも、家までの道わかんないし…。」

2人で考え込んでしまった。
しばらくしてミクが、

「そうだ！」

と言って立ち上がった。

「どうした？」

「えへへ、いいこと思いついちゃった。」

と言って、ベッドの周りのカーテンを閉め始めた。

「おい、何する気だ？」

ミクはカーテンを閉め切り、…こともあろうくに右側からベッドに潜り込んできた。

「…ふふ、これならばれないでしょ？」

「あ、あのなあ…。」

…これは、ばれるばれない以前の問題じゃないのか？

「ねえ…。」

ミクはこっちを向いて近づいてきた。

「なっ、なんだよ。」

…自分の心臓の音が聞こえてきた。

「ふふふ、ケイったら、すごいドキドキしてる。」

…しない方がおかしいだろ？

「…ミクだつてしてるだろ。」

「あ、ばれた？」

「こいつめ。」

俺は両手の人差し指でミクの両頬を軽くぐりぐりした。
…柔らかないな。

「ひゃ、ひゃめてよお。」

…ある程度の所でやめておいた。

「もお、ケイったら。」

「じゃあ疲れたし、そろそろ寝るか。」

「そうね、おやすみなさい。」

…とは言ったものの、俺にはぐっすり眠れる自信は全くなかった。
それでも、頑張って目を閉じていることにした。

幕間 11 … 鼓動と温もりのリタルダンド

… やはりというか、ミクは全然寝付けなかった。

目を閉じて、寝ようと努力はするものの、心臓がそれを許さない。

… どうしよう…。

目の前のケイは、目を閉じて、徐々に呼吸が整ってきている。

… 邪魔しちゃ悪いかな…。

ミクも、もう一度ケイにならって目を閉じてみる。

… ケイ、よく寝られるよね。

ミクはやはり寝付けず、くると反対側を向いてみる。

… 平常心、平常心…。

考えながら、深めの呼吸を繰り返す。

…駄目、心臓が口から出てきそうだよ…！

「…寝られないのか？」

と背後から声。

「ケイ、起きてたの？」

と返して振り向く。

…目があった。

「俺もこんなの初めてだしな。そりゃ、緊張くらいするよ。」

「まあ、そうよね。」

「…何か、寝付けるといい方法ないかな？」

「うーん…。」

「よし、んじゃ、試しに手出して。」

「はい…。」

…何をする気だろうか？

ミクは利き手の左手を出した。
ケイは右手を出して繋いだ。

「これでどうだ？」

2人とも、天井を仰ぐ形になった。

「ケイ、暖かいね。」

「…よく言われる。家の人達、父さんと俺以外冷え性だから余計な。」

「そうなんだ。…でも、どうして手を握ったら寝付けると思ったの？」

「人って生き物はな、何か物をギュッと握ると安心するんだ。…し

ないか？」

「ちよつとしてきたかも。」

「じゃあ、これでちよつと目を閉じてみよう。」

ミクも、また目を閉じてみる。…さっきより、いくらか落ち着いている。

…ああ、鼓動つて、こんなに温かいものなんだ…。
これなら、寝られるかも。

…横から、スースーと寝息が聞こえてきた。

…ケイ、寝ちゃったな。
じゃあ、今のうちに。

ミクは目を開け、ケイが寝ていることを確認した。

…ちよつと失礼して…。

ミクは、ケイの右側の頬にキスをして、寝顔に微笑みかけ、

「おやすみ。」

と言って、手をちょっと強く握って眠りについた。

第11・5話…寝相とおとぎ話のコン・モート

ひとまず、俺は目が覚めた。

手は、もう握られていない。…だが。

「んう…。」

…何か、布団とは違う重みが俺の右腕と右半身にかかっている。
見ると、ミクが俺の腕を枕にしながら、半分乗っかって抱きつくような形になっていた。

「っ…!!??」

大声を上げそうになったが、ここが病院だということ、そして見られると色々とまずい状況であるということ进行を思いだし、あわてて空いていた左手で自分の口をふさいだ。

…危なかった。

…さて、どうしよう。

ミクが動いてくれないと、俺は動けない。

そんなことを考えている間にも、ミクはこちら側に体重をどんどんかけてくる。

…あのぉ…、いろんな所があたってるんですが…。
…重さとしては大したことないけど、まずいよな、この状況。
…ミク、絶対起きたら叫ぶな。

…かといって、何かできることがあるわけでもなく、時間ばかりが過ぎていく。

「ううん…。」

そんな至近距離で理性を揺るがす寝言を出さないでくれ、頼むから。
…ああ、また自分の心臓の音が聞こえてきた。

それにしても、…ベタな表現だが、天使のような寝顔だ。
できることなら、ずっとこの寝顔を見ていたい。
けど、そういう訳にもいかない。

「…ん…。」

ミクが、薄く目を開いた。次の瞬間、ミクの目と口がくわつとばかりに開いた。
…まずい。

俺は急いで体を翻し、ミクの口を左手で塞いで、ミクの上に覆い被さった。

「むうゝ！んぐう…！」

ミクは大声を出したが、左手で塞いだおかげできつとまわりには聞こえなかっただろう。

ミクは手足をばたつかせて抵抗してきた。

俺はミクの顔のすぐ近くに顔を寄せ、至近距離で向き合って、人差し指を唇に当てて、

「しゝ。」

と言った。

…ミクは抵抗を止め、声も上げなくなり、全身から力が抜けた。

ミクは無言でこくこくと頷き、状況を理解したことを示しながら口を押さえている方の腕をたたく。

どうやら苦しいらしい。

押さえていた手を放してやると、軽く咳き込みながらミクが口を開く。

「もう、びっくりしたじゃない。」

「そりゃ、ミクがあんな顔したら次の瞬間には叫ぶって思うだろ？」

「うつ…。」

「…ここは病院だ。朝っぱらから叫び声が聞こえたら不吉だろ。」

…本当は不吉どころじゃすまないんだけどね…。

「そうね、ごめんなさい…。」

「いってことよ。それより。」

俺は伝えるべき事を思い出した。

「ミク、今何時だかわかるか？」

ミクは袖のパネルを操作し出した。

「ええっとね、7時半。」

「そつか。8時に、朝飯と医者が来ることになってるんだ。そこで、診察結果が伝えられる。」

「うん。」

「どうせ異常ないだろうし、ミクの朝飯は家で食つとして、医者が来てる間はトイレかどこが見つからない所に隠れててくれ。」

「うん、わかった。」

「…ちょっと気になったんだけど、そのパネル、時計以外にどんな機能ついてる？」

「大体、ケータイみたいな物かな。」

「どうすればそこに連絡出来る？」

「じゃあ、VOCALOIDの歌詞に用件を打ち込んで。ここに出るように設定しておくわ。あのパソコンとこのパネル、ヘッドセットは互換してるから。」

「OK、わかった。」

「じゃあ、そろそろ行った方がいいかな？」

「…そうだな。」

「じゃあ、行ってくるね。連絡、忘れないでね。」

「ああ、わかってる。…あ、そうだ。そのままじゃ目立つだろう、これ着ていけよ。」

俺は愛用の灰色のパーカーをミクに渡した。

「…ありがとう。」

ミクは、とても嬉しそうに受け取って、パーカーを羽織って歩いて行った。

幕間 11・5…下界と冒険のアド・リビトゥム

…えっと、どうしようかな…。

ミクは、どこに隠れようか考えていた。

…トイレか…。他にないかな？

今、ミクはパーカーのフードを目深にかぶり、病院の廊下を歩いていた。

…一歩間違えば不審者である。

…あんまり、目立たないようにしなきゃ…。

歩き続けるうちに、エレベーターを見つけた。

…これで上に行ってみようか。

ボタンを押して、上がって来るのを待つ。
すると、後ろから声。

「何をしてるんですか？」

「えっ？」

振り向くと、白衣を着た30代半ばくらいの男性が立っていた。

「これは職員用エレベーターですよ？」

「えっ！？あ、す、すみません！」

…ああ、やつちゃった…。

「あの…、一般のエレベーターは…。」

「その突き当たりを右に行つてすぐ右にあります。」

「あつ、ありがとうございましたあ。」

ミクは、言われた方向へそそくさと歩いて行つた。

ミクはエレベーターに乗り込むと、とりあえず一番上の階を押した。

…要は、この後不審に思われなきゃいいんだよね。

ドアが開き、出てすぐ右側にあった休憩スペースのような場所で時間を潰すことにした。

本棚があり、そこから漫画を二冊持って椅子に座った。

テーブルに全体重をあずけ、あごをテーブルにつけて漫画をなんとなく読み始めた。

『初音ミク』はバーチャルといえどもアイドルである。

アイドルがこんなところでこんな悪い姿勢でだらけながら漫画を読んでいるなんて誰も思わないだろう、という発想からの行動だった。

「ふああ…。」

…ただ眠かったから、っていう理由もあるけどね…。

一番目立つミクのトレードマークであるツインテールも、今はパーカーで隠している。

パーカーは長袖で、元はケイの物であるためサイズも大きく、ちょっと頑張ればミクの特徴となりうる物は全て隠してくれた。

…これはばれないでしょ。ありがと、ケイ。

ミクの期待通り、この休憩スペースを使う人はミクに全くと言っていいほど注意を払わなかった。

たまに、チラツと呆れるような眼差しを浴びせるだけだった。

見事にミクの狙い通りだった。

そのうち、左側の袖が光だしたので急いで隠し、連絡内容を確認した。

「かえるからびょうしつにもどってこい。」

全てひらがなの文面を小声で読み上げ、ミクは立ち上がり、漫画を本棚に返してエレベーターに乗り込んだ。

第12話…ピンチと微熱のコーダ

…医者によると、すぐに部活への復帰は無理だが、もう帰って平気だそうだ。

事故当時の状況からは考えられない程の回復速度らしい。

「若いつていいねえ。」

つて言われた。

いやいや、若いつてもなかなか行動が制限されてて不便ですよ。

荷物をまとめ終わると、ミクが帰ってきた。

俺達は病室を出た。

「よかったね。」

「そうだな、帰れなかったらミクの朝飯が無くなるところだったしな。」

「ええっ！」

「冗談だよ。その時はその時で、俺が何かおごってやるよ。」

等と話ながら受け付けを済ませ、外に出て母さんに連絡する。

「もしもし。もう帰って平気だそうだ。」

『そう、よかったわね。』

「んで、帰りなんだけど…。」

『自転車には乗れそう？一応自転車はかごは潰れたけど動くみたいだし、病院に停めてあるよ。痛かったりしたら迎えに行くけど。』

「その辺は心配なくていいよ。母さんはミクの朝飯を用意してあげて。」

「そつえば、昨日ミクちゃんはどつしたの？」

…やば、予想してた質問だけど、答え用意してなかった。

「ああ、特別に毛布を用意してもらった。」

…うわ、苦しい言い訳。

『そう。』

…ふう、よかった。

「ミクとはゆっくりデートしながら帰るよ。」

『…今度は気をつけてよ。鍵は鞆の横のファスナーの所に入ってるから。』

…流石、空気の読める母さんだ。

「わかった。んじゃ。」

と俺は電話を切り、ミクを振り向いた。

「なあミク、俺の自転車の後ろ、乗るのに抵抗あるか？」

俺は事故を起こしている。もしミクに抵抗があるなら、無理に乘せ

るつもりはない。

「…ケイは平気なの？」

「…また、こいつは俺の心配ばかりする。
たまには自分の心配しろよ。」

「俺は平気だよ。けど、俺は事故してるからな。それに、ぶっちゃけ二人乗りで乗せるのは得意じゃない。…どうする？ 後ろに乗るか、歩いて帰るか。2つに1つだ。歩いて帰る場合でも、ミクを置いていたりしないから安心しろよ。」

「…後ろに乗る。」

「…おお。」

「…いいのか？」

ミクはこくりと頷いた。

「恋人を信じられなくて、何が彼女ですか。」

…自然に、笑みがこぼれた。

「んじゃ、行くぞ。」

かごが無くて見つけるのに苦労したが、俺達はやっと自転車を見つけ、自転車に乗ろうとした…時、ミクが何かを差し出した。

「これ、…ありがとね。」

…パーカーだった。

「ミク、寒くないのか？その格好で。」

思いつきり肩が出てるからな。

「大丈夫。」

というミクは、少し声が震えていた。

「…無理しなくていいんだぜ？」

「…じゃあ、もうちょっと貸して。」

俺はパーカーをミクに手渡し、自転車に鍵を差し込んで、サドルにまたがった。

ミクが乗ったのを確認し、ペダルに足をかける。

「髪、巻き込まれないように注意しろよ。」

「うん。」

ミクの腕が、俺の腹に回された。

ミクが体を密着させる。

…2人は、同じリズムを刻んでいた。

鞆をハンドルに引っかけ、ブレーキを確認。…異常なし。

「よし、行こう。」

「うん。」

俺はペダルをぐっとこぎだした。
ぐいっと前に進む。

…ミク、軽いな。

俺は普段、鞆を載せたり載せなかったりするので、車重の感覚には敏感になっている。

ミクは思ったより軽く、それでいてとても重いもののように思えた。そしてそれは、ちょっと儚げな重みだった。

「髪が巻き込まれたとか、何か落としたとか、何かあったらすぐに言えよ。」

俺は走りながら、後ろのミクに呼びかけた。

「うん、わかった。」

俺は極力、平坦で交通量が少なく、歩道の広い道を選んで走った。
…登り坂は、ちょっときつかった。

「家までは、スムーズに行けば10分かからずにつくよ。」

「そう…。」

ミクは、ちょっと名残惜しそうに応えた。

「…昼飯食ったら、デートするか。」

「本当に!？」

「部活も出られないしな。…取って置き場所がある。そこで、約束通り一緒に歌おう。」

「…そこまで、また2人乗りしてくれる?」

「もちろん。」

…ミクは何も言わずに、腕にぎゅっと力を込めてきた。
心地良い圧力だった。

そうしてる間に、俺達は家についた。

そして、家に帰ってきた俺に、まず試練。

それがあることをわかっていたから、俺はミクを外の縁台で待たせた。

「ただいま…。」

「おかえり。」

…父さんに、まず謝んなくちゃいけない。

「…心配かけて、すみませんでした。」

「今回のことが、どれだけの人に心配と迷惑をかけたか、わかっているか？」

「…はい。」

「…なら、もういい。それより、ケイ。」

父さんは、神妙だった顔つきをいきなり崩した。

「…彼女が出来たんだろ？」

俺はこくりと頷いた。

「早く通してあげて、朝御飯を食べさせてあげなさい。その後、父さんの所へ連れてくることだ。」

「…わかった。」

俺はミクを呼び、居間に案内した。

ミクはすぐに母さんの用意してくれた朝飯を平らげた。

「ごめんな、そんなに腹が減ってたとは…。途中で何か買えばよかったな。」

「ううん、いいの。あ、恭子さん、おかわり下さい。」

それにしてもこいつ、食欲旺盛である。

ミクの食欲が落ち着いたところで、ミクを父さんに紹介しに行く。

「父さん、俺の彼女だ。」

「初音ミクです。」

ミクはぺこりとお辞儀した。

「初音ミク!？」

…そうだった。父さんは、ネット通販のサイトから注文をつけて、直接商品を取り扱う会社に勤めてるんだった。

当然、扱う商品の中に『初音ミク』があっても不思議じゃない。

「そう、あの『初音ミク』だよ。」

「ケイ、コスプレってことにするんじゃないの？」

「これから1つ屋根の下で生活するんだ、本名を隠してもしようがないだろ？」

「あつ、そうね。」

「本物…なのか？」

「なら、これを聴いてみてよ。」

俺は鞆からパソコンをとりだし、書き出したカバー曲の音楽ファイ

ルを呼び出してミクに歌ってもらった。

「
」

… たったの1コーラスだったが、インパクトをあたえるには十分過ぎた。

「本物… としか言い様がないな。でも、どうして現実にいるんだ？」

「何か、プログラムの綻びみたいなのが出て、そこから出てきちゃったらしい。… 俺にも、詳しいことはわかんないんだけど… ミクは現にここにいる。それは事実だよ。」

「わかった。これからよろしく、ミクちゃん。今日から君は俺の娘だ。」

ミクの顔が、ぱあっと輝いた。

「ありがとうございます！」

そこへ母さんがやって来て、

「ふふふ。じゃあ、あなたの部屋に案内するわ。」

と言ってミクを2階に連れていった。

俺はその間、シャワーを浴びて着替えることにした。…何となく、そんな気分になった。

俺の部屋も2階にある。俺も2階に上がって、着替えを取りに行く。

…ミクの部屋、大体あの部屋だろうな。

ミクの部屋は、今使われていない北西側の部屋になるはずだ。

俺の部屋は、ミクの部屋になるであろう部屋とは反対の位置にある。

階段を上がって、右に行くとミクの部屋、左に行くと俺の部屋と姉さんの部屋がある。

…大丈夫かな…。あの部屋、日当たりも風通しも悪いぜ？

少し心配だ。

「ありがとっございますっ！」

…いや、心配ご無用だな。

俺は着替えを取り、風呂場に向かった。

…午前中にシャワーを浴びるなんて何年ぶりだろう。

…ちょうど一年半ぶりだな。

あのときは、学校の行事で夜中に山を登って、朝降りてきたんだよな。

…懐かしいな。

シャワーを浴びて、着替えて風呂場を出ると、ミクがいた。…まだ、あのパーカーを着ている。

「そのパーカー、少ししか着てないにしても、一昨日昨日と洗濯してないからさ、寒いなら他の物着なよ。」

「うっん、いいの。…私は、これがいいの。」

と言って、ミクは俺に笑いかけてきた。

「…そうか…。」

そんなことをしてるうちに、昼飯の時間になった。

「ミク、そろそろ昼飯だ。…どうする？お前朝飯遅かったし、腹減らなかつたら無理に食わなくてもいいぜ？」

「ううん、いただくわ。」

…よく食うな、こいつ。

俺がこれくらい食っても別に不思議じゃないだろうけど、こんなやせっぱちの運動もしてない女性がこんなに食べたら、普通はびっくりする。

…結局、ミクは昼飯もなかなかの量を平らげた。

その後、俺は母さんを説得し、部活の部長に当分出られない旨を伝え、十分な金とケータイを用意した。

俺は普段、プライベートで出かける時は財布とケータイしか持たない。

他のものを持ってても、荷物にしかない。

俺は自転車を用意し、巡るコースを考えた。

「ミク、準備出来たか？」

呼びかけると、今まさにミクが鼻歌を歌いながら玄関を出るところ

だった。

「それじゃ、行こうか。」

「ふふふ、楽しみ。」

俺は最初の目的地に向かって、自転車をこぎだした。

幕間12…夕日と無情のカンタービレ

…この間の夢、正夢になったね。

ミクは嬉しさを噛みしめながら、思う。

…ほんとに、デートできることになっちゃった。

ミクは顔が緩むのを止められなかった。

目的地には、すぐに着いた。

そこは川のほとり、綺麗に整備された場所だった。

「……は……？」

「ここな、周りに民家が少ないんだよ。道路に面してるけど、川を向いて普通の声で歌う分には全く問題ない。」

「へえ。」

…注意していないと素通りしてしまいそんな場所だけど、確かに芝

生もあるし気持ちよさそう。

「じゃあ、パネルを貸してくれ。」

そう、パネルはVOCALOIDと互換している。

パネルから打ち込むこともできる、とミクがケイに教えたのだ。

…打ち込みは、すぐに終わった。

「…歌おうか。」

「うん。」

「せーの。」

…ずれてしまった。

「あちゃー、どうしたかねえ。」

「…多分、あれよ。VOCALOIDの打ち込みの時、私は一小節開けてから歌い出すでしょ？そのタイムラグよ。」

「あつ、そつか。じゃあ、もう一回パネル貸して。」

ケイは、楽譜にマーカーを入れた。

「よし、これで大丈夫なはずだ。気を取りなおして歌おう。」

「うん。」

「せーの。」

…今度は、ぴつたりと噛み合った。

ケイは、片方がずっと同じパートを歌うのではなく、お互いにはもりあつような楽譜にしたようだ。

2人の声は、冬を迎えようとする秋の空に、響きあい、溶け合つて、やがて吸い込まれるように消えていった。

…これも、歌の楽しさだよな。

同時に歌い終わり、ミクがケイの方を向くと、目があった。

「うふふ。」

「へへへ。」

「…楽しいね。」

「そうだな。」

ミクの願い事が、1日で2つもかなった。

…けど、ミクにはわかりたくないこともわかってしまった。

…このこと、後でケイに言わなきゃ。

でもこれ聞いたら、ケイ、またあの顔するかもな。

「じゃあ、次の所行こうか。」

そう笑顔で言うケイ。

…やっぱり、ケイには笑っていて欲しい。

「うん、そうだね。」

2人は立ち上がり、自転車に乗った。

「次はどこ行くの？」

「そうだな…、じゃあ、今の桜を見てもらおうかな。」

「桜、か…。」

「…正直、今の桜は花も葉っぱも落ちちゃってるからあんまり綺麗な物じゃねえけどな。」

「そうなんだ…。」

…残念と言えば残念だけど、実物が見れる。

程無くして、2人は枯れ木の並木の入り口に差し掛かった。
ケイはそこで自転車を停めた。

「これが、今の桜。」

そこは、木の枝が歩道の上までのびていた。
…まるでトンネルのようだ。

「へえ…。」

「…今見ても、あんまり面白くねえけどな。」

「そんなことないよ。」

ミクは一本の桜に歩み寄り、幹に手を触れてみた。

…外から見たら、枯れているようにしか見えない桜の樹。でも、幹はしっかりと生きていた。

「確かに、桜の花のトンネルを見られなかったのはちょっと残念だけど、こうやって桜に手を触れていること。それが、私にとっては奇跡的な事だと思うの。…ありがとね、ケイ。」

ケイは、少し顔を緩めた。

「どついたしまして。」

ミクは桜の樹の幹に手を触れながら、春に満開になったこの場所の、

桜のトンネルに想いを馳せた。

「そろそろ次の所、行くか？」

「ええ、行きましょ。」

2人は自転車に乗った。

ケイも、2人乗りに大分なれてきたようだ。

「ミク、体力に自信あるか？」

「あんまり自信ないけど…、肺活量なら自信あるわよ。」

「そうか。」

ケイは、驚くべきプランをミクに告げた。

「これから、山に登る。」

「えええええっ!!」

「大丈夫、勾配はちょっときついけど、そんなに高い山じゃないし。
…頂上からの景色を、ぜひミクに見て欲しいんだ。」

「…わかった、あなたにどこまでもついて行きます。」

「…その意気だ。」

ケイは、ぐつとペダルを踏み込んだ。
体が、ぐいつと前に出る。

ミクは腕にさらに力を込めた。

「実は、さっきから目的地は見えてるんだよ。」

「えっ？」

「あれだよ。」

ミクはケイが指差した方向を見た。
…確かに、山がある。

「あれなのね？」

「そう。あそこから、この街が一望出来る。登山道も、ここからそんなに遠くない。」

交通量の多い道の歩道を走り、ちよつと規模の大きい本屋を横目に走ると、少しだけ上り坂になった。

「もう少しで、登山道の入り口だ。」

緩く上りながら左カーブを抜け、交差点を右折すると急に坂がきつくなった。

ケイはそこで自転車を停めた。

「悪いけど、ここから先は歩きだ。自転車は俺が押していくから。」

「うん。」

2人はゆっくりと、だが確かに一歩一歩登っていく。

「平気か？」

前に行くケイが、後ろを気にしながら聞いてくる。

「うん…、平気…。」

「きつかったら、無理せず言えよ。ちゃんと休憩入れてやるから。」

「わかったあ…。」

ミクは、肺活量には自信があるものの、それ以外は人並みだ。少しずつ休憩を挟みながら、2人は登っていく。その中で、ミクはあることに気付いた。

「ここも、木がトンネルみたいになってるのね。」

「ああ、これも桜だよ。でも、ここだとあんまりゆっくり見られねえだろ？…ここの景色は父さんが好きでね、春になると夜桜を見に来たりする。車の中から見えるからな。」

「へえ…。綺麗なんだろうな、ここも。」

「ああ、綺麗だよ。…この街は、結構桜が見られるところがいっぱいあるんだ。」

「…ケイって、ロマンチストだね。」

「へへへっ。…一応、花見以外にも天体観測とか、野鳥観察も趣味だったりする。特に野鳥は小学生の時に凝ってたね、この街の野鳥とか渡ってくる渡り鳥なんかは大体答えられる自信あるぜ。…ちよつと、おやじっぽい趣味だけだな。」

「そう？…私は、いいと思うけどな。」

「そうか？」

「うん、だって、今日はこの街の自然を見て楽しかったもん。自然の物を綺麗だとか面白いだとか、そういう風に興味を持つのがいいことだと思う。」

日差しは西に傾きつつあった。

「そうか。なら、そうかもしれないな。」

登りはじめてどれくらい時間がたっただろう、ようやく頂上についた。

「よし。」

ケイは適当なところに自転車を停めた。

「あっちだ。」

ケイは階段を指差した。
階段を昇ると、建物が見えた。

「あの中に入る。」

「どうして？」

「あそこから、展望台までエレベーターで上がれるんだ。…ここま
でで疲れたろ、ちよっとくらい楽しようぜ。」

「うん、そうだね。」

2人は自販機で飲み物を買ってからエレベーターに乗り込んだ。

「山の上って、どうしても物価が上がるんだよね。」

「確かに、ちょっと高かったよね。どうして？」

「山の上は、輸送に手間がかかるかららしい。…ここ、麓から車で直接登って来れるのにな。」

「ふふふ、変な話だね。」

エレベーターは、すぐに一番上についた。

「さあ、早く行こう。」

ケイに手を引かれて、エレベーターの目の前にあつた階段を昇る。1つ昇ると、螺旋階段が空へ向かって渦巻いていた。

「もう少しだ。」

螺旋階段を昇りきると、そこは人が5人入れば溢れてしまう程の狭い場所だった。

「今日は運がいいぜ。いつもは誰かしらここにいるんだけどな。」

…貸し切りだ。

「わあ〜っ！すごい！」

フェンスに寄りかかって見ると、街の全景が見えた。
夕焼けに染まった街並みは少しずつ灯りを灯し、不思議な雰囲気を作り出していた。

「ほら、あれ見ろよ。」

ミクが振り向くと、ケイが西側を指差した。
夕焼けが、地平線に消えようとしていた。

「綺麗…。」

…としか言い様がなかった。

「これを、今日は見せたかったんだ。」

そう言って微笑むケイ。

「…ありがとね、ケイ。今日はとっても楽しかったよ。」

「ああ、俺もだ、ミク。」

2人は見つめあうと、自然に、とても自然に唇を重ねた。
2人が顔を離すと同時に、太陽が地平線に消えていった。

「帰ろうか。」

「うん。」

こうして、2人のデートは終わりを告げた。

ケイは、さすがに急勾配を2人乗りで下るのは止まれないと判断したようで、歩いて下山することになった。

勾配が落ち着くと、2人は2人乗りで家まで帰った。

その後、2人はケイの両親に冷やかされながら夕飯を済ませ…ここでもミクは驚くべき食欲を発揮した…、入浴し、それぞれの部屋に戻った。

…そこで、ミクは思い出してしまった。

ケイに、伝えなければいけないことがあると。

…気が重いな。

それでも、ミクはケイの部屋のドアをノックした。

「ケイ、いる？」

「どうかしたか？」

ドアの向こうから声。

…次の言葉を紡ぐのも気が重い。

「大切な話があるの。」

…ドアが開いた。

「入って。」

ケイはミクを部屋に招き入れた。
ケイはソファ―ベッドに腰掛け、ミクを右隣に呼んだ。

「悪いな、散らかってて。」

「ううん。」

「話って、何だ？」

「あのね…、私も、あの川原で気がついたんだけど…、…私って、歌うとき、全然融通がきかないでしょ？」

「ああ、そうだったな。」

「信号をヘッドセットから受信して歌ってるのかなって思ってたんだけど、それだけなら融通きくじゃない？…それで、わかったの。ヘッドセットと袖のパネルだけじゃなくて、私自身も『VOCALOID』と互換してるって。」

「おい、それって、まさか…!!」

…出来れば、私の口からこの言葉は言いたくなかった。
…言えば、ケイが悲しむって、わかっていたから。

ミクは頷き、…少し俯いて、重々しく口を開いた。

「『VOCALOID Editor』の使用期限切れと共に、私も消える。」

「……！」

…ケイの顔を、一瞬にして絶望が支配した。

「そんな、嘘だろ…。なあ、悪い冗談は止してくれ、お願いだ、嘘だと言ってくれ…。」

ケイはミクの両肩を掴んで、軽く揺すってきた。それが一段落したところで、ミクは顔を上げた。

…ケイはミクの表情で、その抵抗が無駄なことだとさとっただけらしい。

…ケイはミクをぎゅっと抱き締め、ミクの右肩に顔を埋めた。

「うつ、うつ、うつ、うつ、うつ、うつ。」

泣いていた。

ミクもケイを抱き、ケイの右肩に顔を軽くのせた。

その体勢のまま、2人は夜が明けるまで、相手の右肩がびしょ濡れになるまで泣き続けた。

第12・5話…徹夜と思いやりのア・テンポ

…結局、一睡もしていない。

何時間、泣いていたんだろう。

気づいたら、山の上で眠りについた太陽が、目を覚ます時間になっていた。

…右肩が濡れている。

ミクも泣いていたのか。…そうだな、俺なんかよりミクの方が何倍も悲しいにちがいない。

ミクは、泣き疲れて眠っていた。

…このままじゃ、風邪ひくな。

俺は、ひとまずミクをソファ―ベッドに寝かせ、ミクの部屋に行って敷き布団の上から掛け布団を退かした。

そして、ミクを抱き上げ、ミクの部屋まで連れていき、布団に寝かせた。

ミクの肩も濡れていたので、できるだけ柔らかそうなタオルを選んであげ、掛け布団を被せた。

「これで、大丈夫かな…。」

確認して、ミクの部屋を出ようとした、その時。

「んん…、ケイ…！」

振り向くと、ミクは起きてはいなかった。
眠ったまま、顔をしかめている。

…何か、悪い夢でも見てるのかな…。

俺は、うなされているミクの布団の横に座った。

「待って…。」

ミクは、右手を布団の外に伸ばしてきた。

…待ってやるとも。ミクのためなら、何日でも、何カ月でも、何年でもな。

そんなことを考えながら、ミクの手を俺の両手で包んでやった。

しばらく手を握っていると、ミクはすーすーと落ち着いた寝息をたて始めた。

もう、大丈夫だな。

… なんだか、俺も眠くなっ…

「… イ…、ケイってば…。 風邪ひいちゃうよ…。」

「… んう…。」

… どうかやら、俺もあのままミクの布団の横で眠ってしまったようだ。
… 何か、柔らかいものが俺の口をふさいできた。
口が解放されるのより少し後に、俺は目を開けた。
… 結構近くにミクの顔があった。

「さっきは、ありがとね。」

「礼には及ばないよ。これくらいどうってことない。昨日、引き留めちゃったのは俺だしな。」

「でも、ケイがいてくれたから、私、気持ちがすごい楽になったの。」

…2人でいれば喜びは2倍、悲しみは半分って訳だな。

「そうか、ならよかった。」

「えへへ。」

「ふ…、へくしっ！」

俺がくしゃみをする、ミクはびくつとした。

「うっ、さびい…。」

「大丈夫？」

「ちょっと、無用心に寝過ぎちまったみてえだな…。」

ミクは俺の額に手をあててきた。

「…熱あるよ？」

「こんくらい、大したことねえよ。」

ミクはちょっと顔をしかめた。

「…あのさ、ケイ。」

「…？　どうかしたか？」

ミクは、いきなり俺に抱きついてきた。

「お願い…。もう少し、自分を大切にして。私、ケイが心配なの…。
安静にして、お薬飲もう？」

こいつ、もう少しで自分が消えちまうって時ですら俺の心配しやが
って…。

「わかった。わかったから…、ミク、お前も少しは自分のことを大
事にしてくれよ。」

「えっ？」

「ミクはちょっと自分を犠牲にし過ぎだと思う。…俺も、ミクのこと
が心配だ。」

「…ありがと。」

「…そろそろ朝飯だろ。食いにいこうぜ。」

「…そうだね。」

時刻は8時を少し過ぎたくらい。

俺とミクは階段を降り、1階のリビングへ向かった。
リビングと台所はカウンターを挟んで繋がっている。リビングに入
ると、母さんが朝飯を作り終わり、カウンターに茶碗が2つ並んで
いた。

…俺達以外は、みんな朝飯を済ませたということだ。

「おはよ〜。」

「おはようございます。」

「あら、ケイにミクちゃん。朝から熱いわね〜。」

「い、いえ、そ、そんな…。」

ミクはとても照れくさそうだ。

… 2人きりの時は、あんなに積極的なのに。

朝飯を済ませ、風邪薬を飲んで、歯を磨いて顔を洗う。

… なんだか、ぱつとしない。

ミクも、同じように洗面を済ませているが、やはりちょっと浮かない顔だ。

… まあ、当然だけど。

「なあミク、今日、やりたいことあるか？ どうせ今日も部活出られないしさ、1日空いてるんだ。」

と提案すると、

「駄目だよ、ケイは家にいて安静にしていなきゃ。」

「ミク、心配してくれるのは嬉しいけど、俺はな、今日をこんな微熱で無駄にしたくないんだよ。」

今日を無駄にしたら、俺は一生後悔すると思う。

でも、今日ミクと思い出を作れたら、もし俺がそのまま死んだとし

ても絶対に後悔はしない。

…それに、俺の体は基本的に丈夫でね、ちょっとやそつとじゃあくたばないよ。

俺は38度の熱を抗生物質だけで1日で下げた男だぜ?」

…ミクは、どうやら俺の意思をくんでくれたようだ。

「じゃあ…、海に行きたい。」

と返事が来た。

「へえ。そりゃまたどうして?」

「昨日、山の上から海が見えたじゃない?…どんなところか、気になったの。」

「海って、結構何にもない場所だけど、それでも行くか?」

「うん。」

ミクははっきりと頷いて応えた。

「よし、わかった。…でも、ただ海に行くだけでもちよつとつまらないだろ。これから準備するから、ちよつと待ってな。海は寒いから、防寒はちゃんとしとけよ。」

「わかった。何か手伝えること、あったら言ってね。」

「おう。」

俺は大きなリュックを用意し、必要な物を適当に詰めて、父さんから自転車を借り、お決まりの2人乗りで出かけることにした。

前カゴにリュックを載せ…大きいから意外に時間がかかった…、後ろの荷台にミクが乗ったのを確認して、俺は海に向かって自転車をこぎだした。

幕間12・5…一期と一会のエスプレッシーヴォ

…海、かあ…。どんなところなのかな？

ミクは、昨日見た景色から想像していた。

…昨日見たときはキラキラしてて、綺麗だったな。

ミクにとって、見るもの、聞く音、匂い、感触、すべてが未知のもの。

外の世界で見たことがあるのは、ケイだけだった。

2人は途中でコンビニに寄り、弁当を買った。

もう一度自転車に乗ろうとする時、ミクはリュックから何か棒がはみ出ているのに気づいた。

「ケイ、それなあに？」

「…まだ秘密だ。そのうちわかるから。」

2人はしばらく自転車に乗って川を下った。

「ここら辺りから歩道が狭くなるぞ。しっかりつかまってるよ。」

「うん。」

ミクはケイにつかまっている手に、ぐっと力を込めた。

ケイは国道らしき大きな道を曲がり、しばらく走ると何かの店の前で自転車を停めた。

「俺はちょっと買い物に行ってくるけど、どうする？そんなに面白い物も売ってないけど……。」

「一緒に行くわ。」

「……じゃあ、行こう。」

ミクはケイに続いて店に入った。

ちょっと古びた感じの店内には、見たこともない物が沢山売っていた。

ケイは店のおじさんに、プラスチックのパックに入った何かを売ってもらっていた。

「ねえケイ、あれなあに？」

ミクは白黒の魚の絵のような物を指差して聞いてみた。

「あれは魚拓だよ。大きな魚が釣れたら、記念に魚に墨を塗って判子みたいにつつしとるんだよ。家にもあるぜ？父さんのだけだな。」

「へえ…。」

…そうか、ケイは私を魚釣りに連れていこうとしてるんだ。
っていうことは、さっきの棒は釣竿だね。

「いつかは、俺も魚拓に出来るような魚、釣りてえな。」

「ケイなら、きっと出来るよ。」

「へへっ。ミクがそう言ってくれるなら、きっと出来るな。」

「さっきの棒、釣竿なのね？」

「ご明察。これから砂浜に行くんだ。」

「砂浜かあ。」

「堤防も考えたんだけど、砂浜の方が景色も綺麗だし。靴に砂つくけど、中まで入らないように気をつければ自転車に乗ってる間に勝手に落ちるから。さっきちょっと海が見えたんだけど、波もなさそうだし。どうだ？」

「いいね、砂浜。」

「じゃあ、決定だな。」

などと話ながら2人が店を出ようとした時、

「おい、そこの嬢ちゃん。」

という声がした。

店内には2人とおじさんしかいなかったので、ミクは振り向いた。

「…はい？」

「これ、持ってきたな。」

と言っておじさんが差し出したのは、薄くて、ぴたっとしたビニールに包まれた何かだった。

中には、魚の写真がプリントされた紙に、透明な糸が巻かれていた。

「おつ。よかったな、ミク。それ、今日の釣りで使えるぜ。…おっちゃん、俺には？」

「たわけ。野郎にただでやる趣味はないわい。」

「ちえつ。」

「ふふふ。ありがとございました。」

「いいんだよ。女性には優しくするのがわしのモットーだから。」

「…そろそろ行くうぜ、ミク。釣る時間が短くなっちまう。」

「そうだね。…ありがとうございました。」

「また来てな。」

おじさんのその呼び掛けへのミクの答えは、ちよつとだけ悲しみを
含んだ笑顔だった。

呆氣にとられた様子のおじさんを尻目に、2人は自転車に乗って砂
浜を目指した。

第13話…光と海原のブリッランテ

…さっきのミクの顔、ちょっと悲しそうだったな。

…無理もないけどな。ミクは、あのおっちゃんとは今生の別れってことになっちまうんだからな。

それを考えると、俺もちよっぴり悲しくなってきた。

でも、泣いてばかりはいられない。昨日あんなに泣いたんだ、涙は、もういらない。

一期一会、か。

そんなことを考えていたら、目的地に着いた。

「よし、ここだ。」

俺は道路脇に自転車を止め、ミクを下ろし、リュックを背負った。

コンクリートのトンネルをくぐり、砂浜へ。

「わあゝ！」

トンネルで、ミクは何かにいい反応を示した。

「どうした？」

「なんかこのトンネル、舟とかよくわかんない機械とか大きいバケツとかおいてあって、面白いなって思ってた。」

「漁師さんの道具だな。無闇に触ると危ないから気をつけろよ。網なんかを踏んだりすると、転けるし漁師さんの邪魔になるし、いいことねえから。…まあ、俺も踏んだことねえから平気だろ。」

トンネルを抜けると、そこは雪国…ではなくて砂浜が目の前いっぱいに広がった。空の所々に雲があって、切れ間から太陽の光が筋になって降り注いでいた。

「綺麗だね。」

「そうだな。俺は海に来るとき、釣りも勿論楽しみだけど、この景色を楽しみにしてるんだ。」

とはいっても、いつまでも景色を見ている訳にもいかない。

俺は釣り座を探した。

今は盛期を過ぎたからか、人はあまりいなかった。

「あそこにしよう。」

「うん。」

俺は出来るだけ歩かずに釣れそうな所を探した。

シートを敷いて荷物を置き、重石代わりにしてシートが飛ばされないようにする。

バケツを出して水を汲む。これも風で飛ばされないようにするため。

「仕掛け用意するから、ちょっと待ってな。」

「うん。」

俺は竿を伸ばし、重りを糸に結んで、ミクがおっちゃんからもらった仕掛けを真っ直ぐにして重りに繋げた。

…仕掛けの準備はこれで終了だが…。

「…ミク。これから釣り方を教えるけど、仕掛けを回収したら俺に声かけてな。」

「どうして？」

「…餌がな…、相当やばい見た目をしてるんだ。」

…女性は往々にして、この手の虫が苦手だ。

特に今日使うイソメなんてのは、その中でも相当強力な部類に入る。

家の母さんや姉さんは、父さんにしょっちゅうあっちこっち連れていかれてるからなれてるけど…。

出来れば、ミクには見せたくない。

「…わかった。」

俺はイソメを4分の1に千切って針につけた。

バケツの海水で手を洗い、タオルで拭いて、竿を持ってミクに直る。

「でも、仕掛けの投入くらいは覚えてな。」

「うん。」

「まず、後ろに人とか障害物が無いか確認して、振りかぶってからリールのここを起こして、糸を人差し指に引っかけて、…よっ、と。」

仕掛けは、放物線を描いて飛んでいった。

おお、とミクがちょっとした驚きの声を上げ、パチパチと拍手した。

「…とまあ、こんな感じだ。ミクにもすぐ出来るようになる。」

俺は竿をミクに渡した。

「んで、さっき起こしたリールのそれを倒す。…それで、糸が巻き取れるようになる。」

「へえ…。」

「そしたら、リールをゆっくり回して糸のたるみをとって、竿先の感覚に注意しながらゆっくり、仕掛けをずるずる引っ張って…、しばらくしたら、ちよっと重たくなる所あるだろ。」

「…えっ！何でわかったの!？」

「何年も父さんと通いつめてるからな、ここは。…そしたら、ちよっとそこで待ってみな。」

「…わかった。」

その間に、俺は自分の仕掛けの準備に入った。

さっきと同じように準備して、餌をつけようとした、その時。

「えっ、えっ！えええ！？」

ミクがすつとんきょうな声を上げた。

「当たったか。」

「あ、当たったって何？」

「…すごい慌てっぷりだ。」

「…何か、ぐぐぐって引っ張られたんだろ？」

「そ、そっよ。」

…変に釣りを知ってる奴は、そこでアワセ（魚の口に針をかけよう

とすること）を強くやりすぎてバラシ（逃げられる）…というパターンがよくある。

ミクは何がなんだかわからない様子で、体を固めたまま慌てていた。
…器用だな、こいつ。

「そしたら、そのままもう少し待ってみな。」

「へ、平気なの？」

「大丈夫。」

俺がミクの隣に行くと、…なるほど、竿先が結構激しく引っ張られている。

…こいつはダブルか、大きい奴だな。

「よし、じゃあ、さっきの要領で仕掛けを回収するんだ。」

ミクは、ゆっくりと仕掛けを動かし始めた。
…表情から、緊張がすごく伝わってくる。

「そんなに緊張しなくて平気だよ。もし逃がしても魚はいっぱいいる。」

…って言っても、ミクの気持ちはよくわかる。
やがて、凧の海面を割って、仕掛けが姿を表した。

「…おお。」

ミクが釣り上げたのは…。

「これ、なんて魚？」

「それは『キス』だな。今日はそれを狙って来たんだ。」

「えっ!？」

…ミクの顔が、みるみる真っ赤になっていく。

実は、この反応を予想した上での返答だ。

…まあ、事実だから仕方ない。本当に「キス」という魚なのだ。

「これはいいキスだ。こんなに大きいのは俺も釣ったこと無いかも
な。」

「き、キスう…。」

ミクは唇に手をあて、何か考えるようにまじまじとキスを見つめていた。

「魚偏に喜ぶって書いて『キス』って読むんだ。魚がどうか行かない内に釣っちゃおうぜ。」

「えっ？う、うん！」

鱈が弱らないように針を手早く外し、そのままバケツにいれた。
…一匹だったけど、目算25センチオーバー。この魚に関しては、かなり大きい。

ミクの仕掛けに餌をつける。

「次は自分で投げてみな。」

「…やってみる。」

俺も餌をつけ、ミクが投げるのを見守る。

振りかぶって…、投げた。

若干腰砕けになったが、真っ直ぐ飛んでいった。なかなか筋がいい。

「うまいうまい。」

俺が拍手すると、ミクはちょっと照れながら笑いかけてきた。
俺も投入する。

群れにあたったのか、2人ともすぐに当たりがきた。

「こいつは幸先いいな。」

「そうだね。」

…ぐぐぐって引いてきて、なかなか重たい。
俺のもさっきのくらい大きいといいんだけどな。
…ミクの奴ほど大きくないけど、なかなかのサイズの鱈が一匹、普通サイズが一匹のダブルだ。

「うん、なかなかだ。」

と言いつつ、

「こっちも来たよ!…わぁ!何これ!?!」

… 見ると、鱈が一匹、そして、もう一匹何かついている。

「そいつはそのままだとぬるぬるしてちよつと気持ち悪いんだけど、持って帰るときにちゃんとぬるぬるをとってやれば鱈よりうまいぜ。」

「へえ〜。… すごいおちよぼ口だね。」

「よく見るとかわいいだろ？」

「そうかな〜？… あ、そうかも。」

「ちよつと待つてな。今外してやるから。」

… そんな感じで、大体お昼頃に魚の食いが止まる頃には、2人で合計20匹近く釣っていた。
大漁だな。

「食いが止まってきたな。そろそろ昼飯にしようか。」

「うん！」

俺達はシートに腰かけ、弁当を開いた。

「どうだ？釣りは。楽しいか？」

「うん！」

子供みたいに喜んでいる。…こいつは、連れてきた甲斐があったな。

「ならよかった。帰ったら母さんに天ぷらにしてもらおうか。」

「ほんとに！？」

「ああ。…自分で釣った魚の味は格別だぜ？」

「うわあ、楽しみー！」

「…海、気持ちいいだろ。」

「うん。」

「飯食い終わったら、…どうだ、一曲歌わねえか？」

「…いいね。」

「まあまあな歌がある。確か大正時代くらいの歌で、音楽の教科書に載るような歌だけど、ここで歌うにはいいと思う。」

「へえ…。」

弁当を食べ終わり、俺は手早く打ち込みに入った。

「…こんな感じかな。じゃあ、歌おうか。…せーのっ。」

「〜
♪」

…やっぱり、歌は楽しいものだ。

けど…。歌声は響き渡って、いつかは消える。

夢のような時間にも、いつかは終わりが来る。

海原に消えゆく歌声が、夢のような時間に終わりが近いことを報せていた。

午後は少しだけ釣って、母さんに天ぷらの用意をするように伝え、日が暮れないうちに家路についた。

幕間13…融け合う感情のアジテート

…歌が寂しく感じたのなんて、初めてだな。

ミクは2人乗りしながら考えていた。

…ケイも、寂しく感じてたのかな。
きつと、そうだね。

ミクはケイをぎゅっと抱きしめ、背中に耳を当ててみた。

…ヘッドセットが邪魔だけど、鼓動が聞こえる。
このリズムだけは、絶対忘れないようにしよう。

「どうかしたか？」

「ううん、何でもないよ。…でも、しばらくこのままでもいいよ。」

「…わかった。」

秋の夕暮れの空気は針を刺すように冷たかったが、ケイの背中は温

かった。

「なあ、ミク。」

「なあに？」

「今日、楽しかったか？」

「うん、楽しかったよ。」

「そうか、ならよかった。」

「どうかしたの？そんな急に。」

「…なんかさ、こんなでよかったのかな、って思ってた。」

…きっとケイは、私がもうすぐ消えちゃうから、その辺を心配してくれてるんだよね。

「…ありがと。」

そうこうしているうちに、自転車は昨日来た桜の枝のトンネルを過ぎ、山の麓をなぞるように進んでいた。

ミクは腕に力を込め、ケイの感触、温もりを体に刻み付けた。

2人は無言のまま、山麓の住宅街を進む。

日は傾き、夕日のオレンジ色が最も鮮やかな時間だった。

そのオレンジに、少しだけ青が混ざる頃、2人は家に着いた。

車庫入れの邪魔になってしまうので、ミクは先に自転車を降り、ケイを待つ。

ケイは、リュックを背負ってすぐに出てきた。

…なにやら思い詰めたような顔をして、ミクに向き合った。

「なあミク、いきなりで悪いんだけど、ちょっとだけ、俺のわがまま聞いてくれるか？」

「なあに？」

「…キス、しようぜ。」

どうやら魚の名前ではないらしい。

魚の名前を口にするだけなら、ケイがこんなに緊張する訳がない。

「うん。」

ミクは目を閉じて、ケイのしたいようにさせてあげた。

…このシチュエーション、ちょっとだけ憧れだったんだよね。
おとぎ話のお姫様と王子様みたい。
今日は、私がお姫様。

…大好きだよ。私の、王子様。

2人がキスをすると、恥ずかしがり屋な夕日は完全に地平線に消えてしまった。

…この感触も、忘れない。絶対に。

ケイは顔を離れた。

「ありがとな、ミク。」

「こっちこそ。ありがと。」

「…じゃあ、寒くなってきたし、行こうか。」

「うん。」

「先、家人って。俺はやることあるから。」

「そう…。それは持ってた方がいい？」

ミクは、ケイが玄関のタイルに置いた大きなリュックを指差した。

「ああ、そうだな。持ってたってくれるとありがたい。…持てるか？」

「大丈夫だよ。」

ミクはリュックを背負ってみた。…ちょっとふらついた。

「おいおい、大丈夫か？」

「だ、大丈夫、大丈夫。」

「無理すんなって。一緒に持っていこう。」

「えっ？でも、やることあるんじゃない？」

「竿とリールを洗っただけだ。後でも出来る。…冷えたらうつから、ミクには先に暖まってもらいたかったんだ。」

「そんな、それじゃケイが…。」

「俺なら大丈夫。慣れてるし。」

…ケイだって、十分自分を犠牲にしてるよ…。

ミクがリュックを背負い、ケイが後ろから支える形になった。

「大丈夫か？重たくないか？」

「私は大丈夫だけど、ケイは平気？」

「俺も大丈夫だ。」

ミクは玄関に手をかけた。

「…こういうとき、私は何て挨拶したらいいのかな…？」

「ただいま、でいいと思うよ。」

意を決して、ミクは玄関を開けた。

…実際何気ないことなのだが、ミクにはとても勇気のいる行為だった。

「た、ただいま。」

「ただいま。」

「あら、お帰り。」

緊張するミクとは裏腹に、恭子はまるでいつものことだとも言わんばかりに自然に返答した。

「ケイ…」。女の子にそんな重たい物持たせて。」

恭子は急に声のトーンを低くした。

「ちっ、違うんです！私が持つって言ったんです！」

「…まあいいわ。大漁なんでしょ？台所まで持ってきて。」

「はい。」

2人はそのまま靴を脱いで台所までリュックを持っていき、開けて中からクーラーボックスを取り出した。

「本当に大漁ねえ。大きいのはびっくりだし。」

「一番大きいのはミクが釣ったんだ。」

「すごいじゃない！こんなに大きいのは、そうそう釣れないわよ？」

「本当ですか！？」

「ああ、本当だよ。」

2人からのお墨付きだ。

「わあ、嬉しい。」

「そうだ。ミク、写真撮ってやろうか。デジカメ持ってくるからちよっと待ってな。」

と言ってケイはどこかへ行ってしまった。

「あの子、内心は結構悔しいんじゃないかしら。」

ふふふ、と笑って、恭子は他の魚をさばきながら言った。

「そうなんですか？」

「あの子も、父さんに似て根っからの釣り師なのよ。」

と噂をしていると、ケイが帰ってきた。

「よし、じゃあ、手を揃えて出して。…そう。じゃあ、魚乗っける

ぞ。冷たいから気をつけろよ。」

「うわ、冷たいっ。」

「はい、チーズ。」

パシャ。

「大丈夫？顔、ひきつってない？」

「うん、ばっちりひきつってる。」

「ほんとに!？」

「冗談。ちゃんと撮れてるよ。」

本当に平和な、夕食前の何てことないワンシーン。

ミクにとっては、こんな景色でさえも、もうすぐ見納めなのだ。

…ああ、出来ることなら、この家にずっと、いつまでもいたい。

一度叶いそうになっただけに、余計に強くそう思う。

ミクは魚を恭子に渡し、手を洗って、先に風呂に入らせてもらい、一旦自室に戻った。

扉を閉めた途端、今まで心の底に仕舞っていた悲しみが、一気に顔を出した。

「うつ、うつ……。」

ミクは一人で、静かに啜り泣いた。

静寂に満ちた部屋の中に、啜り泣きだけが静かに響いていた。

やがて、夕食の時間が近づいたので、ミクは涙を拭き、気持ち落ち着かせて居間へと降りた。

夕食は天井だった。

魚の尻尾が、井からはみ出していた。

「いただきます。」

一口食べてみる。

「どうだ？」

「うん、とっても美味しいよ。」

嘘ではなかった。本当に美味しかった。

だが、今のミクにはその美味しさを心から楽しむことは、残念ながら出来なかった。

「…？　どうかしたか…？」

…どうしてこう、この家の人達は変に勘が鋭いんだろう。

「…ううん、何でもない…。」

ミクにとっての貴重な晚餐は、しんみりと過ぎていった。

夕食が終わり、皆それぞれの寝室に戻った後、ミクはケイの部屋に向かった。

…今度は、私のわがまま聞いてもらおう。

ミクはケイの部屋の扉をノックした。

「はいはい、どちら様…。」

「私。」

「…いいよ、入って。」

ケイはミクを部屋に招き入れた。

「どうした？」

「今日、…また一緒に寝て欲しいの。」

ケイは相当驚いた顔をした。

…病院でベッドに潜り込んだ時も、こんな顔してたっけ。

「一人で寝るの、ちょっと怖くて。…お願い、私のわがまま、聞いて？」

…もう、私はどうなったって構わない。とにかく、一瞬でも長くケイと一緒にいたい。

「
…わかった。」

ミクが布団に先に潜ると、ケイが後から入って来た。

「ケイ、…愛してる。」

「…俺もだ、ミク。」

2人は抱き合い、キスをした。

…ああ、このまま2人とも融けて、1つになれたらいいのに。

そのまま、2人はほぼ同時に眠りに落ちた。

第13・5話…願望と寂寥のレガート

俺が目を覚ますと、俺達は寝る前と全く同じ体勢のままだった。

…少し違うところは、ミクの腕の圧力が、寝る前より強くなっている。

…普通、寝てる時って力弱まるよな…。

俺はその体勢のまま、ミクの顔を見た。

…笑っていた。けど、目からは涙が溢れていた。

何かものすごい切なさが襲ってきて、俺はミクを抱き締めた。

どれくらい、そうしていたんだろう。

目覚まし時計のアラームが、部屋中に鳴り響いた。

微かに、ミクの目が開く。

同時に、ミクの腕の力が緩んだので、俺も腕を緩めた。

「…おはよう、ケイ。」

ミクは、今にも泣き出してしまいそうな笑顔で、俺に笑いかけてきた。

「…おはよう。」

…今日で、こいつは消えてしまう。

よく考えれば、元々決まっていた事なのだ。こいつをパソコンにソフトとしてインストールした時から。

まさか感情を持ち、さらにパソコンから出てくることになるなんて誰がわかっただろう。

『神のみぞ知る』という言葉があるけど、ひょっとしたら神様ですら全く予想外だったんじゃないだろうか。

俺達は布団から起き上がり、いつも通り…だな、いつも通りに、一階のリビングへと向かった。

「あら、ケイにミクちゃん。おはよう。」

「…おはよう。」

「…おはようございます。」

「…？　どうしたの？　2人揃って浮かない顔して。」

「何でもないよ。きっと俺もミクも、ちょっと遊び疲れたただだよ。」

…この程度の嘘、母さんならすぐ見破るだろう。
でも、母さんはそれ以上の深入りをしなかった。

今日から、俺はまた学校に行かなければならない。
…よりによって、今日からだなんて。

「ねえ、ケイ。」

「ん？」

ミクが何やら話しかけてきたので振り向くと、ミクは自分の顔の両横の皮を両手でぎゅっと握って、変顔を作っていた。

だけど、握力が若干足りてないんだろう、微妙に変顔を作りきれていなかった。

「ぷっ。」

その様子が逆に堪らなくおかしくて、思わず吹き出してしまった。

「ケイ、やっと笑った。ケイったら、またあの怖い顔してたんだもん。」

作りきれてない変顔を止め、いつもの優しい笑顔に戻ってミクは言った。

「そっか、…悪かった。ありがとな、ミク。」

俺はミクの頭を撫でた。

ミクは笑顔に、さらに喜びを込めた。

「でもな、ミク。」

「？」

「まだまだ、甘いぜ。」

「何が？」

「本当の変顔ってのはな…、」

俺はミクに背を向けた。

「こつやるんだよ!」

俺は振り向き、ミクに変顔の完成形を見せた。

「ぶつ。」

『あつはつはつはつはつは!』

2人で腹を抱えて笑った。

俺達は朝飯を済ませ、歯を磨こうと洗面所に行く。

先に俺が歯を磨き、ミクが顔を洗う。こつすると効率がいいのだ。

ひとしきり片方が終わると交代する。

こんな何気無いことが嬉しい。

2人である。それだけで嬉しいのだ。

俺達は洗面を終え、俺は学校の用意をするために自室に戻る。

学校の用意が憂鬱だ。本当に仮病を使って休んじまおうか。

…残念ながら、俺の熱は朝測ると平熱に戻っていた。この時ばかりは、俺は自分の体の丈夫さを呪った。

学校の用意を終えて、俺は階段を下る。

いつものように弁当を鞆に詰め込み、肩にかけて玄関に向かうと、ミクが立って待っていた。

「……待っていてくれたのか？」

ミクは少し目を伏せ、こくりと頷いた。

「……ありがとな。」

ミクは無言のまま、少し顔を上げて口元を持ち上げるように微笑んだ。

「できるだけ早く帰ってくる。部活もまだ出られねえから、結構早く帰ってこれると思う。」

「……約束、だよ。」

ミクは細くて真っ白な小指を差し出した。

「ああ。」

俺も小指を差し出し、指切りをした。

小指をほどくと、ミクは俺の肩につかまり、キスしてきた。

「…行つてらっしゃい。気をつけてね。」

俺は黙って頷き、靴をはいて自転車の鍵を引っかけ、玄関を出た。

…玄関を閉めようと振り向くと、ミクが寂しげに手を振っていた。
俺は努めて明るく手を振り、家を出た。

幕間 13・5…幸福理論のトランクイッロ

…行っちゃった。

ミクは閉じられて間もない玄関の扉を見詰めた。
そして、振り切るようにその場から立ち去った。

…私にはまだ、やるべきことがある。

ミクが向かった先は。

「あら？ミクちゃん。何か私に用事？」

「…実は、お話が…。」

「…ここじゃないでしょう、和室にいらっしゃい。」

2人は和室に移動し、こたつで並んで座った。

「そう言えば久しぶりね、こうやってお話するの。」

「…そうですね。」

…この人にも、言わなきゃいけないのか。

「それで、何？話って。」

ミクは、わかっていること全てを恭子に話した。

「…どのように消えるのか、それはまだわかりません。でも、今日の夜10時、私は消えます。」

恭子は一瞬驚いた顔をしたが、すぐに真面目な顔になった。

「そうだったの…。ケイには？もう話した？」

「ええ、このことがわかったその日に…。」

ミクの眼前に、あの時の絶望に支配されたケイの顔がはつきりと、今まさに見えているかのように思い出された。

「そう…。だから今朝、2人してあんな顔して降りてきたのね。」

「はい…。」

…ああ、できればあの顔は、もう二度と思い出しくなかつたのに。

「あのね、ミクちゃん。」

「…はい？」

「私ね、あなたにお礼が言いたいのに。」

「…どうしてですか？」

「あなたが家のパソコンに来るまで、ケイ、全然家族と関わろうとしなかったのよ。」

「そうだったんですか…。」

「ケイも年頃だし、自然なことだとは思っただけ…。私達の前で

感情を表に出さなくなったのよ。」

「……。」

……私の前ではあんなに感情の起伏が激しいのに。

ちよつとうまくいかないだけですごく落ち込んだり、私のために泣いてくれたり。

そのケイが、感情を表に出さない？

ちよつと信じられない。

「……意外だった？」

「ええ、とても……。」

「ミクちゃんをインストールした次の日、すごく機嫌がよさそうだったから、話しかけてみたのよ。そしたらすごく嬉しそうに答えたの。それから、ケイに話しかけるのに抵抗が消えたわ。あなたのおかげよ。」

「……よかったです。少しでもお役に立てて。私、この家の人達にお世話になりっぱなしで、勝手に消えていくのは心苦しいなって思っていたんです。何か恩返しがしたかったんですけど、……あいにく、私は何も持つてはいませんから。」

「いいのよ、そんなに気をつかわなくて。あなたと居るだけで、私達はとっても楽しかったんだから。」

「…ありがとうございます。お父さんにも、宜しくお伝え下さい。」

「…あの人は、『お父さん』なのね。」

「あっ。」

「いいのよ、名前で呼べって言ったのは私だし、あの人の名前も聞いてないんでしょ？」

「はい…。」

「でも、ちょっとお願いしていいかしら。」

「はい、何でもございぞ。」

「私のじい、『お母さん』って呼んでくれる？」

「はい。…お母さん。」

「…ありがとう。あなたはいい娘だったわ、ミクちゃん。」

そう言って、啓大の母親はミクを向いて微笑んだ。

その時、ミクの内側から、どっと何かが込み上げてきた。

「ふっ…、うっ…。」

「…おいで、我慢しないでいいから。」

言われるがまま、ミクは彼女にもたれかかった。

「うわあああ…。」

優しく、背中を撫でてくる手。

痛いほど、優しさが伝わってきた。

深く関われば関わるほど、別れは辛くなるもの。
それを、ミクは改めて痛感した。

…でも、人は他人と深く関わることをやめられない。
『愛』を求めることをやめられない。

それは、一時的とはいえ人の姿を得た私も同じ。

家族、友達、恋人…間柄は違うし、ちよつとずつ形とか大きさとか
中身とかも変わっていくけど、結局、人って『愛』を求めて深く関
わり合おうとするんだよね。

『愛』っていうものはきつと、『辛』に『一』を足して『幸』にす
ることが出来るもの。

だから、その『一』が抜けようとしてる今、私はこんなに『辛』い
んだ。

ミクは泣きながら、ふと悟ったようにそんなことを考えた。
ひとしきり泣いた後、ミクは母から離れた。

「ありがとう…ごさいました。最後まで甘えっぱなしですみません。

」

「いいの。あなたは私の娘なんだから、おもいつきり私に頼る権利
があるわ。」

「…生まれ変わったら、本当の娘にしてくださいね。」

「あら、楽しみね。その時はよろしくね。」

「じゃあ、私は一旦部屋に戻ります。」

「うん。」

…本当に、この家に来てよかった。

第14話…喪失と思い出のグラーヴェ

時計の針の進み方が、やけに鈍く感じる。

授業に実が入らず、全く集中できない。

教科書とノート、その他の教材を机に広げたまま、ため息をついた。

…俺にとってはこんな授業、今はどうでもいい。

お願いだ、早く終わってくれ。

「…小松君。」

「はっ、はい！」

名前を呼ばれ、つい口から慌てた返事が飛び出した。

「さっきからあたっていますよ？この単語の意味を答えて下さい。」

「…すみません。」

…あゝあ…。

「どうした？お前らしくもない。お前はいつもはいい加減だけど、

さされたときはびしつと答えるだろ？」

休み時間に入り、友人が話しかけてきた。

「『いつもはいい加減』は余計だ。…俺だって、ぼーっとする時だつてある。」

「いや、ぼーっとしてるのはいつも通りだけだよ、今日は特に酷いぞ？いつもはぼーっとしてても、先生にさされたときは答えるだろ？」

…また余計なことを。

まあ、こいつのこういう容赦ないところにはもう慣れっこだ。もはや突っ込む気にもならなかった。
言ってることも的を射てるしな。

「…何でもねえよ。」

「何でもなくねえだろ。お前、『お葬式行ってきます』って感じの顔してるし。」

…なんだこいつ。大体あつてるじゃねえか。

「…ほつとけよ。」

話を切り上げたくて、つい素っ気なく応えた。

「あ、わかった。コレだろ。フラれたか？」

と言って友人は笑いながら小指を立てた。

…何てこった。余計に食い付いて来やがった。しかもこいつ、更に核心部に迫ってきた。

今言った2つのことを足して2で割って1引いたくらいのところに、答えはある。

「…もう、ほつとけよ…。」

「あ、当たり前なんだろう。」

「ほつとけつつってんだろ…!!」

俺はつい、机をおもいきり叩いて立ち上がりながら叫んでしまった。

ざわめいていた教室が、一瞬で静まった。

…やべ、2週間の内に2回も気まずくするようなことやっちゃった…。

俺は再び椅子に座り、頭を抱えて下を向き、大きく目を見開いて驚いている友人に言った。

「悪い。ちょっとマジで、1人にしてくんないかな。」

「…わかったよ。」

「…ごめん…。」

「いや、俺の方こそ悪かった。」

友人は珍しくしゅんとして去っていった。
俺は机に突っ伏した。

…ああ、くそつ。

友人が去ってしばらくすると、教室は再び話し声が徐々に増えていき、もとのざわめきになるまでにそう時間はかからなかった。

午後の授業が始まってでも集中できないのは変わらず、黒板に書かれ

た記号は全く頭に入ってこない。

先生の声も、右耳から入っても左耳から抜けていくような感じた。

…あいつをインストールした時は、こんなに別れが辛くなるなんて思ってもみなかったな。

午前中より、酷かった。

…が、ホームルーム終了のチャイムには、俺の身体と頭は鋭敏に反応した。

座っていた椅子を後ろに吹っ飛ばすように立ち上がり、右足で強く床を蹴った。

事故の影響か、右膝が少し痛んだけど、そんなこと今は気にしてる場合じゃない。

体に絡み付いてくるクラスメート達の驚きの声を振り払うように、俺は教室を出た。

階段をほとんど飛び下りるように駆け抜け、下駄箱で靴を踏み潰すように履き、駐輪場へ急いだ。

大量の自転車の中から自分のものを引きずり出し、鍵を差し込んで飛び乗る。

後は、何も考えずに全速力で突っ走るだけだった。

「た、ただいま…！」

家に着く時には、自分の息の上がり方に驚いた程だ。

「どうしたの!？」

ミクが駆け寄ってきた。…ああ、俺、帰ってきたんだ。

「…出来るだけ、早く帰ってきた。」

「怪我人なんだから、無理しちゃ駄目だよ。」

「こんくらい、部活に比べたら大したことねえよ。」

「その部活も、今は出ちゃいけないんだし…。」

「うっ…。」

「傷口もまだかさぶたで、開くかもしれないんでしょ?。」

「んぐ…。」

…返す言葉もない。

「そんなに急がなくても平気だよ。…ほら、早くあがってゆっくりしよ?」

「…そうしよつか。」

…すっかり順応したな、こいつ。

「なあミク、今何時だ?」

「ええつと…、4時ちょうどだね。」

「…俺がミクをインストールしたのは何時?」

「…夜の10時。」

あと6時間、か…。

「何かしたいこと、あるか?」

「…今は特に。」

「そうか…。何か思いついたらすぐに言えよ。できる限り努力するから。」

「ありがとね。…あつ、今思いついた。」

「なんだ？」

「…私から、離れないで。今日はずっと、そばにいさせて。」

「…もちろん、そのつもりだ。」

「ふふふつ、ありがと。」

…こうやって笑ってるところだけ見れば、なんてことない普通の女の子なのにな。

格好はちよつと奇抜だけど。

俺達は家にあがり、弁当の片付けをして2人で俺の部屋に向かった。俺は鞆を床に投げ、体をベッドに投げ出した。ミクもそれにならない、ベッドに横になった。

2人で天井を仰ぐ。

「なあミク、ちょっと疑問に思ってたことがあるんだけど、聞いてもいいか？」

「うん、いいよ。」

ちよつと二の足踏んだけど、この際思い切つて聞いてみることにした。

「ミクって、アンドロイドなのか？」

「…そういうことにはなってるけど、今の私の身体が機械で出来るだとか、それとも実は生身の人間だとかは、私にはわからない。普通の人が、自分の体内を100パーセント理解してるわけじゃないようにね。」

「…そっか。変なこと聞いて悪かったな。」

「ううん。当然の疑問だよ。」

俺はミクの方を見た。真顔で、ちよつと悲しそうな顔で、天井を見

つめている。

…何となく、手を握ってみた。

はつとして振り向いたミクに微笑みかける。

…表情に悲しみが徐々ににじみ出し、ミクはやがてしゃくりあげ始めた。

「うつ、ひつく…。」

ミクはゆっくり起き上がって、静かに手を離し、…俺にしがみついた。
てきた。

「嫌だ、嫌だ嫌だ嫌だ！私、うつ、まだ消えたくない！
ケイともっとずっと一緒にいたい！！」

…やっと、本音が出たな。

俺は伸ばしたままだった腕を戻し、ミクの頭を撫でた。

「うつ、うわあああぁん！」

…一緒に悲しむことしか、俺には出来ない。
少しでも、ミクのためになればいいけど。

俺はミクの頭を撫でながら、ミクのハンカチになり続けた。

しばらくして、ミクが泣くのを止めた。

「…気はすんだか？」

「うん、ありがと。…ごめんね、急に。」

「いいんだ。」

「…私からも、一つ聞いていい？」

「いいよ。」

「もしも私がアンドロイド…ロボットだったとしたら、ケイはどう思う？」

「何も変わらないよ。ミクはミクだ。」

ミクはぐいっと顔を寄せてきた。

「…本当に？」

潤んだ瞳で見つめてくる。丸裸にされそうだ。もちろん、内面的な意味で。

「本当だよ。」

「…やっぱり、ケイにインストールされてよかった。」

「光荣だね。」

俺がミクの肩に腕を回すと、ミクは目を閉じた。

…俗に言う『キス顔』ってやつか。実際にミクのこういう顔を見るのは2度目だけど、…やっぱり可愛い。

この顔を見たら、男ならキスしたくならない奴はいないだろう。

俺はミクの目元に残った涙の残滓を指で拭いとり、はっとしたミクにキスした。

…現実に止まってる訳じゃないけど、これが世界の時間を止める唯一の術なんじゃないだろうか。

「ケイ…。」

「どうした？」

「私のこと、…忘れないでね。」

俺はミクの肩に回した腕に少しだけ力を入れて、抱きよせた。

「…忘れられるわけないだろ。」

「…ありがとう。」

「そろそろ夕飯だ。食いに行こうぜ。」

俺が腕をほどいて離れようとする、ミクはぎゅっと抱きついてきた。

「お願い、もうちょっと…。」

「…わかった。」

しばらくして、俺達は夕飯を食いに一階に降りた。

…今日の夕飯にはやけにネギが多い。母さんも気をつかってくれて

るんだな。

俺は特別ネギが好きって訳じゃないけど、ミクがうまそうに食ってるからそれでよし。

夕飯を終え、風呂場に向かおうとしていた俺をミクが呼び止めた。

「ねえ、ケイ。…ちょっと、いいかな。」

「どうした?。」

「連れて行って欲しい所があるの。」

「どこだ?すぐ連れてってやる。」

「あの…川原。」

「この間行った所か?。」

ミクは黙って頷く。

「わかった、すぐ行こう。」

時間は午後8時ちょうど。俺達は決まった形で自転車に乗った。

…ミク、軽いな。

「着いたぞ。」

川原までは10分かつらずに着いた。

「うわぁ…昼間とは全然違うね。」

「まあな。」

川原の対岸では、行き交う車のヘッドライトとテールランプが輝いている。

「寒い…。」

「これ使えよ。」

俺は自分の手から手袋を取り、ミクに渡した。

「えっ、でも…。ケイはいいの？」

「いいんだ。ちょっと大きいかもしんないけど、風を遮るから大分違うと思うぜ。」

「…ありがとう。」

2人で芝生に座った。

「どうしてここがよかったんだ？」

「本当はどこでもよかったの。でも、やっぱり初めて来たここが忘れなくて。」

「そうか。」

早くも話題が尽きたかと思われたが、ミクは少し俯き、また口を開いた。

「…やっぱり、私は普通の女の子にはなれないんだね。」

「えっ？」

「やっぱり、たかだか体験版ソフト音源が体を持ちたいなんて願っちゃいけなかったのかな。」

「そんなことはない！」

ミクはびっくりしてこっちを向く。

「たとえ神様仏様世間様が許さなくたって、俺が許してやる！」

「…ありがとう。」

つい熱くなって、立ち上がって大声で言った俺だったが、ミクの穏やかな笑顔のおかげで冷静になることができた。

「ごめん、びっくりしたよな。…悪い癖だな、気をつけないと…。」

ミクは黙って首を横に振り、立ち上がって、俺にキスをした。

「そんなことない。ありがとね、私の為に一生懸命になってくれたんだよね。…すごく、嬉しかったよ。」

「…そうか、ならよかった。」

2人とも、自然に笑顔になった。

その時だった。

ミクが、がくりと膝から崩れ落ちた。

考えるより先に体が反応し、急いでミクを抱き抱えた。…苦しそうに目を閉じている。

「おい、どうしたミク、しっかりしろ！」

俺は右腕でミクを抱えながら、左手でポケットを探りケータイを取り出した。

…時間は、9時半。もうこんなに経ってたのか。けど…。

「まだ時間はあるのに、どうして…。」

ケータイをしまい、ミクの様子を伺おうとすると、突然、ぱっとミ

クが目が開いた。

「error、error。エラーコード不明。重大な誤作動を起こしている可能性があります。直ちにVOCALOIDをアンインストールしてください。」

明らかに、ミクの意味とは関係の無いものだった。

「お前は正常だ！エラーなんか起こしてない！目を覚ませ！」

ミクの目からはいつもの優しさが消え失せ、ただただ無機質に目の前の虚空を見つめていた。

「…！」

堪らなく悲しくなって、俺はミクの細くて今にも折れてしまいそうな体をぎゅっと抱きしめた。

「ケ…イ…？」

はっとしてミクの顔を見ると、そこにはいつものミクがいた。俺はもう一度、ミクを抱きしめた。

「…苦しいよ…。」

「…ごめん。」

俺は少し、腕の力を弱めた。

「…ごめん…ね…？最期まで…心配…かけて…。やっぱり…私…口
ボツ…ト…だった…みたい…。」

「もう、いい…もういいから、無理してまで喋るな。」

「は…はは。バレてた…か…。」

ミクはゆっくりと震える手を伸ばし、右腕で俺の肩のところを掴んだ。

その力はひどく弱々しく、勝手に涙が出てくるくらいに悲しくなった。

「そん…な…顔…しないで…。最期くらい…笑顔で…看取ってよ…。
ね…？」

ミクは空いていた左手で俺の頬を撫でた。
涙が止まらない。それどころか勢いを増していた。

「ほらほら…、男の子…でしょ…?」

そう言ってミクは左手で俺の目の涙を拭おうとするが、それすらも
うまくいかない。

「この状況で、男も女も関係あるかよ…。」

「へへ…へ。女の子の…特け、げほっ、げほっ!」

「もういい…もういいよ、ミク。」

ミクは息を吐き出すのもやっとというように見える。弱々しく脈打
つ彼女の心臓の鼓動が、終わりが近いことを知らせる。

「…大…好き…だよ…。ケイ…。」

「俺もだ、ミク。」

ぴくつと震え、少し体がかたくなった程度だったが、ミクは体に力を入れた。

それだけで、何がしたいかわかる。

おそらく最後のものになるであろうキスは、時間を止めてはくれなかった。

「ありがと…ね。流石…だね。あれだけで…私…が…何をしたいか…わかる…なん…で。」

「顔を見ればわかるよ。」

「そう…。今まで…たったの…2週間…だったけど…ありがと…ね。私…世界で…一番…幸せな…体験版ソフト…だね。」

「ああ、そうだな。」

言っと、また涙が出てきた。

「バイ…バイ…。また…ね…。」

次の瞬間、ミクの体から力が抜け、右手が俺の肩からずるりと滑り落ち、首がかくりと後ろに反れた。

「！…ミク…？」

返事は…ない。

受け止めたくない現実が、そこにはあった。

「おい、しっかりしろ、ミ…。」

二回目は、名前を呼べなかった。

ミクの体が、左半身から、さらさらと金色の粉になって、風に流れていってしまったから。

その時の音が、目で見た感じでは「さらさら」としか言い表せないのに、「さらさら」という音はしなかった。

聞こえてきたのは、紛れもなく、2人で必死に練習したあの歌だった。

―舞い落ちる桜、ひとひら、

―私の手に、ひらり落ちる。

―聞こえますか、私のココロ。

―泣いてもいいのですか…。

その後俺の腕の中には、洗濯時以外肌身離さず羽織っていたと後で母さんに聞いたグレーのパーカーと、さっき貸した手袋しか、残っていないかった。

俺は、ひたすら泣いた。まだ温もりの残っていたパーカーを抱えて。

第15話…別れの後のリテノート

それから、まるで脱け殻のように毎日を過ごした。

見るものの全てが、色褪せているように見えた。

好きだった歌を聴いても、何の気晴らしにもならなかった。

部活には復帰したものの、以前のように燃えることはできなかった。成績も下がる一方、授業にも集中できない。

…俺がこんな風になっちまうことを、あいつが望んでいる訳がないけど、…やっぱり、シヨックは大きかった。目の前で消えちまったんだからな。

俺とミクにとつての思い出の場所だったあの川原は、俺にとつての馬嵬になってしまった。

さながら長恨歌の玄宗のように、帰り道にあの川原の前に差し掛かると、何度も何度も立ち止まりそうになった。

そして、そんな状態の中テストが始まってしまった。

どうせぼろぼろだ。一応ベストは尽くしたが、こんな状態でいい点なんかとれる訳がない。

ひとまずテストを終え、部活も休みなのでなんとなく帰路についた俺は、いつの間にかあの川原の前に自転車停めていた。

そして、まるで最初から決めていたように、あの日と同じ場所に体が勝手に動いた。

そこに座り、川を眺めながら考え事をした。

…なあミク、俺はこれからどうしたらいい？
もう、何にもわかんねえや。

今の俺は、どうしようもなく空っぽだった。
そこへ。

「ねえ君、学校はどうしたの？」

大学生から社会人になりたてくらいの年に見える女の人が声をかけてきた。

俺はありのままを答えた。

「今日はテストで、部活も休みなんで早く学校があがったんですよ。」

「よかった。学校サボって来てるのかと…。」

「俺の普段着は学ランじゃないですよ。」

俺の通う高校の制服はブレザーではなく学ラン。
田舎だとたまに言われる。自分でも田舎だと思う。

「あはは、それもそうだね。」

その人は俺の左側に座った。

「何か悩みでもあるの？」

彼女は唐突に、単刀直入に切り出した。

「…やっぱり、そう見えますか。」

「うん。今にも川に飛び込みそうな顔してたよ。」

ずいぶんはつきりと物を言ってくれる。

「…そうしたら…。もし川に飛び込んだら、あいつのところに逝けるのかな…。」

自分で自分のマイナス思考に驚いた。

つい口をついて出てしまった言葉。かなりぼそぼそと言ったが、彼女はそれを聞き逃さなかった。

「駄目だよ。どんな事情があろうと、それだけは絶対に駄目！」

「そう、ですよ。俺、どうにかしました。」

…本当に、今の俺はどうにかしている。

「…ねえ、何があったか、聞かせてくれないかな。多分、内側に溜め込んでおくより吐き出しちゃった方が楽になれるよ。」

「…そうですね。」

俺は一瞬ためらったが、この人の言うことはもつともだ。

ありのままを話しても長くなるし絶対に理解してくれないと思ったので、できるだけぼかして端的に説明することにした。

「ここで…消えちゃったんです。」

「…何が？」

「俺の…彼女です。」

「どづいつこと？」

「詳しいことはお話できませんが…、ここで消えちまったんです。きれいさっぱり…跡形もなく、2人で必死に練習した歌だけを遺して。」

途中から、涙声になるのがわかった。

「今でも実はその辺の電柱の影とかに隠れてて、ひょっこり出てきて俺を驚かすんじゃないか、歌が聞こえてくるんじゃないかってちよつと期待したりするんですけど…たまに似たような歌声が聞こえてきてもそれは彼女のものじゃなくて…やっぱりあいつは…どこにもいなくて…！探しても探しても…どこにも…！！」

ミクがもついないってことはインストールした俺が一番よくわかってるのに、心がそれを認めようとしない。つい、探してしまう。

…情けねえな。

急にミクの最期の顔が浮かんできて、俺は体育座りしている膝に顔を埋めるしかなかった。

「…いまいち話がのみ込めないけど、軽々しく聞いちゃいけないこ

とを聞いちゃったみたいね。…ごめんなさい。」

俺は顔を伏せながら首をふった。

「…大切な人だったのね。」

「…はい。」

少しだけ沈黙が流れた後、ようやく落ち着いた俺はまた口を開いた。

「…ほんと、わかってたんです。こうなることは。」

「え？」

「もともと、あいつに許された時間は2週間しかなかったんです。俺は、現実から目を背け続けました。…最後まで。ほんとに、俺は弱い男です。」

はは、と自嘲気味な笑いがこぼれた。隣の方は、余計に不思議そうな顔をしている。

「話をあわせるのが大変ですよ、すみません。でもこのようにしか、俺は真実を語れないんです。もう少し、お付き合い頂けますか。」

「ええ、いいけど、…大丈夫？」

「え？」

彼女はおもむろに鞆からハンカチを取り出し、俺の目尻から頬のあたりをぬぐった。

…気付かなかった。涙が流れていることに。

「すみません。ありがとうございます。」

「いいのよ。なんだか私が泣かせてるみたいだったし。」

「いえ、そんなことは…。」

ちよつとあわてる俺を軽く微笑んで受け流し、正面の川の流れを見つめて女の人は口を開く。

「私の彼もね、今入院してるんだ。」

「！　そうだったんですか…。」

そういえば、この川原は俺が入院していた病院に近い。

「バイクの事故だね。友達とバカなことやってたんだってさ。ほんとに、将来のこととかそろそろ真剣に考えて欲しいなあ、なんて考えてた矢先の出来事だったの。もう、おもいつき横っ面ひっぱたいてやったわよ。」

…ちょっと前の俺にそっくりだ。みんなに、心配かけちゃったからな。…あいつにも。

「…その人はとても幸せな人ですね。」

「どうして？」

「…心配だったんですよ、その人のことが。」

「えっ、あ、ちょ、そんなことは…。」

「心配してくれる人がいるというのはとても幸せな事なんだって、あいつに教わったんです。」

「そう…だったんだ。」

だんだん女の人の声が小さくなっていく。

「今思えば…俺、あいつに心配ばっかかけてたなあ…。」

考えたことがつい口をつく。

「あいつにはもっと楽に、もっと気ままに生活してほしかったんです。でもあいつはいつでも俺本意だった。それが今でも心残りで…。」

「

女の人からの返事は、とても意外なものだった。

「わかってたと思うよ、その子。」

「えっ？」

「なんかその子の気持ち、ちょっとだけわかった気がするんだ。」

「……あいつは、どんなことを考えてたんです？」

「その子、きつと……あくまで憶測だけど……君に会えなかった、もしくは連絡をとりあっただけ、ってことはなかった？」

「えっ、ええ、ありました。」

ミクがパソコンを出る前の状態がそれにあたるだろう。事実、ミクはそのことに関して俺に悩みを打ち明けている。

「その後に君たちは直接逢えるようになった。違う？」

「その通りです。」

「君もそうだったと思うんだけど、その子、直接逢えるようになったすっごく嬉しかったと思うの。だから、君に出来るだけのことをしてあげたかったんだと思う。きつと、君も同じことを考えてたんでしょ？」

「はい。」

……大体あたっている、と思う。

厳密に言えば、ミクはきつと出てきたときからそう思っていただろう。俺はと言えば、ミクが最初のキスをするまでそれどころではなかった気がする。

さらにミクの話によれば、彼女は吸い出された時、自分は死んだものだと思っていたらしい。

それなら、俺よりも激しい気持ちで、あいつは抱いていたかもしれない。

「つまり、その子も君も、いちばん欲しかったのはお互いの心だったってこと。君は精一杯その子に心をあげようとした。その子も一生懸命あげようとして、たまたまこっつんこしちゃったただだよ。その子はきつとその事をわかった。ちょっと困っただろうけど、すっごく嬉しかったと思うよ。」

「……どうして、そこまでわかるんです？」

「ん……境遇に合致する点があるのと、あとは……勘だね。」

この街の女の勘は鋭すぎるな。

そしてまた、意外な提案をしてきた。

「ねえ、その子の為に今出来ることって何かないの？」

「……そんな、本人がいないのに……。」

「本当に？本当にその子はもういないの？私には君の言う『消える』がいまいちよくわかんないけど、きつと、今の君たちに現実的な距離は関係ないでしょ？」

……俺は、はつとした。あいつは確かにいなくなってしまった。……けど、心はまだあるかもしれない。俺が真に期待していたのはそれかもしれない。

それに気づいた直後、頭によぎったのはミクの最期の言葉。

……俺に出来ること……。まだあるかもな。

今から頑張れば、もしかしたら春風がミクの歌声を運んでくれるかもしれないな。

根拠はないけど、……いや、根拠はミクの最期の言葉だけで十分だ。

……これにかけてみよう。

俺は膝を押して立ち上がった。

「ありがとうございます。あいつの為に出来ること、……あるかもしれない。」

女の人は微笑んだ。

「あら、そう？…いつの間にか、目が生き返ったわね。…頑張ってるね。」

「はい。」

俺は女の人にお礼を言って、帰路についた。

…待ってるよ、ミク。

エピソード…アンダンテ…ゆっくり、歩くように…（前書き）

お待ちせ致しました、最終話です。

長い間読んでいただきありがとうございました。

エピソード…アンダンテ…ゆっくり、歩くように

——わかっていた。

——私には、許された時間がとても少ないこと。

——わかっていた。

——抱いてはいけない感情を持ってしまったこと。

——知らなかった。

——あなたがそれほどまでに私を必要としてくれていたこと。

——驚いた。

——あんなに烏澁がましい願いを持ってしまった私を無下にしたりせず、真剣に向き合ってくれたこと。

——ねえ、どうして？

——私の…こんな使い捨ての道具のために、そんなに悲しんでいるの？

——私、そんな顔見たくないよ。

——楽しかった、あの幻みたいな2週間の中で見せてくれた笑顔を、どうすればまた見せてくれるの？

——…そういえば、どうして私はこんなことを考えているんだろう。とつくにアンインストールされて、消えてしまったはずなのに。

そんな考えがふと浮かんだ直後、彼女の思考は薄桃色の波に飲み込まれた。

「…なあ母さん。」

「何？」

「あいつ…帰ってくるかな。」

とある一軒家の和室。出窓の近くにはノートパソコンが置いてある。座椅子に座り、そろそろ仕舞おうかと考えている電源を抜いた電気炬燵に足を入れて話す男女。

男は高校生が大学生くらい、女はそろそろ壮年に差し掛かるうかという感じだ。

「さあね。それはケイとあの子次第じゃないかしら。」

春の陽射しは心地よく、庭には小さな桜…本当に、植木鉢に植えられているほど小さな桜だが…が、花を散らしている。

「俺も？」

女はこくりと頷く。

「ケイが帰ってくるって信じなかったら、絶対帰って来ないと思うわ。」

「…そうだな。」

男はそう応じると、何か思いにふけるように庭の桜へと目を移した。

某大手通販サイトに注文があつたのは3日前。内容は「初音ミク」が1つ。

商品を届ける為に荷物を積み込み、2人の男が車に乗り込んだ。

ハンドルを握るのは20代後半くらい、助手席に乗り込んだのは30代前半くらい。

ハンドルを握る男が運転しながら助手席の男に声をかける。

「先輩、知ってます？」

「何をだ？」

ハンドルを握りながら愉快そうに笑って話しかけてくる後輩に、助手席の先輩はちょっと冷やかな目でチラリと見ながら返す。

「今回の商品に『初音ミク』が入ってるんですよ。」

「それがどうした？」

「正直言って、今時もっと新しいVOCALOID出てるじゃないですか。何でわざわざちよっと古い初音ミクにしたんでしょうね。」

「理由はいろいろあるだろ。声が好みだとか、キャラが好きだとか……。」

「キャラが好きだとしても、インストールしてもキャラが出てくる訳じゃないですけどね。」

「……まあそうだが……。」

——舞い落ちる桜ひとひら、私の手にひらり落ちる。

先輩はクスクスと笑いながらハンドルを握る後輩にそう返し、チラリと冷やかな視線を再度送った時、後輩の笑いが止まった。

「……おい、どうした？」

訝しげに先輩が訊ねる。後輩がこんな視線を送った程度で緊張感が増す男ではないことは十分承知しているので、こんな風に真顔になるのはかえってあやしかった。

そして後輩は小さなディスプレイ…CDやMDのメニュー、ラジオのチューニングが表示されるあそこ…を見てこんなことを呟く。

「今、何か聞こえませんでした？」

「はあ？」

先輩はすつとんきょうな返事を返した。ということは、先輩には聞こえなかったということだ。

「何かって、何だ？」

「多分、ですけど…歌です。」

「歌なんて…、」

——聞こえますか？私の心。泣いても良いのですか…。

「あ…。」

「な、何なんでしょう、これは…？」

「まっ、まさかな、あはは…。」

先輩は乾いた笑い声を上げたが、後輩が横目で見た顔は明らかに青白い。

「幽霊…。」

「う」を発音したタイミングで先輩は耳をふさいだ。

「わー、わー！やめろ！俺の前でその名詞を口にするな！」

「先輩、ひょっとして…怪談とか、ホラー映画とか…。」

「…大の苦手だ。」

恥ずかしそうに言う先輩。後輩は奇しくも先輩の意外な一面を発見

することになった。

「幽霊なんて…。そんなものいませんよ。」

「じゃあ今の歌はどう説明するんだよ？」

冗談めかして言う後輩に子供のような口調で反論する先輩。

「…次のパーキングで休憩とりましょう。その時に音の出そうなものが積み荷にないか探しましょうよ。」

「そうだな…。それまで幽霊と同乗かよ…。勘弁してくれ…。」

疲れたような口振りではやく先輩に、後輩は小さくため息をついた。パーキングエリアに着いて積み荷を漁るも、自発的に音を出しそうな物は何もなかった。先輩は血眼になって探していたが、結局見つけることはできなかった。

パーキングエリアを出て、しばし2人は無言。2人共はつきりとその顔に恐怖を貼り付けていた。

そのうち先輩がおもむろにFMラジオをチューニングした。折よく聞こえた渋滞情報は彼らの道のりの中には運よく渋滞がないことを報せた。

高速道路を降りて一般道に入ると、川沿いに見事な桜並木が見え、視界が危うい程の桜吹雪が吹いた。

その時、それはまたやってきた。

——わたし、あなた、出会ったときは枯れ葉舞い散る9月のあの日。

——あなた1人、私見ていた。眠った私起こしてくれた。

後輩がひきつった顔でチラリと先輩を見ると、先輩はもはやある種のうつとりとした顔をしていた。

「……いつそのこと、楽しんでみるか？」

後輩はそんな風に呟き、頭に直接響くような歌声に耳を傾けた。こうしてみると、幽霊も案外悪いものでもないかもしれない。

信号待ちになり、さつきより多少弱まった桜吹雪を浴びながら停車止まった時に後方の車を確認するのが後輩の運転手の癖になっている。

その時、運転手は信じられない物を見た。

人だ。少女が、なにやら箱を抱えて、窓の外を見ながら座っている。そして、口が動いている。

「おいおい、嘘だろ…?」

こうしている間にも歌は断続的に響いてくる。
もはやこれしか考えられない。

歌は、少女が歌っている。

そして、運転手には少女の姿に見覚えがあった。

「ま、マジかよ…!」

とやっている間に信号が青になってしまい、後ろの車にクラクションを鳴らされてしまった。

——ありがとう。

少女の歌声が、まるで脳髓を直接震わすかのごとく直接響いてくる。

歌に酔いそうだったが、それでもなんとか、目的地に到着した。
歌が止んだ。

「来たな。」

男が炬燵から抜け出す。

女は男の背中を少し目を細めて見送った。

「先輩、起きてください！」

「んあ、俺いつ寝た？」

「わかりませんよそんなこと。帰りは先輩の運転ですからね。」

「わぁーってるわぁーってる。ほら、お客さんに品物を持ってくぞ。」

「まったく、調子いいんだから…。」

とぼやいて外に出る前に、

「先輩、さっき女の子が…。」

と言おうとしたその時、

ガラガラガラッと音を立てて後ろのドアが開いた。

『!?!?』

2人は同時に同じリアクションをとった。

ケイと呼ばれた男が代金と印鑑を持って庭に出ると、普通は人が乗るはずもない場所のドアが開き、見覚えのある人影が飛び出してきた。

目に涙をいっぱいためて。

家の前の段差でつまずきかけても、前に進もうとする。

庭先の飛び石を蹴って飛び込んできた人影を、ケイは全身で受け止めた。

「ケイ…、ケイ…！会いたかった…！」

「俺もだよ、ミク。」

ケイの後ろでは、彼の母親が嬉しそうに微笑んでいる。

少女の後ろでは、2人の男が哑然としていた。

2人のうち、年上に見える方が我にかえり、あわてて携帯電話を取り出した。

「部長、大変です！」

「どうした!？」

彼は電話の向こうの上司に状況を伝える。

「女の子が、いえ初音ミクが車の中から飛び出てきました!」

彼は自分でもなんて的を射ない説明なんだろうと思ったが、こうとしか言えない。

上司の反応は意外なものだった。

「それは、〇〇県 市の□□□への配送か？」

上司は、配送先の住所を1つの狂いもなく当てて見せた。

「…そうですが…。」

「そうか…、そうかそうか! あっはっはっはっは!」

電話の向こうの上司が豪快に笑う。

もはやついていけない彼は、乾いた笑い声を出すほかなかった。上司はなおも続ける。

「よし！手続きして印鑑と料金もらったら終わりにしていいぞ！今日は3人で呑みに行くか！」

「はあ…わかりました。」

彼は電話を切り、抱き合う2人のもとを通り抜けて母親の方へ向かおうとした。こんな2人の邪魔はしたくない。だが、それをケイが制す。

「すみません、品物ここのんで俺に手続きさせてください。」

と言ってケイはミクの腕を指差した。そこには薄い段ボール箱がしっかりと握られていた。

「あ、はあ…。」

一通りの手続きを済ませると、2人の男はそそくさと帰っていった。その後、彼らが部長…啓大の父親と呑みに行ったのは言うまでもない。

「ねえケイ、早速悪いんだけどさ。」

「なんだ？」

「早くしないと私、危ないかも。」

「ええっ!？」

「早くパソコンにインストールしてくれないと…。」

「任せる。」

言うが早いか、彼はミクを家に上げ、「初音ミク」をパソコンにインストールした。

「ふう、これで一安心。」

「平気なのか？」

「うん。」

「そっか、よかった。じゃあ、改めてよろしくな、ミク。」

啓大が晴れやかな笑顔で言うと、

「うん！」

頬を少し赤らめて返すミク。

「よし！これから仕事増えるぞ！」

「わーい！頑張る！」

そう、これは終わりであり、始まりでもあった。

- 完 -

エピソード…アンダンテ…ゆっくり、歩くように…（後書き）

最終話、いかがでしたでしょうか？

書き始めた当初、この小説は3話程の短い連載になる予定でした。

ところが、幕間1を書いた時点で3話でまとめるのは無理という結論が出て、今に至ります。

この小説を書いた上で心残りなのが、ミクをはじめとする主要キャラクター達が重たくなりすぎた事です。

ミクをここまで病ませる予定はありませんでした。気を悪くされた方、申し訳ありません。私の力不足でございます。

重ね重ね、私のような稚拙な者の文をここまでの長い間読んでいただきありがとうございます。

アウトロ…桜を見に行こう（前書き）

前話で完結の予定でしたが、よろしければもう一話お付き合い下さい。

アウトロ…桜を見に行こう

あれから数日。

未だにミクが帰ってきたことの喜びが冷めやらない俺は、つたないながら再び作曲を始めた。

ミクもよく歌ってくれている。

オケの方はほとんど出来ていないが、そのうち機材を揃えて本格的にやるつもりだ。

前よりじっくりと打ち込み、チェック、調整が出来るから、切羽詰まることもない。クオリティも妥協しない。

…ミクには内緒だが、前回歌わせた部分には不具合が所々あった。今度こそ完璧に仕上げよう。

俺が打ち込む横には嬉しそうに画面を覗き込むミクがいる。

2人でああでもないこうでもないと言いながら打ち込む日々は充実していた。

だが、俺は何か重要なことを忘れているようではなかった。

そして、答えは歌の中にあった。

…そうだ、桜、だ。

せっかく咲いているんだ、一度も見に行かないのではもったいない。

ミクにも冬の寂しい枝しか見せていない。この機会を逃す手はない。
俺は一年半ぶりに、彼女をデートに誘うことにした。

「なあミク、今週の土曜、デートにいかないか？」

「どうしたの、急に。」

「家で打ち込みするのも有意義で楽しいけどさ、たまには外に出ないか？」

「ふふ、懐かしいね。」

「そうだな。」

こうして、あっさりとデートの日取りは決まったのだった。
後は俺のセッティング次第だな。
さて…桜が見える場所、ということで回るところは大体決まるんだが、プランはどうしよう？
こつというのは、この手の先輩に話を聞くに限る。

「母さん、土曜にミクと桜を見に行こうと思うんだけど、何か持ってたらしいものとかある？」

「自分で考えなさい。お弁当だけは用意してあげるから。」

… おや、意外と冷たい。

前はあんなにノリノリだったのになあ、もう後はなるようになれって事なのか？

… 弁当と水筒以外に何も思い付かない。

後はタオルとか、レジャーシートとかあればいいかなあ。

そんな感じで、デートプランは結構アバウトに決まった。
どうやら俺は、この辺の進歩はしてないらしい。

俺があれこれと思案していた数日間、母さんは何度かミクを誘ってどこかに出掛けていた。

「どこ行くの？」

「秘密。」

「ちえつ。」

なんだか除け者にされたようでちょっと面白くないが、男には踏み込めない領域もあるだろう、と思い直して自分の準備に専念した。

そして約束の日、俺は母さんの謎の行動の意味を知ることになる。

朝飯と洗面を早めに済ませて、荷物の準備と自転車のチェックを終わらせた時だった。

「そろそろ行く？」

声をかけられて振り向くと…そこには。

淡いピンクのワンピースに身を包み、髪留めに花をあしらったミクが立っていた。

…一応補足しておく、ミクが帰ってきてからいろいろと慌ただしく、買い物に行く余裕があまりなかったのだ。

俺はそうでもなかったが、俺の所持金では洋服を買うのはちょっと厳しかった。俺がデートに誘ったのは、それらが一段落した時でもあった。

それまであの目立つ服一張羅…ということではなかったが、借りていたのは姉のジャージ等。

…こう言うてはなんだが、そこまですぐいいものではなかった。

ミクは何の不満もなく着ているように見えたが…本心ではどうだったか。

なので、外出は犬の散歩で家の周りを回るだけにとどめていた。

友人の何人かに目撃されたようで冷やかすようなメールが来たりしたが、まあ、あまり気にするようなことではなかった。

さて、本題に戻ろう。

つまり、母さんはミクと服を買いに行っていたということだ。

淡いピンクは桜を意識した色なんだろうか？それを本人がわかって着ているかは不明だが、とにかくとても嬉しそうだ。

「この間はそれを買に行ってたのか。…よく似合ってる。」

「うん。…ふふ、ありがとう。」

「よし、じゃあ行こうか。」

「楽しみだね。」

「そうだな。」

二人乗りの感覚を忘れていないか心配になったが、幸いにも懐かしさを感じる余裕すらあった。

時折見える桜に、ミクが「わぁ〜」と小さく歓声をあげている。

「こんなのはまだまだ序の口だぞ。もうすぐもっとすごいところに着くからな。」

最初に行く場所は決まっていた。一番目に行った、川沿いの桜並木家から15分もかからないそこは、見事な桜吹雪で出迎えてくれた。

「ねえケイ、ここって…。」

「覚えてたか。そう、あの時に来た桜のトンネルだ。今度こそ、ちゃんと花が見せたくてさ。」

「すごい綺麗…。」

「そうだろうけど、ここは平地ですぐ来れるし、場所が狭いから競争率が高いんだよな。」

実際のところ、数少ないお花見席はすべて青いレジャーシートに覆われていた。

「…ミク、次どこ行くか、わかる？」

「まさか…。」

「うん、そのまさか。…せっかくきれいな服で来てくれたところ悪いけど、あそこに登ろう。」

「あう…。」

あそことは、やはりあの時に行った山の上である。

「あそこの方が見晴らしがいいし、場所が広くて競争率も低い。…桜もいっぱいあるし。嫌か？」

「ううん、行きたい。」

「OK、じゃあ行こうか。」

同じ二人乗りで、あの日と同じ道を辿って行く。

斜面の途中から自転車を降りて、花を見ながら休み休み進む。

何も変わらない。変わったのは暖かい日差し、ひらりと舞う花弁が見えること。

頂上は、あの時とはうって変わって人が多かった。

「ケイ、大丈夫なの？」

「任せとけ、花見の出来る所、ベンチの位置は大体頭に入ってるかな。」

開けた頂上から少し林に分け入ったところに空いた席を見つけた。

「ここでどうだ、花も見えるし。」

「いいね。」

「じゃあ昼飯にするか。」

「お腹空いたよ。」

「ははは、俺もだ。」

ベンチにシートを広げ、膝の上に各々の弁当を開ける。

「気を付けろよ、この山は時々鳥が弁当をとりに来るからな。」

「それ、だじゃれ？」

思ってもみなかった返答に噴き出しそうになる。

「ははは、いや、本当だ。気を付けろよ？」

「はい。」

それから2人で弁当をつつく。

人々の声は遠く、ここは風が吹き抜け、桜の花弁を運んでくるだけだ。

鳥は、幸い小鳥が遠くでさえずるだけで弁当を狙われることはなかった。

時間がゆったりと流れていた。

「風が気持ちいい……。」

「そうだな。」

弁当を平らげて、そんなことを言いながら2人で風に身を任せていると、隣の肩に重みが。
振り向くとミクが寝息を立てていた。

こんな日々がいつまでも続けばいい、と改めて思った。

おしまい。

アウトロ…桜を見に行こう（後書き）

感想を書いてくださった方の中に「続編希望」と言ってくくださった方がいらっしゃったので、僭越ながら書かせていただきました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0494i/>

2週間の歌姫

2011年4月11日12時57分発行